

鳥坂寺跡発掘調査報告書

2011年7月

柏原市教育委員会

鳥坂寺跡発掘調査報告書

2011年7月

柏原市教育委員会



金堂基壇北面階段



「鳥坂寺」墨書土器

はしがき

柏原市は大阪府の中央・東部に位置し、大和川の豊かな水と、金剛・生駒山地の縁に恵まれた大阪市近郊の小都市です。古代には、藤原京や平城京など都が置かれた大和から西方諸国への出入り口として、多くの人々が往来・集住し、大陸起源の先進的な思想や文物がこの地にもたらされました。市内には、こうした歴史を背景に数多くの遺跡が残されており、本書で報告する鳥坂寺跡もその一つです。

鳥坂寺は、奈良時代の正史である『続日本紀』にも登場し、発掘調査によって明らかにされた遺構や遺物は、わが国の仏教文化や歴史の解明に大きな役割を担うものと評価されています。

柏原市では、重要な歴史遺産であるこの鳥坂寺跡を、地域に暮らす人々を結びつける紐帶として、また未来を展望するための指針として位置づけ、保存・活用の策を講じていきたいと考えています。発掘調査同様、今後ともご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

2011年7月

柏原市教育委員会

例　　言

- 1、本書は柏原市高井田に所在する鳥坂寺跡の発掘調査報告書である。
- 2、鳥坂寺跡は、遺跡名としては所在地名から高井山庵寺とも呼ばれるが、本書では、基本的に鳥坂寺跡の名称を用いた。
- 3、調査は大阪府教育委員会、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、柏原市教育委員会が実施した。
- 4、平成21・22年度の発掘調査および遺物整理は柏原市教育委員会文化財課が桑野一幸・山根　航を担当者として実施した。発掘調査期間は平成21年9月14日～平成22年4月26日、平成22年6月28日～8月30日、平成22年11月1日～12月2日である。
- 5、平成21・22年度の発掘調査では、調査について市民歴史クラブ（柏原市立歴史資料館所属）から、石材の観察について奥田　尚氏から、講堂跡出土金属製品（八双金具・鉄釘）の取り上げ・X線撮影・保存処理について独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所保存修復科学研究室から、それぞれ多大なるご協力をいただいた。
- 6、平成21・22年度の発掘調査および本書の作成では、地権者の方々をはじめ以下の諸氏・諸機関からご協力・ご指導をいただいた。記して謝意を申し上げます。（順不同、敬称略）

大脇　潔　塙口義信　坂井秀弥　島田敏男　森　郁夫　上原真人　上田　睦
綱　伸也　高妻洋成　脇谷草一郎　今井晃樹　林　正憲　三宅正浩
鳥坂寺跡調査検討委員会　文化庁　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
大阪府教育委員会　サンヒル柏原　天湯川田神社　中井萬樹園　高井田町会
- 7、本書で使用した方位は全て国土座標に基づく座標北を示し、遺跡周辺における真北は座標北から0°12'東に偏位し、磁北は座標北から西に6°59'偏位している。座標値は世界測地系（測地成果2000）に基づく国土座標第VI座標系の数値である。また標高は全て東京湾平均海水位（=T.P.）+値であるが、「T.P.+」は省略している。
- 8、本書で使用した土色および遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会事務局監修・㈱日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（1994年版）に準拠している。
- 9、本書の執筆は第1～3章・第4章第6節・第5章を桑野、第4章第1～5節を山根が担当し、桑野が編集した。また第4章第7節は奥田　尚氏に玉稿を頂戴した。

目 次

巻頭図版　　はしがき　　例言　　目次

第1章 調査の経緯と体制	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査目的と方法	2
第4節 調査の経緯	3
第2章 位置と環境	6
第1節 位置と周辺の地形	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 寺名－高井田庵寺と鳥坂寺－	9
第4節 高井田遺跡	11
第3章 調査の概要	13
第1節 発掘調査前の鳥坂寺跡と採集遺物	13
第2節 主要伽藍の調査（昭和36・37年度、平成元年度）	16
第3節 寺域の調査（昭和58・59年度）	32
第4章 平成21・22年度の調査	39
第1節 塔跡	39
第2節 金堂跡	44
第3節 講堂跡	54
第4節 回廊跡	64
第5節 講堂跡周辺	75
第6節 遺物	83
第7節 石材の特徴とその採石地	107
第5章 調査成果の総括	112
第1節 鳥坂寺の立地と建物配置	112
第2節 鳥坂寺の創建から廃絶	116
第3節 鳥坂寺建立の歴史的背景	118
第4節 まとめ	120
参考文献	123

写真図版　　報告書抄録　　奥付

挿 図 目 次

図1	鳥坂寺跡・高井田遺跡調査地位置図	5
図2	鳥坂寺跡の位置と周辺の遺跡	7
図3	昭和4年発見の鶴尾	14
図4	柏原市立歴史資料館収蔵遺物	15
図5	昭和36・37年度発掘調査	17
図6	塔跡平面図	18
図7	金堂跡平面図・立面図	19
図8	講堂跡平面図	21
図9	昭和36・37年度発掘調査 金属製品・埴仏	23
図10	昭和36・37年度発掘調査 軒丸瓦（1）	26
図11	昭和36・37年度発掘調査 軒丸瓦（2）・軒平瓦（1）	27
図12	昭和36・37年度発掘調査 軒平瓦（2）	28
図13	昭和36・37年度発掘調査 平瓦	28
図14	昭和36・37年度発掘調査 文字・戲画平瓦	30
図15	昭和36・37年度発掘調査 鶴尾（1）	30
図16	昭和36・37年度発掘調査 鶴尾（2）	31
図17	昭和58・59年度発掘調査 遺構配置図	34
図18	昭和58・59年度発掘調査 瓦	36
図19	昭和58・59年度発掘調査 十器	37
図20	平成21・22年度調査区位置図	40
図21	塔跡1～3区 平面図	41・42
図22	塔跡1～3区 断面図	43
図23	金堂跡1区 平面図・断面図・立面図	45
図24	金堂跡2区 平面図・断面図・立面図	47・48
図25	金堂跡2区北側 平面図・断面図・立面図	49・50
図26	金堂跡 北・南階段地覆石組み合わせ模式図	52
図27	金堂跡2区 石列1平面図・断面（見通し）図	54
図28	講堂跡 碓石番付図	55
図29	講堂跡1～3区 平面図・断面図	56
図30	講堂跡4区 遺物検出（5層除去）状況平面図	57
図31	講堂跡4区 平面図・断面図・立面図	59・60
図32	講堂跡4区 石組1・鉄製品出土状況平面図・立面図	62

図33	扉板模式図・復元断面図	63
図34	講堂跡東1～5区 平面図	65・66
図35	講堂跡東1～4区 断面図	67
図36	講堂跡東5区 断面図	68
図37	講堂跡東6区 平面図・断面図	68
図38	講堂跡東3区 溝1検出（6層除去）状況平面図	70
図39	講堂跡西1～4区 平面図・断面図	73・74
図40	講堂跡西1～4区 断面図	75
図41	講堂跡西2区 遺物検出（6層除去）状況平面図	76
図42	講堂跡北東1区 平面図・断面図	77
図43	講堂跡北1区 平面図・断面図	78
図44	講堂跡北西1区 平面図・断面図	80
図45	講堂跡北西2区 平面図・断面図	81
図46	講堂跡北西3区 平面図・断面図	82
図47	平成21・22年度発掘調査 軒丸瓦（1）	86
図48	平成21・22年度発掘調査 軒丸瓦（2）	87
図49	平成21・22年度発掘調査 軒平瓦	88
図50	平成21・22年度発掘調査 丸瓦（1）	90
図51	平成21・22年度発掘調査 丸瓦（2）	91
図52	平成21・22年度発掘調査 平瓦（1）	93
図53	平成21・22年度発掘調査 平瓦（2）	94
図54	平成21・22年度発掘調査 平瓦（3）	95
図55	平成21・22年度発掘調査 平瓦（4）	96
図56	平成21・22年度発掘調査 平瓦（5）	97
図57	平成21・22年度発掘調査 陽尾	99
図58	平成21・22年度発掘調査 戯画平瓦・磚	100
図59	平成21・22年度発掘調査 土器（1）	101
図60	平成21・22年度発掘調査 土器（2）	102
図61	平成21・22年度発掘調査 金属製品	103
図62	平成21・22年度発掘調査 増輪・石製品	105
図63	平成21・22年度発掘調査 凝灰岩	106
図64	回廊推定図	113
図65	鳥坂寺の立地	114
図66	鳥坂寺の建物配置	115

表 目 次

表1	鳥坂寺跡調査一覧	4
表2	昭和36・37年度発掘調査出土遺物（瓦は除く）	24
表3	昭和36・37年度、平成元年度発掘調査出土軒丸瓦・軒平瓦	25
表4	鳥坂寺塔跡・僧房跡出土平瓦の特徴	35
表5	平成21・22年度発掘調査出土遺物（1）	83
表6	平成21・22年度発掘調査出土遺物（2）	84
表7	平成21・22年度発掘調査出土丸瓦の特徴	89
表8	平成21・22年度発掘調査出土平瓦の特徴	92
表9	鳥坂寺跡に使用されていた石材の石種と使用場所	108
表10	石材の石種の特徴とその採石地（1）	109
表11	石材の石種の特徴とその採石地（2）	110
表12	調査区分別軒丸瓦・軒平瓦数量	117

写真図版目次

巻頭図版 金堂基壇北面階段・「鳥坂寺」墨書き土器

図版1	鳥坂寺跡遠景
図版2	平成21・22年度 塔跡
図版3	平成21・22年度 金堂跡
図版4	平成21・22年度 金堂跡
図版5	平成21・22年度 金堂跡
図版6	平成21・22年度 講堂跡
図版7	平成21・22年度 講堂跡
図版8	平成21・22年度 講堂跡東（回廊跡）
図版9	平成21・22年度 講堂跡西（回廊跡）
図版10	平成21・22年度 講堂跡北東・北・北西
図版11	平成21・22年度 瓦
図版12	平成21・22年度 瓦
図版13	平成21・22年度 瓦・鶴尾
図版14	平成21・22年度 土器・施釉陶器・埴輪
図版15	平成21・22年度 金属製品・他

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査にいたる経緯

鳥坂寺跡（高井田庵寺）は柏原市高井田の丘陵上に所在する7世紀後半に創建された古代寺院跡である。付近では早くも江戸時代から瓦が採集されており、伽藍跡を南北に縦断するように大正14年から昭和元年に敷設された大軌電車桜井線（現近畿日本鉄道大阪線、以下近鉄大阪線）の工事でも相当量の瓦が出土したと想像されるが、この遺跡が一躍学界や世間で注目されるようになったのは、現在東京国立博物館に展示されている鶴尾が昭和4年に線路東側の葡萄畑で発見されてからである。その様子は新聞等でも大きく取り上げられ、記念碑までも建立されている。

昭和36年、線路西側の丘陵一帯が住宅開発予定地になり天湯川田神社が鎮座する丘陵も削平されることになったため、柏原中学校教諭であった山本昭はこの開発計画を大阪府教育委員会（以下府教委）に通報するとともに、神社境内の発掘調査を実施した。その結果、塔の心柱礎石や基壇を廻る雨落溝が検出され、線路東側の寺院跡と一連の遺跡であることが明らかになった。翌年には府教委と奈良國立文化財研究所（現独立行政法人国際文化財機構奈良文化財研究所、以下奈文研）によって從来からの伽藍推定地で発掘調査が行われ、遺存状況が極めて良好な金堂の基壇や講堂の礎石群が検出された。これらの成果によって住宅開発は中止され、埋め戻された遺構は葡萄畑や神社境内の地下に保存されることになった。

昭和40年代になると寺院跡東側の平尾山古墳群に当たる山地や丘陵地で住宅開発が計画されるようになり、關大阪文化財センター（現關大阪府文化財センター）や柏原市教育委員会による試掘調査を経て、昭和58年から62年にかけて高井田土地区画整理事業や国民年金健康保養センター（現柏原市健康保養センター「サンヒル柏原」）建設に伴う発掘調査を柏原市教育委員会が実施した。これらの調査では古墳以外にも多数の掘立柱建物群を検出したことから、以後集落跡としての高井田遺跡の名称を使用するとともに、寺院跡隣接地で僧房や食堂と推定される建物跡を検出したため、鳥坂寺跡の範囲を東側に拡大して理解するようになった。これらの遺構は幸いにも保存されたが、昭和50年代を中心とした開発の過程で寺院跡周辺の景観は一変し、宅地が主要伽藍のすぐ傍らまで及ぶことになった。なお平成元年には柏原市教育委員会が天湯川田神社拝殿建替えに伴う塔跡の発掘調査を行っている。

平成21年、「本市の市政運営方針」の中で寺院跡の保存を目的とする調査の実施が示された。柏原市教育委員会ではこの方針に基づき文化庁や大阪府教育委員会と協議を重ね、多くの地権者の協力も得て、遺構の現状確認や主要伽藍の範囲確認などを目的に翌22年12月までの期間に3次に亘る発掘調査を実施した。この間には、遺構の位置や方向性あるいは遺跡・遺構と地形との関係を明確に捉えるため空中写真測量も実施している。

第2節 調査組織

昭和4年の鶴尾の発見から昭和40年代の試掘調査まで、調査組織の主体は府教委やその委嘱を受けた関係機関であったが、その後の発掘調査は柏原市教育委員会が主体となって行ってきた。

保存を目的とした平成21年からの発掘調査では、調査方法の検討や調査成果を評価するための第三者機関の設置が喫緊の課題とされたため、平成21年10月1日に「鳥坂寺跡調査検討委員会」を設立し、委員会の指導の下、柏原市教育委員会が発掘調査を実施した。委員及び事務局の構成は、

委員長 大脇 潤（近畿大学文芸学部教授）

委員 塚口義信（堺女子短期大学名誉学長・名誉教授、柏原市文化財保護審議会委員長）

委員 板井秀弥（奈良大学文学部教授）

委員 島田敏男（奈良文化財研究所建造物研究室長）～平成23年3月31日

委員 水田克史（柏原市教育委員会学校教育部理事）～平成23年3月31日

事務局 柏原市教育委員会生涯学習部文化財課

であり、大阪府教育委員会文化財保護課技師をオブザーバーとして招聘し、職務として鳥坂寺跡の調査に必要な調査・研究、鳥坂寺跡の調査計画に関する意見具申、鳥坂寺跡の史跡指定に関する指導・助言を行うこととした。

第3節 調査目的と方法

昭和4年の調査は、鶴尾の出土状況を確認する調査。昭和36・37年の調査は、遺跡の保護を目的にした確認調査。塔・金堂・講堂跡について概ね全面的な発掘調査が実施された。昭和58年～62年の調査は、開発対象地の記録保存を目的にしたもの。その結果、一部の地域が遺跡に含まれることになった。平成元年の塔跡の調査は、神社拝殿下の遺構の遺存状況確認が目的であった。

平成21・22年の発掘調査は、調査検討委員会での討議と指導を得て、

- ① 既知の遺構の遺存状況と位置（世界測地系）の確認〔塔跡1～3区、金堂跡1・2区、講堂跡1～4区〕
- ② 中門・回廊の有無や位置の確認〔金堂跡2区、講堂跡東1～6区、講堂跡西1～4区〕
- ③ 講堂跡北側の遺構の有無の確認〔講堂跡北東1区、講堂跡北1区、講堂跡北西1～3区〕
- ④ 金堂基壇の構築時期や修復の確認〔金堂跡2区〕

などを目的として行った（図20）。調査地は葡萄や野菜の畑が多いため、掘削によって耕作物に影響が及ばないよう配慮しながら、まず周辺の地形情報等から既知の遺構の位置を求め、その成果に基づいて礎石等が予想される位置にトレーンチを設定した。調査の目的上、遺構の断ち割りを伴う断面観察は最小限に留め、④を目的とした金堂基壇の断ち割り調査でも、昭和37年調査の際に掘削されたトレーンチを再利用した。

なお調査後は、掘削土によって全てのトレーンチを埋め戻した。

第4節 調査の経緯

鳥坂寺跡で行われた発掘調査の経緯については表1と図1にまとめた。表中の①は発掘調査ではないが、鉄道の敷設によって伽藍が分断された際の地層や出土遺物の唯一の記録である。②も①と同様であり、伽藍配置を探る上で重要な資料である。

③④は鳥坂寺跡の伽藍の実像を解明するために行われた初めての発掘調査であり、その後、伽藍主要部に対してこの時以上に広い面積の調査は行われていないため、その記録は現時点においても堂・塔についての基本的な情報になっている。③では天湯川田神社拝殿の南側で地下式心礎をもつ小型の塔跡が検出された。④では金堂跡の凝灰岩切石を用いた壇上積基壇や階段が検出された。この遺構は全国的に見ても類例を捲くことが困難な程遺存状態が良好な点で注目されたが、一方で鉄道の敷設によって一部が欠失していることも判明した。さらに金堂跡の北方で講堂跡が検出され、ほとんどの礎石が遺存していること、平面規模は7間×4間で金堂に比してかなり大形の建物であること、中央部に凝灰岩切石の壇上積基壇からなる須弥壇が遺存していることなどが明らかにされた。また創建と廃絶の時期は奈良時代前期（7世紀後半）から平安時代中頃と考えられること、伽藍配置は塔が金堂の南西部に位置するというこの時期の寺院としては特異なものであることなどが報告された。

昭和40～50年代になると、平尾山古墳群・高井田横穴群・鳥坂寺跡を含むエリアを対象とした広域の開発計画に対処するために試掘調査が行われ、その結果⑤の発掘調査が行われることになった。この場所は中心伽藍から小谷を隔てた東側の尾根筋にあたるが、後期古墳を削平して建てられた奈良～平安時代の掘立柱建物群、井戸、「鳥坂寺」「寺」「三昧」等と墨書きされた土器などが検出され、寺域に含まれることが明らかになった。⑥は塔跡の北半部に重なっている神社拝殿の建て替えに伴う調査であり、塔跡北半部の雨落溝など遺構のほとんどが失われていることが判明したが、その報文には境内の小祠の台座等に転用された塔の礎石が掲載されている。

平成21年から開始した⑦⑧⑨は保存を目的とした確認調査である。葡萄畑といふこともあるが、発掘調査は極力小規模なトレンチ調査に留めざるを得なかつたが、新たに講堂に取り付く回廊の存在や規模を明らかにし、加えて金堂南側の大掛かりな盛土工事の実態が判明したことから、主要伽藍の範囲をほぼ把握できるようになった。

なお表中のA～Eは、主要伽藍よりも高所にあたる東～北方にかけての山地斜面に位置する平尾山古墳群（安堂支群）や高井田遺跡の調査である。7世紀前葉から中葉に築かれた横穴式石室や切石積石室の古墳、6世紀末に始まり7世紀代に拡大するものの8世紀には急速に縮小する100棟以上の掘立柱建物からなる集落など、鳥坂寺跡と時期をほぼ同じくすることから、これらの集落・古墳・寺院は密接に関連するものと考えられている。なおEの調査地については、当初は寺域に含まれる可能性が高いと考えられていたが、古代から中世の掘立柱建物や石垣を検出したことから、現在では高井田遺跡から続く集落の一部に相当するものと理解されている。

表1 岸坂寺跡調査一覧

記号	調査地	調査期間	調査区域 (m)	調査主体	調査報告書	調査結果	備考
①	?	1926.11.24	?	森下・松治	内高川・田出十尾蛇に乾て、古寺跡を尋ねる	大坂寺跡は発見された遺物よりその[上]状況について簡便に記述	発見は1918.3「河五地計画井町史」
②	高井田H102-19	1929.6.24/26	?	大阪府史記調査委員会	大阪府史記調査委員会	大坂寺跡名勝第1回	発見された跡地と付土地の特徴
③	高井田B88-1	1961.8.10～8.30	156	山本 利(桃原中学校)	内高井田・鳥坂寺跡	内高井田・鳥坂寺跡	塔に付地下式心柱造石、雨落溝を確認
④	高井田H115-1、119-1外	1962.11.12～12.13	538	奈良県立文化研究所	内高井田・鳥坂寺跡	金堂外瓦葺、講堂跡礎石群を確認	
⑤	高井田H272外	1973.12.10～1974.3.31	?	大阪文化財センター	大阪府史記調査委員会	大坂寺跡高井田所在點	残存・既存跡を踏み
⑥	高井田H272外	1982.8.17～8.31	71	柏原市教育委員会	馬井田明穴・竹林石供養塚	馬井田明穴・竹林石供養塚	遺物・遺物の存在を確認
⑦	高井田H272外	1983.5.23～1984.3.31	3890	柏原市教育委員会	鳥坂寺・寺域の調査	寺坂寺跡地、建物群、「鳥坂寺」墨書き上器名確認	高井田裏寺1983-1
⑧	高井田278外	1984.4.2～8.13	1200	柏原市教育委員会	鳥坂寺・寺域の調査	守護寺跡地を確認	高井田裏寺1984-1
⑨	高井田H88-1	1989.7.31～8.22	72	柏原市教育委員会	柏原市埋蔵文化財発掘調査 柏根 1989-年度	雨落溝一部を確認	高井田裏寺1989-2
⑩	高井田H116-1外	2009.9.14～2010.1.26	98	柏原市教育委員会	本書	金堂基壇北面段と講堂基壇の再検討 北門跡(内側)の礎石を確認	高井田裏寺2009-1
⑪	高井田H119-1外	2010.6.28～8.30	120	柏原市教育委員会	本書	金堂基壇南面段と西門跡(内側)の礎石を確認	高井田裏寺2010-1
⑫	高井田H115-1	2010.11.1～12.2	12	柏原市教育委員会	本書	圓鏡臺北側の礎石(毫・東面可窺の父丸)を確認	高井田裏寺2010-2
(高井田遺跡)							
A	高井田H169外	1985.4.2～6.6	5100	柏原市教育委員会	高井田遺跡I・II・III・IV・V	後期・終末期(後)、鐵立柱礎物群、古蟲塗を確認	平尾山古墳群1985-1
B	高井田H230外	1985.9.30～1986.1.31	15000	柏原市教育委員会	高井田遺跡I・II・III・IV・V	後期・終末期(後)、鐵立柱礎物群を確認	平尾山古墳群1985-2
C	高井田H239外	1986.4.1～4.8	630	柏原市教育委員会	高井田遺跡I・II・III・IV・V	鐵立柱礎物群を確認	平尾山古墳群1985-2
D	高井田H170外	1987.7.21～1988.6.23	17000	柏原市教育委員会	高井田遺跡I・II・III・IV・V	後期・終末期(後)、鐵立柱礎物群を確認	高井田裏寺1987-3
E	高井田H146-3外	1989.6.28～7.21	140	柏原市教育委員会	高井田遺跡I・II・III・IV・V	鐵立柱礎物群を確認	高井田裏寺1989-1

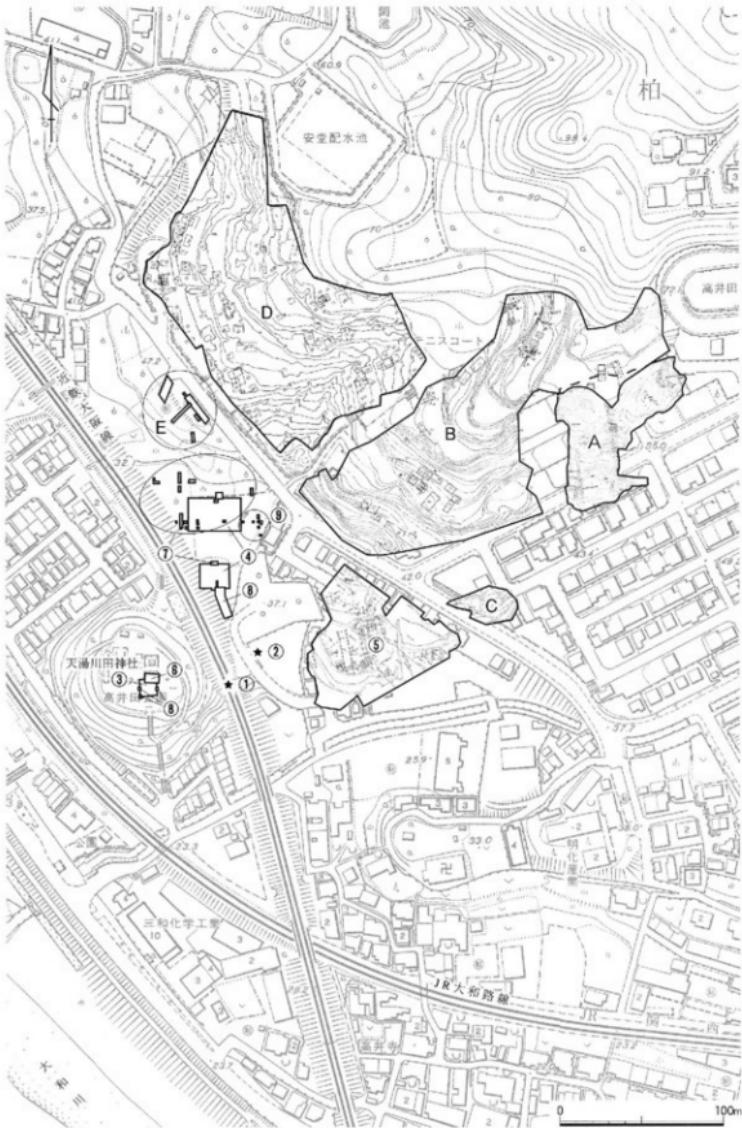


図1 鳥坂寺跡・高井田遺跡調査地位置図

第2章 位置と環境

第1節 位置と周辺の地形

柏原市は大阪府東部に位置する面積25km程の小都市である（図2）。北～西～南側は八尾・藤井寺・羽曳野市に接し、東側は奈良県との府県境である。市域中央部には奈良県北東部の都祁山地を源とする大和川が西流し、面積の三分の二を山地や丘陵地、三分の一を大和川や石川に沿った低平地が占めている。大和川以北の山地は地元で東山と呼ぶ生駒山地の南端部であり、同じく以南の山地は金剛山地北端部の明神山地である。

鳥坂寺跡は柏原市高井田の西端に所在する。ここは大和川の右岸（北岸）に位置し、生駒山地と金剛山地を画する亀の瀬峡谷から流れ出た大和川が玉手山丘陵に遮られて流路を北西に変えながら大阪平野に流入する地形上の変換点に臨んでいる。なお現在の大和川は石川との合流点から西に流れているが、これは江戸時代の宝永元年に付け替え工事が行われた後の人工河川であり、それまでは北西方に向いていた。これを旧大和川と呼んでおこう。

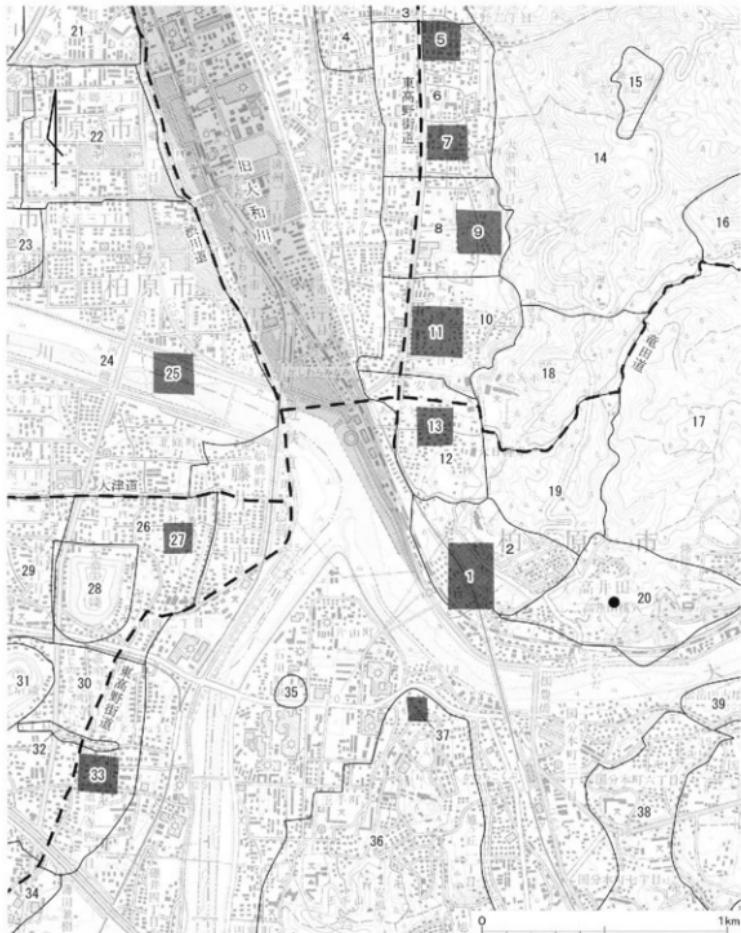
鳥坂寺跡は、高井田とその北側の安堂町を画す標高120m程の山塊から南北方向に伸びた丘陵上に位置し、主要伽藍跡は大和川に向けてさらに南西に張り出した尾根に立地している。現在、金堂跡と塔跡の間は鉄道によって分断されており、塔跡部分は一見独立丘のようにも見えるが、本来は一連の丘陵である。金堂・講堂跡で標高40m程、塔跡で標高45m程を測り、大和川から20m程の比高差がある。この尾根から小谷を挟んで東側の小尾根にも僧房や食堂と推定されている建物跡があり、ここも寺域の一郭を占めている。標高は31m程である。

鳥坂寺跡の南には大和川の対岸に玉手山丘陵が迫り、その北端部に建立された片山庵寺は指呼の距離にある。さらに西から北へ目を転じれば大和川と石川との合流点や大阪平野を見渡すことができる。視点を変えれば、居住・生産等の場である平野部や交通の大動脈である河川から極めて目立つ場所に立地しているということであろう。

第2節 歴史的環境

ここでは寺院の創建から廃絶に至る歴史に直接繋がる古墳時代から平安時代について、周辺の遺跡を中心に眺めてみよう（図2）。

鳥坂寺跡（1）の南には古墳時代前期の玉手山古墳群（36）や松岳山古墳群（39）が営まれているが、鳥坂寺跡周辺においても、石室そのものは未確認ではあるが数基の小規模な前期古墳が知られている¹。中期には羽曳野丘陵から石川に沿って北に伸びる段丘には古市古墳群があり、誉田山古墳・市野山古墳（28）・仲津山古墳（31）など大王墓とされる巨大前方後円墳が集中して築造されている。柏原市域には旧大和川左岸の低位段丘に船橋遺跡（24）などいくつかの集落遺跡があり、



1. 鳥坂寺跡（高井田魔寺） 2. 高井田遺跡 3. 平野遺跡 4. 大県郡条里遺跡 5. 平野施寺（三宅寺跡） 6. 大県遺跡 7. 大県鬼城寺（大里寺跡） 8. 大県南遺跡 9. 大県南魔寺（山下寺跡） 10. 太平寺遺跡 11. 太平寺麻寺（皆誠寺跡） 12. 安堂遺跡 13. 安堂魔寺（家原寺跡） 14. 平尾山古墳群—平野・大縣支群 15. 高尾山山頂遺跡 16. 平尾山古墳群—雅多尾畠支群 17. 平尾山古墳群—平尾山支群 18. 平尾山古墳群—太平寺支群 19. 平尾山古墳群—安土支群 20. 高井田横穴群・高井田山古墳 21. 弓削遺跡 22. 本郷遺跡 23. 川北遺跡 24. 和橋遺跡 25. 船橋施寺 26. 国府遺跡 27. 衣縫庵寺 28. 市野山古墳（允恭天皇陵） 29. 林遺跡 30. 土師の里遺跡 31. 柏樹山古墳（伴津姫陵） 32. 土師の里埴輪塚群 33. 土師寺跡 34. 茶山遺跡 35. 石川町遺物包掘地 36. 玉手山遺跡・玉手山古墳群 37. 片山廟跡 38. 田辺遺跡 39. 松岳山古墳群

図2 鳥坂寺跡の位置と周辺の遺跡

特に東山の山麓扇状地では鉄・鉄器・ガラス等の生産工房を含む大県遺跡(6) や大県南遺跡(8) がよく知られている。こうした時期に、これらの遺跡とは地理的にやや隔たるもの、高井田に百濟系渡来人の墳墓と推定される初期横穴式石室の高井田山古墳(20) が築造されたことは示唆的である。高い技術力を必要とした生産工房の経営には半島から渡來した多くの人々の参画が必要不可欠であり、彼等の居住地や墳墓もまた大和川と石川が合流するこの地域に集中するようになったのである。こうした渡來人の集住という地域的特性こそが、後に信仰や文化としての仏教を先進的に受容する基盤として機能したものと思われる。古墳時代後期には、工房群を含む東山山麓部の遺跡は最盛期を迎えるが、同時に東山そのものが埋葬地として利用されるようになり、日本最大の古墳群である平尾山古墳群(14, 16, 17, 18, 19) や高井田横穴群(20) が営まれた。

飛鳥時代になんて平尾山古墳群の造営は継続し、規模の大小こそあるものの域内各所に切石積横穴式石室墳・横口式石槨墳・小石室墳といった終末期古墳が築かれ、奈良時代には火葬墓に移行するものも現れる。この時期には高井田遺跡(2) のように山地斜面に新たに展開する集落が出現し、あるいは大県遺跡と交代するように大和川の南に位置する田辺遺跡(38) で鉄・銅製品や瓦の生産が始まるなど、律令による中央集権的国家体制への移行を背景に地域社会も大きく変動した。

飛鳥から奈良・平安時代にかけて律令制が敷衍された時代の柏原市域は、『和名抄』によれば河内国大県郡の全域(大里・鳥坂・鳥取・津積・巨麻・賀美郷)、志紀郡の一部(井於郷)、安宿郡の一部(尾張・賀母郷)にあたる。大県郡は生駒山地南端部から大和川までの地域であるが、『続日本紀』の養老4年(720)11月の記事によれば山麓部(旧大和川右岸)の堅下郡と山間部の堅上郡を合わせて建てた郡である。近世から近代には堅下村・堅上村が存在したように、この堅下・堅上という用語は地域的なまとまりを指す呼称として今でも利用されている。また地名として残る柏原市大県は郡衙があったとされる大里郷の一部である。志紀郡は大和川・石川合流点付近から旧大和川左岸の地域であり、八尾市南部から藤井寺市にあたる。安宿郡は大和川以南の地域であり、柏原市南部から羽曳野市東部にあたる。この地域には今でも複数の鉄道や国道が集中しているが、古代でも、竜田道・渋川道・後に南海道や東高野街道として整備される生駒山麓縦貫道などの陸路や大和川を中心とした水路など、重要な交通路が東西・南北に交錯する交通の要衝であった。

この時代に建立された寺院には、大県郡の山麓部に南から鳥坂寺跡(1)、安堂庵寺(13)、太平寺廃寺(11)、大県南廃寺(9)、大県廃寺(7)、平野庵寺(5) があり、安宿郡には片山庵寺(37)、原山庵寺、五十村庵寺、円明庵寺、河内国分寺・国分尼寺、羽曳野市域の飛鳥庵寺などがあり、志紀郡には柏原市域の船橋庵寺(25)、藤井寺市域の衣縫庵寺(27)、土師寺(33)、拝志庵寺、葛井寺などがある。さらに南には善田八幡宮神宮寺、野中満願寺、野中寺、西琳寺、善正寺などの諸寺も建立されている。このように柏原・藤井寺・羽曳野市の周辺には他に例を見ないほど古代寺院が集中し、大和とならび仏教の先進地とされる河内の中でも特異な地域を形成している。

一方『延喜式神名帳』によって柏原市域の式内社を列記すると、大県郡には天湯川田神社・宿奈川田神社・金山孫神社・金山孫女神社・鐸比古神社・鐸比光神社・大泊神社・若倭彦命神社・若倭姫命神社・石神社・常世岐姫神社、安宿郡には伯太彦神社・伯太姫神社、志紀郡には黒田神社があ

る。現在、鳥坂寺塔跡には天湯川田神社が鎮座しており、大県郡鳥取郷を本貫とし在地豪族と見做されている鳥坂部連の祖先神である天湯河柄命などを奉祀している²⁾。

第3節 寺名－高井田廃寺と鳥坂寺－

鳥坂寺跡の歴史的環境を概観するとき、寺名についての考察を抜きにして語ることは難しい。現在、多くの研究者が高井田に所在する寺院遺跡（高井田廃寺）は『続日本紀』に記録された鳥坂寺であると見做しており、ここでは寺名についての研究の歩みを振り返っておくこととする。

鳥坂寺は、『続日本紀』天平勝宝8年（756）2月24日と25日に「戊申、行幸難波、是日、至河内国、御智識寺南行宮、己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等七寺礼仏」と記録された寺院の一つである。通常「七寺」は「六寺」の誤りとされ、これら6つの寺院を総称して「河内六寺」と呼んでいる。また『日本紀略』には「六大寺」と記されていることから「河内六大寺」とも称される。この河内六寺については、知識寺とも書く智識寺が『続日本紀』天平勝宝元年12月27日の宣命に「河内国大県郡乃智識寺」とあり、六寺巡拝が人勢の供奉者が随行する行幸にもかかわらず1日で行われていることから、渡河などを伴わない智識寺周辺の大県郡域の寺院ではないかと考えられてきた。また智識寺の所在については、柏原市太平寺の東山山腹に位置する曹洞宗觀音寺が江戸時代から「天冠山智識寺中門觀音寺」と号し、縁起に智識寺跡関係記事を載せ、寺宝として「拾筒之内知識寺什物」と墨書きされた経机を伝来することなどから、太平寺廃寺＝智識寺とする見方が衆目の一致するところとなっている。

さて江戸時代の享保20年（1735）に刊行された『河内志』大県郡古跡条には、「普光廃寺 在高井田村（中略）一名井上寺又名鳥坂寺」と書かれており、高井田所在の寺院遺跡である高井田廃寺＝普光寺＝井上寺＝鳥坂寺という見解が示された。高井田廃寺の所在地には「鳥坂」に通じる「戸坂」の小字があり、この所説は『古事類苑』『大阪府全志』『中河内郡廃寺』『中河内郡誌』『大阪府史蹟名勝天然記念物（第二冊）』など明治時代以降の諸書にも引き継がれた。

なお普光寺について一言触れておくと、その名は正倉院文書中の宝亀元年（770）の「普光寺釋」や『続日本紀』延暦3年（784）6月の記事に見える。また『本朝無題詩』に収録された「遊普光寺 在河州府東山」という大江佐国の詩から、その所在が河内国府（現在の藤井寺市）から見た東方の山中に想定され、高井田と北の安堂町とを画す丘陵の高所にも「普光寺」の小字名が残ることなどから、高井田所在の古代寺院であり、鳥坂寺の別称であるともされてきた。しかし小字名「普光寺」を含む広範囲の発掘調査では関連する遺物・遺構は全く検出されず、考古学的には同所における独立した伽藍の存在は疑問とせざるを得ない。したがって鳥坂寺と普光寺・井上寺との関係の検討は省き、ここでは高井田廃寺と鳥坂寺との関係について研究史を振り返ることにしよう。

昭和4年、天湯川田神社北方の近鉄大阪線線路脇葡萄畠で鶴尾が発見されると、同年5月25日の大阪朝日新聞の記事では「奈良時代高井田村にあった鳥坂寺」と報じられ〔大阪朝日1929〕、その出土状況を記録した報文のタイトルも「鳥坂寺址発掘鶴尾」と書かれることになった〔池田谷1930〕。

また今も線路脇に残る鳩尾発見記念碑には、魚澄惣五郎の文で「烏坂寺之址」「本寺は飛鳥時代の創建にかかり 王朝時代には河内六寺の一として聞ゆ 近時寺址より出土せる大鶴尾と瓦礫との遺蹟なるよく往時の盛觀を偲ばしむ」と刻まれている³⁾。その後、昭和36・37年の発掘調査についての報告書は『河内高井田・烏坂寺跡』と題され、その中で藤沢一夫は「鳥取氏の建立した氏族寺院であつて、俗名は郷名によって烏坂寺といい、また地名によって高井（田）寺ともいい、法名は普光寺といったように考えられる」と述べている〔藤沢1968〕。

一方、高井田庵寺=烏坂寺という見方に対し疑義も呈されている。長田富作は、高井田出土の鶴尾は普光寺あるいは竹原井離宮のものであり、天湯川田神社は鳥取氏の氏神であるからその一帯は鳥取郷であるべきとした上で、『続日本紀』の河内六寺の記述は智識寺南行宮から北方に所在する寺院を巡拝した順序で書かれ、烏坂寺は最も遠い北に位置し、現在の八尾市神宮寺付近に求められると考えた〔長田1955〕。この巡拝の順路から呈された疑問については、高井田庵寺=烏坂寺説をとる山本博は長崎円ルートで一巡したため行宮と烏坂寺が至近距離にあっても不思議ではないと述べている〔山本博1971〕。また今井啓一は高井田庵寺=智識寺であるとし、その論拠として天皇が滞在した智識南行宮は竹原井離宮と同じものであり、同離宮の所在が高井田に推定されることを挙げている〔今井1963〕。現在竹原井離宮の位置については高井田から東に離れた柏原市青谷に推定する説が有力であり、今井説には問題も多いが、論文中で河内国神別の鳥取造を中心とする有縁の智識衆の合力によって草創されたとする見解には耳を傾ける点が多くあるように思われる。

このように河内六寺の所在あるいは高井田庵寺の寺名の比定については、行宮・離宮の所在地問題も絡んで複雑な様相を呈していたが、山本昭は昭和48年に刊行された『柏原市史』第2巻で次のような見解を示した。柏原市の堅下地区に所在する寺院遺跡を対象とした場合、まず智識寺は太平寺庵寺に相当すること、次に六寺巡拝の目的が聖武天皇の病氣平癪にあり多くの仏の加護を願うために小規模寺院も対象になったとした上で、これに地名・字名なども考慮して智識寺=太平寺庵寺、山下寺=大県南庵寺、大里寺=大県庵寺、三宅寺=平野庵寺、家原寺=安堂庵寺、烏坂寺=高井田庵寺と考え、巡拝のルートを智識寺から北上して三宅寺へ進み、そこから折り返して南の烏坂寺へ進んだと解釈した〔山本昭1973〕。

昭和58年、高井田庵寺の主要伽藍から小谷を隔てた東の尾根で多量の土器とともに掘立柱建物群が検出され、その一部に遭された井戸から「烏坂寺」と墨書きされた9世紀後半から10世紀初頭の土師器楕が出土した〔柏原市教育委員会1986a〕。墨書き土器の年代は『続日本紀』記載の年代からはやや下るもの、この発見は高井田庵寺=烏坂寺説の有力な証左になり、柏原市教育委員会発行の報告書にも『烏坂寺-寺域の調査-』のタイトルが付けられた。その後大県庵寺からは「大里寺」と墨書きされた8世紀の土師器鍋が〔柏原市教育委員会1985〕、また山下寺に推定された大県南庵寺の近くから「山下脊川」と墨書きされた10世紀の土師器楕が出土したことにより〔柏原市教育委員会1995〕、河内六寺の巡拝ルートに関する山本昭説が補強されるとともに、高井田庵寺=烏坂寺説も一層確実なものになったといえよう⁴⁾。

こうした研究史を踏まえ、本書でも高井田所在の古代寺院遺跡（高井田庵寺）を烏坂寺として報

報告する。

なお平野庵寺については発掘調査の機会が少ないために不明な点が多く、僅かに散布する瓦も平安時代の所産であり、この遺跡を単純に河内六寺の三宅寺にあてることには問題も多い。三宅寺の所在地は今なお不明であるとすることが妥当であり、柏原市の法善寺庵寺や律令制下の高安郡域にあたる八尾市東南部の教興寺跡・高麗寺跡などをあてる説があることも申し添えておこう〔柏原市立歴史資料館2007〕。

第4節 高井田遺跡

ここまで鳥坂寺跡の歴史的環境についてみてきたが、最後に隣接する高井田遺跡について概要を紹介しておきたい（表1、図1）。

高井田遺跡（調査区A～E）は鳥坂寺跡の東から北に広がる集落遺跡であり、標高40m程の尾根に立地する寺院を見下ろすように、山地の南から西斜面を雑壇状に造成して、150棟以上の掘立柱建物が検出されている〔柏原市教育委員会1986b・1987a・1989・1990b〕。地形的には調査区BとDの間に比較的大きな谷（谷2）が刻まれているが、この谷はさらに南に向かって伸び、高井田庵寺主要伽藍の東限になっている。

高井田遺跡で検出された建物跡は、もちろんその全てが同時期に存在したわけではなく、6世紀末から7世紀初頭に標高の低い場所から建てられ、7世紀中頃になると100棟前後の建物が標高の高い場所にまで建てられたが、8世紀には再び標高の低い場所に移り、棟数も10棟程と急激に減少している。集落そのものは中世まで存続していたらしく、平安から鎌倉時代の建物や遺物もあり、寺院北方の高所（調査区E）には中世の石垣状遺構も検出されているが、今は往時のように数多くの建物が建ち並ぶという活況は現出されなかった。こうした建物の増減あるいは集落の盛衰は、7世紀中頃に創建されたと考えられる鳥坂寺の動向と重なるだけに両者の関係が注目されるが、主要伽藍や付属雑舎の造営工事が総て完了して寺觀が整い、孝謙天皇が父親である聖武天皇の病氣平癒を願って参拝に訪れた8世紀中頃は、集落はむしろ衰退期にあり、この間の事情については、在地寺院の在り方として大いに議論されるところではある³。

調査区Dでは樹立した円筒埴輪が確認されており、遺物としても多数の円筒・形象埴輪が出土している。したがって、この場所には5世紀末葉を前後する時期から6世紀代にかけて直径15m程の木棺直葬を埋葬施設とする円墳が数基存在したものと思われるが、これらの古墳は集落の造成によって全て破壊されている。その一方で調査区Aにあたる南向きの斜面では7世紀前半の時期に築造された2基の古墳も存在する。一つは平尾山古墳群安堂第5支群16号墳と呼ばれ、左右側壁の大形石材を対称に使用した石室をもつ古墳であり、家形石棺の破片や12世紀後半の多数の瓦器楕が出土している。他の一つは安堂第6支群3号墳であり、花崗岩切石を積み上げた所謂岩屋山式横穴式石室を埋葬施設とする直径22～23mの円墳である。2つの古墳とも高井田遺跡（集落）の成立や隆盛の時期と重複しており、集落の主導的人物の墳墓とする見方も多い。

高井田遺跡の一部では飛鳥・奈良時代から平安時代の瓦類も出土しているが、烏坂寺跡の瓦と同型式のものが大半であり、軒丸瓦では烏坂寺跡のⅤ型式、丸瓦では烏坂寺跡のB-3類タキを施したもの、平瓦では烏坂寺跡のC-3類、D-3・6・7・10類、F-8・9類タキを施したものなどである^①。その一方で烏坂寺跡に見られないものとして三重圓文軒丸瓦・複弁蓮華文軒丸瓦（平安時代）・均整唐草文軒平瓦・巴文軒平瓦などがあり、三重圓文軒丸瓦は難波宮出土瓦と同範とされている〔佐藤2000〕。これらの瓦の出土位置はある程度限定されており、遺跡内の高所から出土することではなく、烏坂寺跡により近い調査区Bの南西部、調査区Dの南部（谷2の東西）、調査区Eなど標高の低い場所が中心である。

また、この高井田遺跡から高井田横穴群にかけての山地や丘陵からは火葬骨を埋納した8・9・10世紀代の古墓が検出されている〔柏原市教育委員会1987b〕。これらは烏坂寺に止住した僧侶などに関係があるかもしれない。

以上のように、大和川に臨む生駒山地最南端（東山）の山地斜面という限定された狭い地理的空间に同時期に存在した集落・古墳・寺院は、相互に関係のない単独の遺跡であると考えるよりは、密接に関係していると理解するほうが自然であろう。しかし、その関係性の具体的・歴史的内容について確実な論拠を挙げて叙述することは難しい。高井田遺跡という集落を單一の同族集団の居住地と看做すことができるのか、2基の終末期古墳はそうした集団の首長の墓として築造されたものなのか、烏坂寺という寺院は古墳に代わる記念物として集団の信仰や威信を示すために建立されたものなのか。発掘調査等を通じて具体的事実を積み重ねながら、さらなる検討が必要であろう。

註

- 1)『柏原市史』では安堂山古墳群として烏坂宮・烏坂・烏坂北・安堂南の各古墳が紹介されている。安堂南古墳からは鍛劍数口が出土し、烏坂宮古墳に位置する天湯川田神社にはかつて古墳時代の直刀2口が奉安されていたという〔柏原市史編纂委員会1973〕。
- 2) 柏原市青谷には「鳥取」の小字名が残っている。
- 3) 建立者は毎日新聞社主の木山彦一が主催した「趣味の考古学会」である。
- 4) 河内六寺諸寺院の名称は、これらの墨書き土器の発見により、智謙寺を除けば大里郷の大里寺や烏坂郷の烏坂寺のように地名（郷名）に基づいていたものと思われる。家原寺についても、平安時代初期に成立した『和名抄』に記録はないが、平城京出土木簡に「河内国大京郡家原口」と書かれたものがあり〔奈良国立文化財研究所1997〕、同様に考えられる。したがって墨書き「山下脊川」も地名の可能性が高く〔安村2007〕、それが山下寺の名称に反映されたのである。
- 5) 在地寺院の在り方について、例えば網伸也は、7世紀代には堂塔の建立が主たる目的であり、8世紀の寺院統制政策によって寺院經營にあたる付属建物群が整備されたと考えている〔網2001〕。
- 6) 本書では、軒丸・軒平瓦や丸・平瓦の分類について、混乱や煩雑さを避けるために、また出土点数の比較のために、從来からの方法を採用している〔大阪府教育委員会1968、今井・林2010〕。

第3章 調査の概要

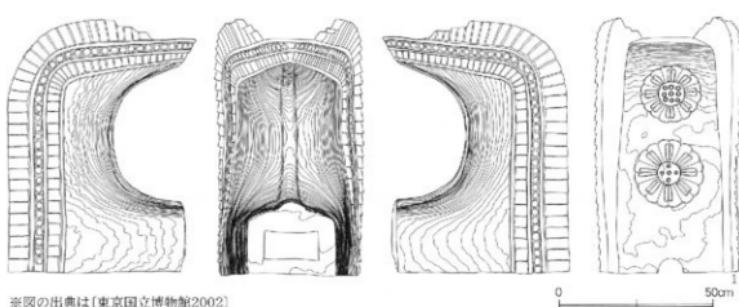
第1節 発掘調査前の鳥坂寺跡と採集遺物

すでに述べたように高井田所在の古代寺院跡では江戸時代から古瓦の散布が知られており、伝承や地名を手がかりに『続日本紀』に記された鳥坂寺ではないかという考察が行われてきた。

その鳥坂寺跡から出土した遺物や遺跡の状況についての具体的な報告が『考古学雑誌』に載せられている。それは近鉄大阪線の敷設工事にあたり大正15年11月21日に出土した「足駄」（下駄）の報告であり、多数の古瓦が出土したこと、古瓦包含層の下に鮮青色粘土の土器包含層があり、そこから「彌生式土器・須恵器・足駄」などが混在して出土したことなどが記されている¹⁾。また添付された写真は軒丸瓦V型式であり²⁾、この瓦には重弧文軒平瓦が伴出したらしい〔森下1928〕。さらに、この工事の際に家形石棺の身部が出土したとも伝えられている〔山本1975〕。

昭和4年4月18日、天湯川田神社北方の近鉄線切開北側葡萄畠の一隅で排水溝浚渫中に2個体分の鶴尾が発見された。そのうちの1個体は破片数も多く下半部がほぼ完形の状態で正位置を保って出土したという〔池田谷1930〕。この鶴尾は東京国立博物館によって購入され、奈良時代を代表する遺品として復元・展示されてきたが、最近になって復元形が見直され、新たに組みなおして展示されている（図3）。その際、大脇潔によって詳細な調査・研究が行われているので、その論文に依って概要を紹介しておこう〔大脇2002〕。

鶴尾は1対2個体分あり、破片数が多く、展示用に復元されたものを鶴尾A、他を鶴尾Bとする。出土位置は「発見届」・報告書・伝聞などによって金堂跡東南側の畠や講堂南側の畠などが推定されるものの、それ以上の特定は困難であり、また出土状況から推測して建物から降ろされた状態で置かれていて（あるいは屋根に一度ものせられないまま放置されていて）埋没した可能性が高い。形状は外側のみに段を表現した鱗が頂部を廻らずに途切れ脊梁が前方に突出し（唐様式）、縦帶は複帯構成となり、腹部には蓮瓣文が2個上下に配されている。鶴尾Aの大きさは、基底部前後の長さ90.0cm、同頭部の幅45.5cm、同高さ37.0cm、腹部は鱗部の内側で幅約55cm、高さは復元値で135.0cmである。この鶴尾A・Bに対し、昭和37年に行われた発掘調査の際に金堂基壇周囲の瓦溜まりから出土した内・外側に段を表現した鶴尾片を鶴尾C、講堂の基壇上や周囲から出土した胴部無文の鶴尾片を鶴尾Dとすると、仮説として鶴尾Cは金堂所用、鶴尾Dは講堂所用、鶴尾A・Bは中門所用という可能性も考えられる。製作年代は、鶴尾Cは川原寺式軒瓦が畿内に広まった670年代、型式的に鶴尾Cよりも後続する鶴尾A・Bは680年代から8世紀第1四半期の間、鶴尾Dは7世紀後半と看做され、鳥坂寺跡の創建と時を同じくして7世紀後半に相次いで製作されたものである。なお鶴尾A・Bには基底部に織物が付着した破片があり、絹糸・緯糸とも甘いZ撚りで、1cm間の織り密度は9~10本×8~9越や10~11本×9越というかなり密度の粗い麻布であるという〔沢田2002〕。



※図の出典は〔東京国立博物館2002〕

図3 昭和4年発見の鶴尾

次に鳥坂寺跡で採集された遺物について紹介しておきたい（図4）。これらは柏原市立歴史資料館で収蔵・展示されている寄贈・寄託資料である。2は素弁八葉蓮華文軒丸瓦で「六一・四・二九 鳥坂廃寺」の注記がある。胎土は精良、色調は灰白色、焼成は堅緻。船橋廃寺亞式とされ、類例が藤沢一夫によって紹介されている〔藤沢1975〕。3は重弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房径4.0cm、蓮子を1+8に方形に配すが子葉には揃っていない。瓦当厚4.0cm、丸瓦との接合面にキズを付けている。胎土は粗、色調は褐色、焼成は良好。類例が太平寺廃寺にある〔上田2010〕。4は重弁八葉蓮華文軒丸瓦。弁端が尖って針状を点じ、間弁に珠文を配す。胎土はやや粗、色調は灰褐色、焼成は良好。安堂廃寺、太平寺廃寺、教興寺、西都廃寺に類例がある〔上田2010〕。5は重弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房径3.6cmで、蓮子を1+7に円形に配す。弁端は丸いが針状を点じ、間弁に珠文を置く。内区と外区の境に凹線ではなく、周縁幅は2.6cmと広い。瓦当径18.7cm、瓦当厚2.3cm。胎土は粗、色調は灰色～灰黄色、焼成はやや軟。類例が太平寺廃寺や原山廃寺にある。鳥坂寺跡の従来の分類ではVII型式に相当するが、発掘調査出土資料は小片で中房も欠損しているため、本例が最も良好な資料である。6も5と同様の資料であるが、胎土は密、色調はオリーブ黒色。7は複弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房径5.2cmで、蓮子を1+4+8に配す。瓦当厚3.5cmとやや厚い。丸瓦との接合面には反転した布目が明瞭に残っている。胎土は密、色調は灰オリーブ色、焼成は堅緻。従来のIX型式に相当し、塔北斜面で採集された資料である。8も複弁八葉蓮華文軒丸瓦。高く突出した中房径は3.5cmと小さく、蓮子を1+4+8に配す。間弁はなく、周縁は2段になっている。瓦当径は約16cmに復元され、瓦当厚は1.3cmと薄い。丸瓦との接合面にはキズが付けられている。胎土は密、色調は褐灰色、焼成は堅緻。9は平瓦。四面に約2.5cm幅の模骨痕が残り、凸面は綱タタキ、側面はヘラ切り未調整。端面に幅約1mmの2条の沈線が描かれているが、これはヘラ削り等の際に生じたキズや砂粒の動いた軌跡ではなく意図的に引かれたものであり、重弧文軒平瓦に関連する資料かもしれない。胎土は精良、色調は赤褐色、焼成は堅緻。こうした特徴は軒丸瓦I型式の一部と酷似している。10は堅下小学校から柏原市立歴史資料館に寄託されている鶴尾片。昭和4年発見の東京国立博物館に展示されている鶴尾とともに出土した遺物であり、右側面の縦帯から鰐部にかけての比較的

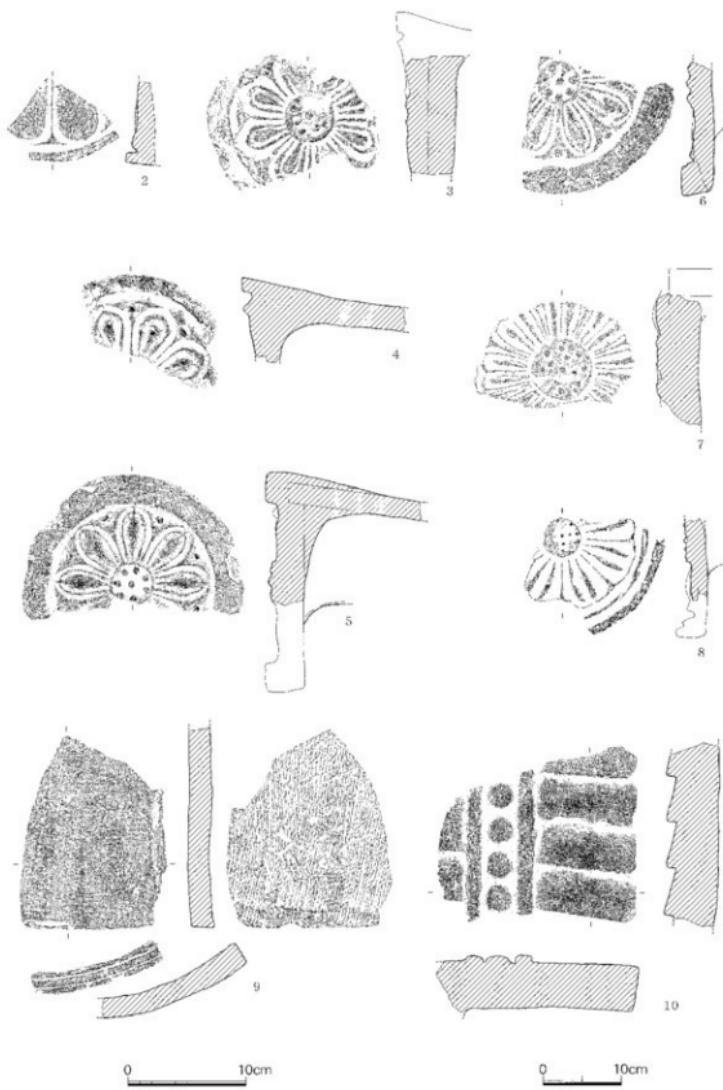


図4 柏原市立歴史資料館収蔵遺物

大きな破片である。鰐部の正段は外側のみに見られる。法量や特長の記述は大脇潔によって詳述されているため省くが、一応鰐尾Bに分類されるものの復元・展示されている鰐尾Aの可能性もあるという〔大脇2002〕。また『柏原町史』によれば、この破片の発見地は「字宮ノ本 102番地の1」とされており〔柏原町史刊行会1955〕、この記載が正しければ金堂跡から東南方向に離れた斜面の下方から出土したことになる。

第2節 主要伽藍の調査（昭和36・37年度、平成元年度）

ここでは昭和36年8月に行われた塔跡の発掘調査と翌37年11月～12月に行われた金堂・講堂跡の発掘調査について、既刊の報告書（以下『報告書』）に基づいてその概要を紹介する〔大阪府教育委員会1968〕。なお塔跡については平成元年度にも天湯川田神社拝殿建替え工事に伴い発掘調査が行われ、報文も刊行されている〔柏原市教育委員会1990a〕、その成果も併せて紹介する。建物跡の位置については図1・66を参照されたい。

第1項 塔跡

塔跡は大和川に臨む尾根の突端部に位置している。現在は式内社の天湯川田神社境内になっており、小字名も「宮地」である。塔跡は拝殿の前に位置し、基壇北辺が拝殿に重なっている。標高は43.3m前後である。金堂跡からは南南西の方角にあり、その中心から南へ68.5m、西へ約41m離れている。発掘調査の結果、基壇周辺の施設と心柱礎石が確認された（図1-③・5・6）³⁾。

基壇周辺施設は板石を立てて側石とした溝とその内側の小石敷である。溝幅は約40cm、溝底に小石混じりの褐色土を入れて側石を押さえ、その上に径3cm程の小石を敷いていた。溝の内側には幅約90cmの範囲で小石敷があり、小石敷の内側には溝に平行して延びる幅約20cmの浅い溝が一部で遺存していた。『報告書』では外側の溝は基壇周辺を廻る雨落溝、内側の浅い溝は基壇地覆石据え付け痕とし、基壇の大きさを地覆石外面間で一辺8.66m(28.5尺)と推定している。

心柱礎石は基壇中央部で見つかった盜掘坑（平面の大きさ2m×1m）を約40cm掘り下げて検出した地下式心礎である。一辺1.2mの方形に近い花崗岩であり、表面は中心部から外側に向けて約7度の角度で下がる傾斜面、裏面は平坦で、最大厚63.0cmを測る。上面中央部に円形の柱穴（上部径54.5cm、下部径50.5cm）があり、その底面中央に舍利孔（径10.5cm、深さ15.5cm、断面円錐形）が穿たれていた。盜掘坑の埋土には木炭片と少量のベンガラ・金箔片が含まれていたといふ。

『報告書』に心柱礎石の標高は記されていないが、小石敷等の面から40cm程の深さが礎石上面と思われる。礎石の据え付けは、部分的に遺存していた土層等の観察から、基壇中央部に掘った径3.5mの土坑の傾斜した壁面を利用して、東北方向から滑らせて坑底に直接据え付けたとされている。心柱の立柱に際しては、心柱礎石周辺を小石混じりの褐色土でつき固め、心柱を据え、その根元を粘土で根巻きし、さらに外側に木炭層と小石混じりの褐色粘土層を5cm厚で互層に重ね、その上で周辺を小石混じりの褐色土でつき固めていると報告されている。また基壇の築成方法については、

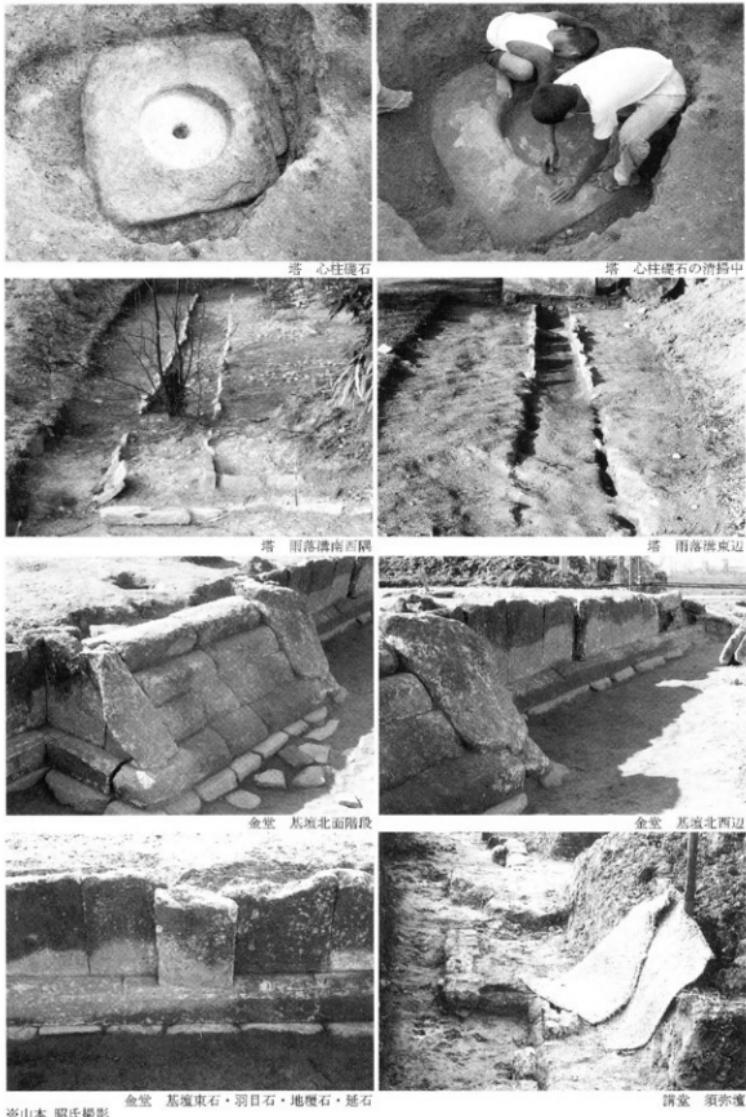


図5 昭和36・37年度発掘調査

崇山本 昭氏撮影

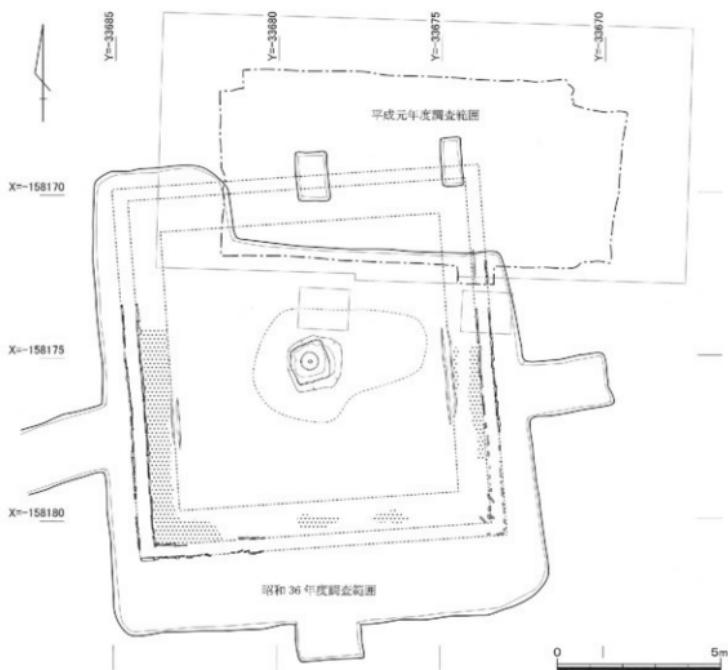


図6 塔跡平面図

基壇そのものが失われているためはっきりしていない。

なお平成元年度の発掘調査では、神社拝殿に重なる部分の塔基壇関連遺構は全て削平されていることが確認されたが、拝殿東側で祀られている山王権現社石垣に使用された礎石（直径55cm、高さ約2cmの円形柱座がある）が紹介され、塔礎石として報告されている。

第2項 金堂跡

金堂跡は幅の狭い尾根の中央部に位置し、小字名は「堂の間」である。基壇延石の標高は約38.8mであり、この数値から推測すると7・8世紀当時の金堂は塔よりも約4.5～5m低かったと思われる。近鉄大阪線の敷設工事で基壇西辺の大半と南辺の一部が失われたが、立体的構造物として遺存状態の極めて良好な基壇が検出された（図1-④・5・7）⁹⁾。

基壇は安山岩等の延石と凝灰岩切石の地覆石・羽目石・束石・葛石で構成された壇上積基壇で、南辺と北辺の中央部に凝灰岩切石を使用した階段が設けられていた。特に北辺の遺存状態は良好で

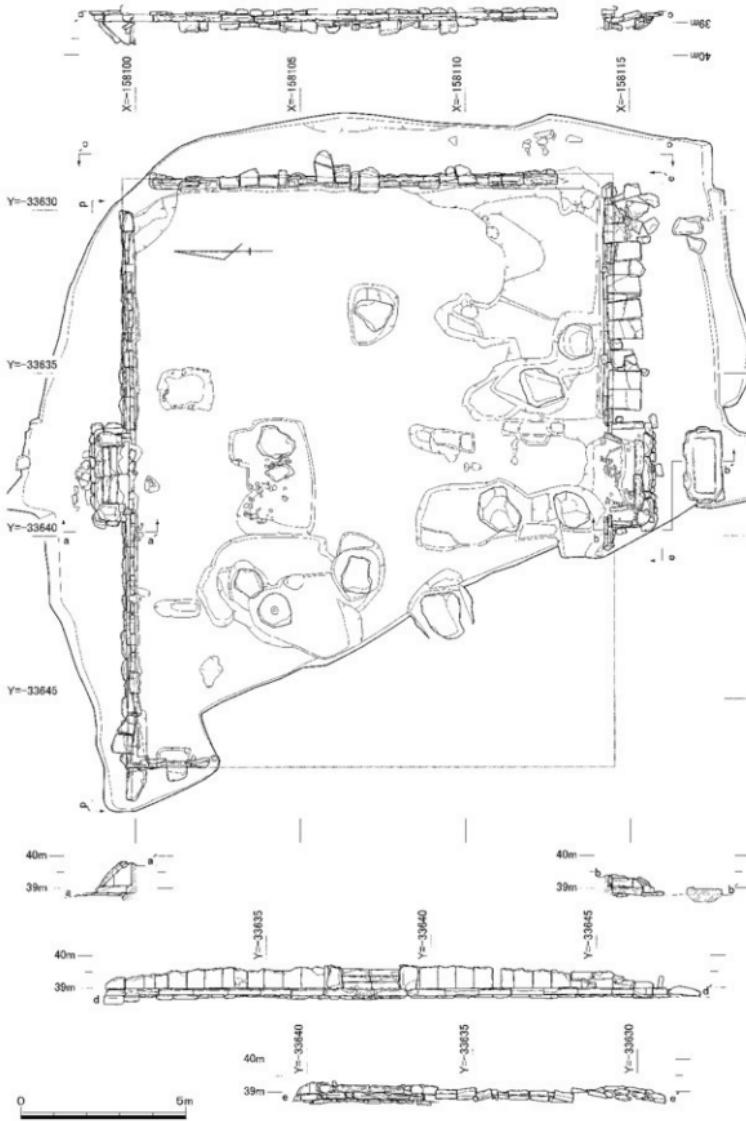


图7 金堂跡平面图·立面图

あり東石・羽目石が立ったままの状態で検出されたが、南辺では東石や羽目石が完形のまま外側に倒れた状態で検出され、東辺では東石・羽目石が約20cmの高さまで削られていた。

基壇の大きさは地覆石外面間で南辺 18.53m(61尺)、北辺 18.06m(59.5尺)、東辺14.89m (49尺) に復元されており、平面形は正確な長方形ではない。

基壇を構成する石材の大きさや形状については『報告書』や第4章に譲るが、完存する東石・羽目石・葛石の大きさから基壇高が復元され、延石上面を地表面とした場合は地覆石高+羽目石高+葛石高で 140cmとなる。ただし周囲の地表面の高さは場所によって異なっていたとされ、例えば南東隅と北西隅とでは10cmの差があって、このままで基壇上面が傾くことになる。この高低差を東石や羽目石の高さを調整することで解消し、基壇面を水平に保っていたと推測された。

階段についてもここでは詳述しないが、南階段で地覆石と段石 1段の 2段分、北階段で地覆石と段石 3段の 4段分が検出された。特に北階段の遺存状態は良好で、完存する地覆石・登り葛石・羽目石（三角形）・段石はそれぞれ 2～3 個の切石で構成されていた。また南階段の幅は地覆石外面間で3.19m、北階段のそれは2.88mとなり、南階段は北階段より一回り大きい。

基壇上には10個の礎石が残されていたが、原位置からは動かされており、邪魔な礎石は耕作等で基壇を削平した際に穴を掘って落とし込んだため、礎石据え付け痕も見られなかった。したがって建物規模を正確に復元することは難しいが、仮に基壇東石を柱通りに合わせたものとすると桁行5間×梁行4間になり、東西 12.06m (41.5尺) ×南北 9.4m (31尺) の規模になるという。

また基壇築成方法は、一部に盛土が見られるものの大部分は地山を削り残したものであった。

なお、延石下から瓦片が出土することが確認されており、検出された凝灰岩壇上積基壇は2次のなものである可能性も指摘された。

他に南階段の 1.1m 南側で凝灰岩製家形石棺蓋石が頂部を下にして水平に据えられていた。大きさや形状は『報告書』に譲るが、断面形は扁平、長方形縄掛突起が短辺に各 1 個、長辺に各 2 個、合計 6 個ある。内面周囲を削り取って意図的に平らにしており、法隆寺金堂・四天王寺金堂・山田寺金堂などに見られる礼拝石ではないかと推定されている。蓋石下から瓦片が出土しており、据え付け時期は創建時よりは下るとされた。近鉄大阪線敷設工事で家形石棺が出土したという伝聞もあり、寺院以前の景観や造営工事の復元を行う上で興味深い資料である。

第3項 講堂跡

講堂跡中心部は金堂基壇の北辺から北に約30mの距離にあり、小字名は「クロウ」である。早くも昭和10年前後には天湯川田神社神官の山本宗薄によって 4 個の礎石が発見されていた。基壇外装の遺存状況は良好ではなかったが、礎石の多くが残っていた（図 1-④、図 5・8^⑤）。

基壇外装が残っていたのは北辺のみであった。長さ 50～60cm で高さ約 30cm という花崗岩自然石を一列に並べた簡単なもので、長さ 26.6m の部分が遺存していた。しかし基壇南西隅と西辺中央部に想定される位置で凝灰岩据え付け痕があり、創建当初は凝灰岩切石積基壇であった可能性も指摘されている。基壇の大きさは、北辺で側柱列中心から基壇端までの距離が 2.13m (7 尺) であるこ

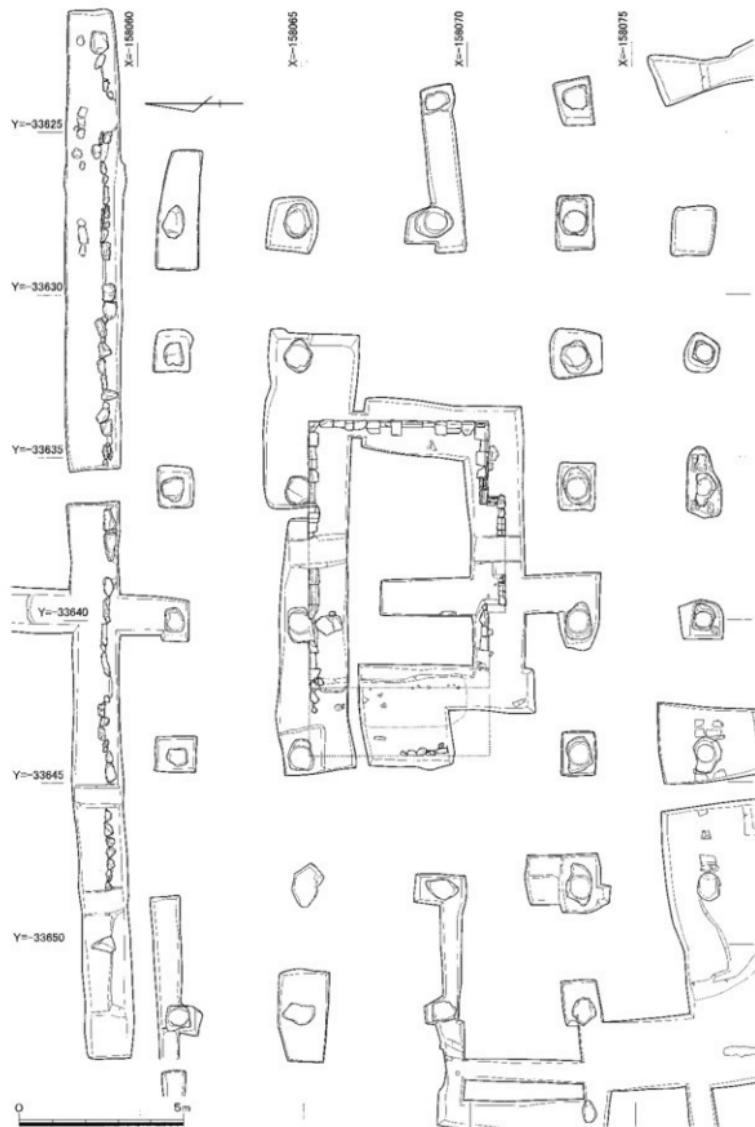


図8 講堂跡平面図

とから、基壇各辺から側柱列中心までの距離が北辺と同じであったと仮定すると、東西 32.31m (106.5 尺) × 南北 20.33m (67 尺) になるという。また基壇高は約 50cm とされている。

礎石は 29 個が遺存しており、身舎北西隅の 1 石以外はほぼ原位置を保っていた。これらの礎石について上面高を比較すると、北から南に向けて漸次低くなる傾向があり、基壇が地山を削り残したものため不同沈下を起こす可能性が少なく、加えてこの傾斜が基壇周囲の地盤の傾斜とも合致していることから、創建当初からこうした傾きをもっていたと考えられている。

礎石からわかる建物の平面規模は桁行 7 間 × 梁行 4 間で、桁行 5 間 × 梁行 2 間の身舎の四間に廂がついた建物である。大きさは東西 28.07m × 南北 16.08m で、柱間寸法は、廂は桁行・梁行とも 3.79m (12.5 尺)、身舎は桁行 4.09m (13.5 尺) 等間、梁行 4.25m (14 尺) 等間となる。

礎石の大きさは身舎と廂で異なり、前者では長さ 1 ~ 1.2m で幅 70 ~ 90cm の長方形に近い花崗岩を用い、上面を平らにして径 70cm の円形柱座を造り出しているが、後者では長さ 70 ~ 90cm で幅 60 ~ 70cm の花崗岩を用い、上面を平らにしただけのものである。ただし南側柱列中央 3 分間の礎石には円形柱座がある。さらに南側柱列の西から 2・3・4・5 番目の礎石には凝灰岩切石断片が取り付き、これが扉の唐戸敷の座とすると、この建物では正面 5 間に扉がついていたことになる。

身舎中央部では須弥壇（仏壇）が検出された。凝灰岩切石の地覆石・羽目石・葛石で構成された基壇であり、南辺中央部に階段が付属していた。大きさは東西 8.19m (27 尺) × 南北 5.46m (18 尺) になり、階段幅 3.64m (12 尺)、出は 54.6cm (1.8 尺) となる。須弥壇は身舎の中央間とその両隣の間の半間を占め、背面は身舎北側柱列に接っている。なお西側は後に半間分拡張しており、その際に使用した地覆石は花崗岩であった。ただしこの拡張部は土坑によって大きく壊されており詳細は不明である。この土坑からは平安時代の延喜通宝が 20 枚出土した。

第 4 項 遺物

出土遺物には金銅仏断片・蹲仏・金銅製および鉄製金具類・延喜通宝・鉄釘・施釉陶器・土師器・漆器・瓦類などがあり、量的に最も多いのは瓦である。

(1) 瓦以外

瓦以外の遺物については表 2 と図 9 にまとめた。大きさや形状等の特徴は『報告書』に詳しい。唐草文や蓮華文飾金具 14 は毛彫りで文様を表現したもの。飾金具 16 の周囲には釘穴が見られる。金具 13 は一端が方形、一端が尖形で上端を釘で留めて本質を挟んでいる。金具 15 は幅が狭く一端が尖形になっている。蝶番 11 は『報告書』に掲載された 3 点とは形状が異なり半円形を呈している。仏具 12 には格狭間状の装飾が見られ一部に塗金が残っている。鉄釘には 4 ~ 20cm の大きさがある。漆器は黒漆塗りの断片で蓮弁風の反りが見られる。土器は土師器碗で平安時代初期と報告されている。鉄製円板は直径 8cm、厚さ 7mm、講堂正面扉唐戸敷座付近出土で扉の軸擦金具か。

2 体の蹲仏は宣字座に稽坐する如来像を單独で表現した独尊稽像蹲仏である。17 は高さ 10.3cm、頸部を欠く 18 は高さ 7cm であり、いずれも表面に漆を塗り金箔をおいた痕跡が見られる。2 体ともに端部が整えられていることから、火頭形三尊蹲仏の型を用いてその如来部分のみに粘土を充填し



11 金銅製模番



12 金銅製仏具(台座)



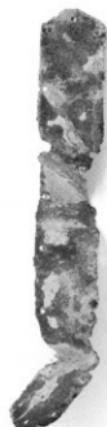
13 金銅製金具



14 金銅製蓮華文釘金具



15 金銅製金具



16 銅製飾金具



17 塚仏



18 塚仏



19 の裏面

※大阪府教育委員会所蔵資料

図9 昭和36・37年度発掘調査 金属製品・塚仏

表2 昭和36・37年度発掘調査出土遺物（瓦は除く）

遺物		数	出土場所	掲載	保管
金銅仏断片	天衣断片	1	金堂基壇周辺瓦層	報	府
	仏手	1	講堂仏壇北側	報	奈
搏仏		2	講堂仏壇北側	報・図9-17・18	府
金銅製金具類	唐草文飾金具断片	2	講堂仏壇周辺	報	奈
	蓮華文飾金具断片	1		図9-14	府
	飾金具	1		図9-16	府
	金具（把手？）	1			奈
	金具	2		図9-13・15	府
	蝶番	3	講堂仏壇周辺	報	奈
	蝶番	1		図9-11	府
	銅製容器蓋断片？	1	金堂周辺	文	奈
	仏具（台座？）	1		図9-12	府
延喜通宝		2	講堂仏壇北側	報	奈
		20	講堂仏壇拡張部土坑	報	奈
鉄釘		多	金堂周辺	文	奈
		多	講堂周辺	文	奈
漆器	黒漆塗り断片	1	講堂基壇東邊	文	奈
施釉陶器類	三彩火舎	1	講堂仏壇拡張部土坑	報	府
	三彩甕	1	講堂仏壇拡張部土坑	報	府
	緑釉甕	1	講堂仏壇拡張部土坑	報	府
土器	土師器粗製椀	多	講堂仏壇拡張部土坑	文	奈
鉄製金具類	円板	1	講堂正面須磨居敷座付近	報	奈
	長方形断片	1	金堂北側階段付近	報	奈

掲載：報は報告書図・写真、文は報告書記述、図は本書 保管：府は大阪府教育委員会、奈は奈良文化財研究所

て造像されたものか。ただし台座まで表現された17は下端部がやや分厚いために壁面等に立てかけることが容易であるが、下端部が蓮華座で終わっている18は安定性が極めて悪い。したがって両者の間には「安置する」「持ち運ぶ」など奉祀する形態に違いがあったかもしれない。なおこれら2体と同形・同大の資料は山城国府跡出土例などに見ることができる〔倉吉博物館1992〕。

(2) 瓦類

軒丸瓦

主要伽藍の軒丸瓦は昭和36・37年度の発掘調査で12種類83個体、平成元年度の発掘調査で4種類5個体が出土している。これらについて『報告書』ではIからXIの12型式に分類しており、本書でもこれに準拠する(表3、図10・11)。なお最近同じ資料について再検討が行われ、VI型式がa・bに2分されるとともに、各型式の点数も若干変更されている〔今井・林2010〕。ただし表3ではオリジナルの点数を掲げておく。

軒丸瓦の法量や製作技法の特徴などは『報告書』や今井・林論文で詳細に論述されているので、ここでは簡単な紹介に留める。19・20はI型式の素弁八葉蓮華文軒丸瓦。比較的大きな中房に蓮子を方形に配し、赤褐色で固く焼成され、丸瓦部には綱叩き目がある。V型式に次いで出土点数が多い。講堂跡出土の1点は摩滅の著しい小片であり、後に混入した可能性も指摘されている。21はII型式の素弁八葉蓮華文軒丸瓦。1+4の蓮子を配する中房は小さく、外縁は高く、瓦当厚は厚い。塔跡で1点出土している。同範例が京都の乙訓寺にある〔藤田1991〕。22はIII型式の重弁八葉蓮華

表3 昭和36・37年度、平成元年度発掘調査出土軒丸瓦・軒平瓦

型式	特 徴	昭和36・37年度			計
		塔	金堂	講堂	
軒丸瓦	I 素弁八葉、中房蓮子1+8、繩目叩き	2	16	1	19
	II 素弁八葉、中房蓮子1+4	1			1
	III 重弁八葉、中房蓮子1+4	1			1
	IV 素弁十一葉、中房蓮子1+8	1			1
	V 重弁八葉、中房蓮子1+8、外縁珠文、繩目叩き	1	19	4	24
	V' 重弁八葉、中房蓮子1+8、珠文なし、繩目叩き	4	12		16
	VI 重弁八葉、T字形間弁、中房蓮子1+6、繩目叩き	1	1	2	5
	VII 重弁八葉、弁端に直線付加、間弁部分に珠点、中房蓮子1+8			2	2
	VIII 重弁七葉、間弁部分に珠点、中房蓮子1+8、内・外区間に溝	2	4	4	11
	IX 複弁八葉、外縁素文			1	1
	X 複弁六葉	1			2
軒平瓦	XI 複弁八葉、外縁線鋸歯文、繩目叩き	1	2	1	4
	三ツ巴文(江戸時代中期)				1
	I 二重弧文、直線彎、E-2・D-1・F-12叩き	9			9
	II 三重弧文、段頓、繩目叩き	15	1		16
	III 四重弧文、段頓			2	2
	均整唐草文(鎌倉時代)			2	2

文軒丸瓦。大きさ・焼成・胎土・製作技法などII型式と類似し、瓦当厚も厚い。塔跡で1点出土しているが、他に後に紹介する僧房跡でも1点出土している。同范例が京都の山崎廃寺にある〔藤田1991〕。23は素弁十一葉蓮華文軒丸瓦。塔跡から1点出土している。24はV型式の重弁八葉蓮華文軒丸瓦。外縁に32個の珠文を配している。丸瓦の接合方法(接合溝、丸瓦端部を凹凸両面から指で押さえる、他)や丸瓦部の繩叩き目などI型式に類似し、出土点数が最も多い。25はV'型式の重弁蓮華文軒丸瓦。V型式から外縁の珠文を除いたもので、瓦当厚はV型式に比べ若干厚い。27・28はVI型式の重弁八葉蓮華文軒丸瓦。間弁はT字形で、蓮弁がV型式に比べて細く線描き風になっていている。今井・林論文では当初のVIa型式27と中房・蓮弁の一部を彫り直して瓦当径が若干大きくなつたVIb型式28に分けられている。VII型式は小片で良好な資料ではないため省略したが、代表例は図4の5・6である。26はVII型式の重弁七葉蓮華文軒丸瓦。間弁先端に珠点を置き、丸瓦との接合は接合溝を設げず瓦当周縁からやや内側に丸瓦部を置き厚く粘土を添えている。丸瓦剥落箇所に側板連結模骨痕跡がある。29はIX型式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦。丸瓦接合時に瓦当裏面に刻み目を施す。講堂で1点出土。30はX型式の複弁六葉蓮華文軒丸瓦。塔跡から3点出土。中房が欠損しているが、平成元年度発掘調査で出土した資料では中房には1+4+8の蓮子が配されている〔柏原市教育委員会1989〕。31はXI型式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦。外区内縁に32個の珠文と外縁に21個の線鋸歯文を配している。丸瓦部に繩叩き目が見られ、丸瓦の接合には凹凸両面に粘土を厚く添えている。なお塔跡では江戸時代の軒丸瓦が出土しており、神社拝殿に伴うものであろう。

軒平瓦

主要伽藍の軒平瓦は昭和36・37年度の発掘調査で3種類27個体、平成元年度の発掘調査で1種

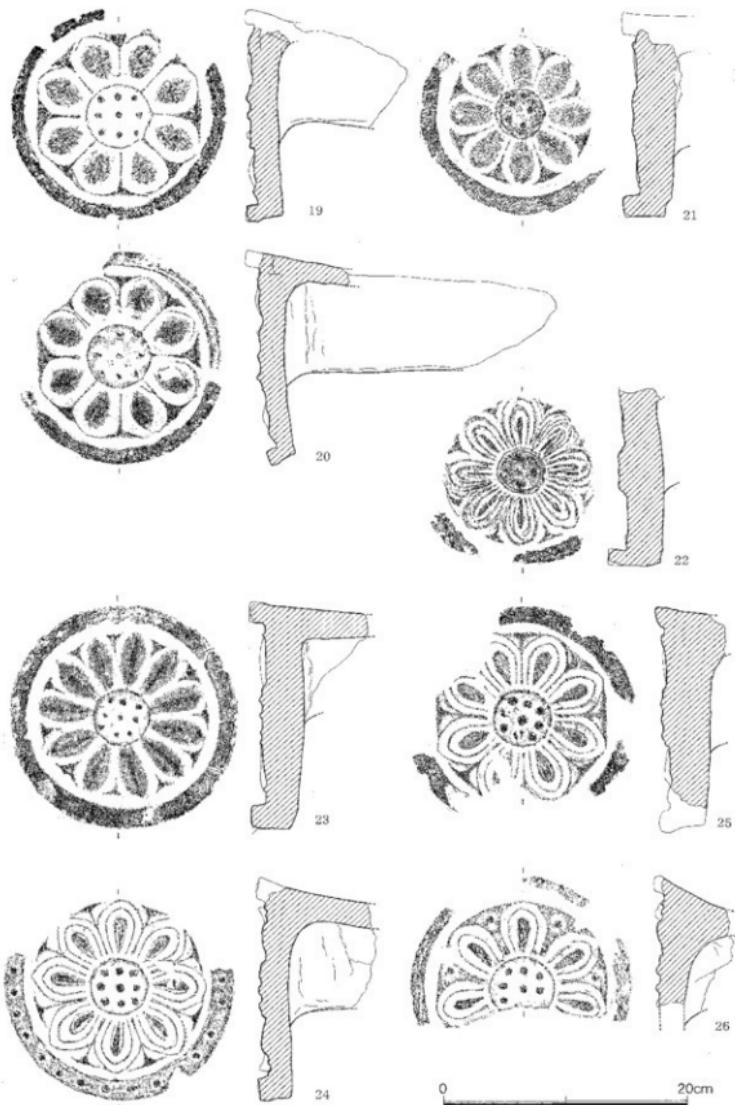


図10 昭和36・37年度発掘調査 軒丸瓦（1）（府教委所蔵、奈文研保管）

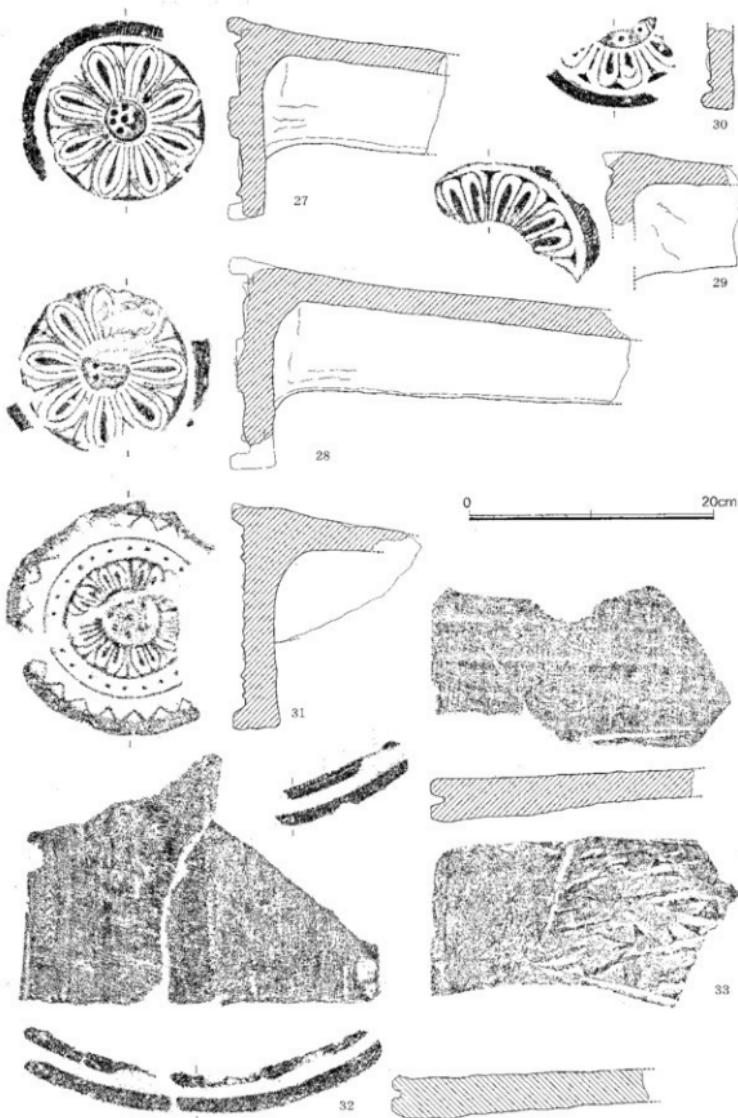


図11 昭和36・37年度発掘調査 軒丸瓦(2)・軒平瓦(1) (府教委所蔵、奈文研保管)

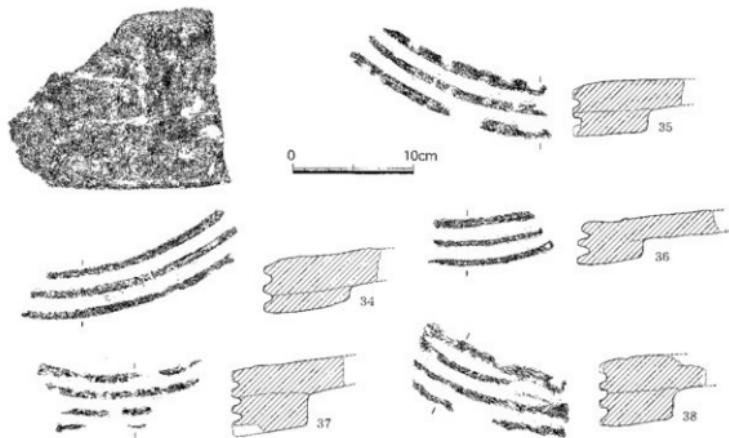
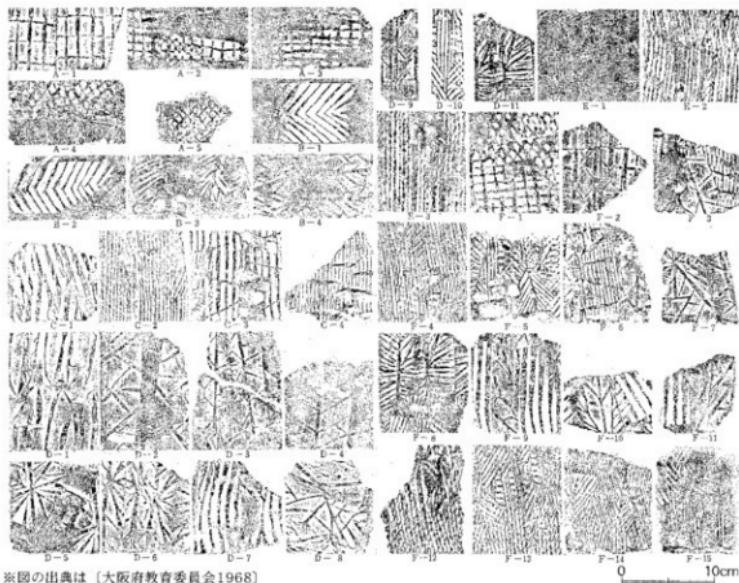


図12 昭和36・37年度発掘調査 軒平瓦（2）（府教委所蔵、奈文研保管）



※図の出典は〔大阪府教育委員会1968〕

図13 昭和36・37年度発掘調査 平瓦（府教委所蔵、奈文研保管）

類1個体が出土している（表3、図11・12）。『報告書』でIからIIIの3型式に分類され、本書もこれに準拠する。また軒平瓦についても今井・林論文ではI型式をA・B、II型式をA・Bに細分している。軒平瓦の法量・特徴の詳細は『報告書』や今井・林論文に譲り、ここでは簡単に紹介する。32・33はI型式の二重弧文軒平瓦。直線顎で、模骨痕のある平瓦部には縄叩き目、木の葉状叩き目、文様が複合した叩き目などが見られる。今井・林論文では重弧文の断面形が直線的なIA型式32と曲線的なIB型式33に分けている。34～36はII型式の三重弧文軒平瓦。大きな段顎で、平瓦部には縄叩き目がある。今井・林論文ではより厚いIIA型式34・35とやや薄手のIIB型式36に分けている。37・38はIII型式の四重弧文軒平瓦。大きな貼り付け段顎が特徴である^⑤。この他、塔跡では二ツ巴文を中心飾りにした鎌倉時代の均整唐草文軒平瓦が出土している。

丸瓦

『報告書』によれば全て行基式である。平瓦で分類した叩き目（図13）を当てはめると、丸瓦にはB-3・4、C-1・2・3、D-1・6・7、E-1・2・3、F-15類が見られるという。

また今井・林論文によれば側板連結模骨を用いるものと用いないものがあり、前者には綾杉文系（B類）や縄目文系（E類）の叩き目が伴い、側板連結模骨には幅が1.0～1.5cmという極めて細い模骨痕が報告されている。なお分割面はケズリ調整されるものと未調整のものがある。

平瓦

『報告書』によると平瓦は全て桶巻作りであるという^⑥。凸面には叩き目が良く残り、A類：格子文様、B類：綾杉文様、C類：平行線文を主としたもの、D類：線の交錯している複雑なもの、E類：縄目文様、F：A～E類の文様を混用したものに大別され、さらにA類は5種類、B類は4種類、C類は4種類、D類は11種類、E類は3種類、F類は15種類に細別されている（図13）。

分類基準は『報告書』に詳述されているので述べないが、平成元年度塔跡調査で新種が確認され、A-6類（正方形の格子内に1本ずつの対角線が入る）、A-7類（平行四辺形からなる斜格子文）、D-12類（1本の軸線から上斜方向に数本+横に2本+下斜方向に数本の直線が延びる）が追加された〔安村2000〕。A～E類の単位文様はF類の存在によって時間差がないことになる。また叩き方には縦方向と横方向があり、F類で2種類を混用する場合には両者が混ざることはない。さらにE類は絶対量が少なく、E-1類は講堂跡には全く見られず、講堂跡周辺出土平瓦のはほとんどはF-4・5類であるという。なお大半の平瓦の分割破面は未調整であると報告されている。

ところで、平成元年度発掘調査資料に基づき塔跡の平瓦凸面叩き目の出土傾向が分析されている（表4）。最も多用されている叩き目は縄目文であり、その多くは桶巻作りであるが、一枚作りのものも少なからず存在する。また講堂跡に多いF-4・5類は全く出土せず、A-2類やC-4類が多いのも特徴である。塔跡では8世紀中葉のXI型式軒丸瓦も出土しているので、『報告書』では主要伽藍の平瓦は全て桶巻作りとしているが、調査担当者も述べるようにこれに対応する一枚作り平瓦が存在しても不思議ではない〔安村2000〕。

文字・戲画のある平瓦

文字が籠書きされた平瓦が金堂跡から出土している（図14-39）。平瓦桶巻作りであり、側面

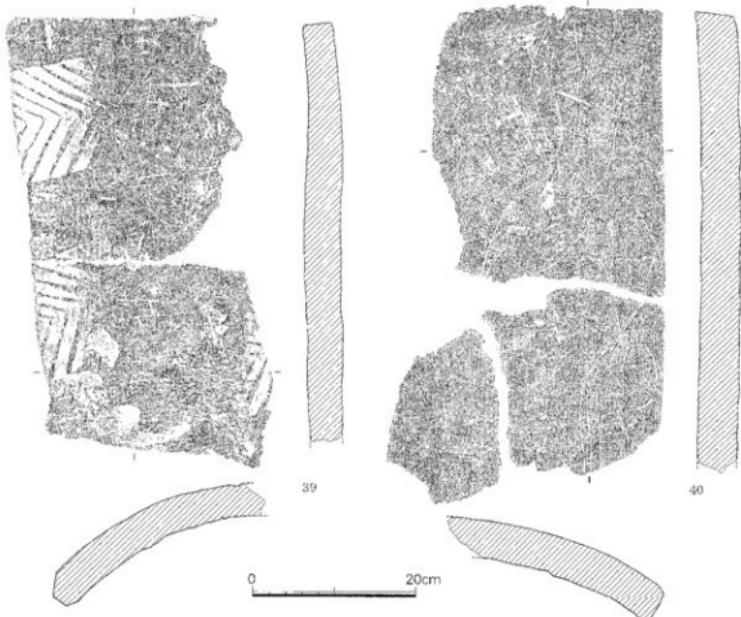


図14 昭和36・37年度発掘調査 文字・戲画平瓦 (府教委所蔵、奈文研保管)

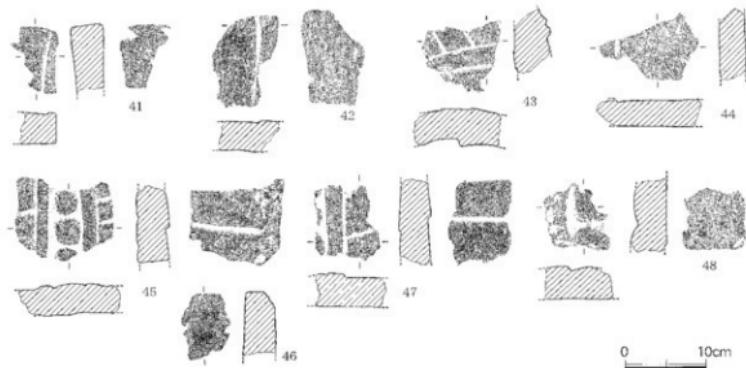


図15 昭和36・37年度発掘調査 騎尾 (1) (府教委所蔵、奈文研保管)

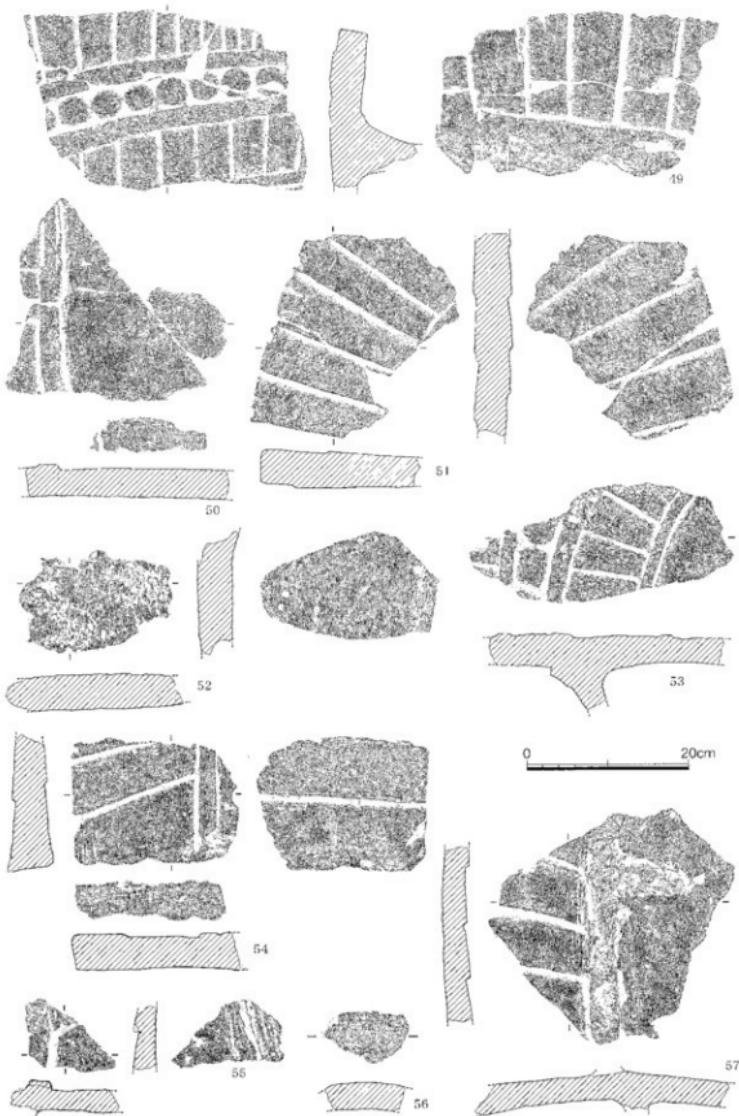


図16 昭和36・37年度発掘調査 膜尾（2）（府教委所蔵、奈文研保管）

は丁寧に面取りされ、凸面には無軸綾杉文（B-1）叩き目がある。長さ38.1cm、幅25.6cm、色調は褐色、焼成は良好、胎土は密。この法量は全ての破片を接合して計測したものであるが、図14は文字の書かれている破片だけを示した。文字は2行あり、左行は『報告書』で「玉作ア飛鳥評」と釈読された。飛鳥評は平安時代の河内国安宿郡であり、鳥坂寺跡からみると大和川対岸の地域である。右行の釈読は進まなかったが、最近になって竹内亮は釈読を発表し、左行は「玉作ア（部）飛鳥評」、右行は「志母乃五十戸」であり、『和名類聚抄』には安宿郡に賀美・尾張・資母の3郷があることから、志母は資母郷に通じるとした〔竹内2009〕。そして五十戸の表現からこの平瓦の年代を680年代初頭以前と理解した。これに対して山路直充は、右行の志母は断定できないので「口口乃五十戸」とすべきであるとし、平瓦の年代も、大和川対岸の片山廃寺で無軸綾杉文叩き目平瓦と藤原宮軒丸瓦6281Aが共伴することから7世紀末以降と考えている〔山路2009〕。

戯画を描いた平瓦も金堂跡から出土したものである（図14-40）。凹面にはわずかに模骨痕が見られる。現存長29.8cm、色調は灰白色、焼成は良好、胎土は密。戯画は丁寧にナデ調整された凸面に籠書きされたもので、『報告書』では椅座の仏像と光背を表現したものとされている。

鶴尾

鶴尾については大脇潔によって詳しく報告・論述されている〔大脇2002〕、ここでは簡単な紹介に留めたい（図15・16）。

41～54は大脇論文で鶴尾Cとされた金堂跡出土の破片。色調は灰白色、焼成はやや軟、胎土はやや粗。複帶構成の綾帯部片、鰐部片、腹部上方片、頂部片などであり、特に頂部で鰐が階段状に途切れることを示す破片41・49を含む点で貴重とされている。53の裏面には腹部にあたる面に弧状の段があり、腹部にも何らかの文様が表現されていたらしい。また50の底面には布痕があり、麻などの敷物の上で製作されていたことが分かる。意匠的には鶴尾Aと共に通するが、型式的には鶴尾Cが古く、鶴尾Aの鰐部正段が外面のみであるのに対し鶴尾Cでは内・外面に表現されている。こうした唐様式の複帶構成の鶴尾は、川原寺の造営を契機に新たに編成された官営工房において造仏工房などの協力を得て考案・製作されたものと考えられている〔大脇2002〕。

55～57は鶴尾Dとされた講堂跡出土の破片。色調は灰白色、焼成はやや軟、胎土には粗砂が多く含まれている。鶴尾A・B・Cよりも薄い作りであり、綾帯1条を貼り付けて鰐部に正段を削り出しているが、57の破片では綾帯が剥落している。この講堂所用の鶴尾Dは百濟様式の中で最も簡略化が進んだ胴部無文鶴尾の系列にあり、金堂よりは1段格下の簡素な意匠の鶴尾として製作されたものと考えられている〔大脇2002〕。

第3節 寺域の調査（昭和58・59年度）

昭和58・59年度に実施した高井田土地区画整理事業に伴う鳥坂寺跡（高井田廃寺）1983-1次・1984-1次発掘調査の成果を、既刊の概要報告書（以下『概報』）に基づいて紹介する〔柏原市教育委員会1986a〕。

第1項 挖立柱建物群など

調査地は主要伽藍のある丘陵から谷を隔てた東側の小丘陵であり、北に高く南に低い標高約30～35mの斜面地である（図1-⑤）。2つの埋没谷と掘立柱建物11棟、井戸3基、檜列4列、石列2列、土坑5基、溝4条、木炭窯3基、集石遺構、古墳1基が検出された（図17）⁸⁾。

（1）埋没谷

谷1は主要伽藍との間の谷。治水用の杭列が検出され、谷奥部は高井田遺跡まで続いている。谷2は調査区中央部にある南北方向の小谷。平坦面の造成で途切れていますが北側の溝1から南側の谷2・2'へと続いている。埋土には多量の土器や瓦以外にも炭・獸骨・木材などが混入していた。

（2）古墳

南に開口する横穴式石室を主体部とした古墳。石室内法 1.2 × 2.4m の無軸横穴式石室で、鉄釘・刀子・土器・鉄滓等が出土した。6世紀後半に築造され、7世紀後半に造寺に伴って壊されたものと考えられている。

（3）掘立柱建物群

雑壇状に造成された平坦面から掘立柱建物群が検出された。建物1は桁行12間以上（26m）×梁行2間（4.7m）の南北棟建物。南北両側から2間に間に間仕切り用の柱穴が各1箇所ある。建物2は桁行5間（15.2m）×梁行4間（10.4m）の南北棟建物。西側に廟がつく。身舎部分の柱穴掘形は一辺 1.6～2 m とかなり大きく、一部の柱穴には直径25cmの柱根が残っていた。建物の東・北・西に溝3を廻らしている。建物3は3間（5.5m）×3間（4.2m）の総柱建物。建物4は3間（5.7m）×2間（3.9m）の南北棟建物。建物5は3間（6.3m）×2間（3.9m）の総柱建物。建物6は桁行3間（7m）の南北棟建物か。建物7は2間（4.5m）×1間（2.5m）の南北棟建物。建物8は3間（5.7m）×3間（4.44m）の南北棟建物。建物9は4間（4.5m）×2間（3.0m）の東西棟建物。直径約15cmの柱根が残っていた。また建物北西隅で曲物を埋設した土坑が検出された。建物10は2間（3m）×1間（2.2m）の南北棟建物。一辺20cmの角材の柱根が残っていた。建物11は2間（2.9m）×2間（2.9m）の総柱建物か。

建物1と2は、その規模や形状等から僧房（建物1）と食堂（建物2）と推定されている。周囲から出土した土器には杯・皿・高杯・甕・鍋・移動式竈・瓶など日常雑器や炊飯具が多いこともこうした推測を裏付けている。時期は7世紀末と報告されているが、これについては疑義もあり、谷2出土の平瓦に1枚作りものが少なからず見られることから〔安村2000〕、網伸也是8世紀に入って建てられたと推測しており〔網2001〕、本書でも同様に認識している。この2つの大型建物廃絶後、重なるように建物3・4・5・11等が建てられるが、それも8世紀末には廃絶する。一方で調査区南東隅の建物8～10は、存続期間が7世紀後半という時期に限られ、規模も小さく、付近に木炭窯を備えていることから、造寺に伴う短期間操業の工房跡と推定されている。

（4）井戸

井戸1は直径 1.1m の円形縦板組井戸。井戸枠に幅15～20cmの板材を縦に32枚組んでいる。高さ 1.6～1.7m、井戸底に30cm大の板石を敷き、枠材の上に10×20cm大の石の小口を内側に揃



図17 昭和58・59年度発掘調査 遺構配置図

えて円形に配している。最下層から多量の瓦、上層から「鳥坂寺」と書いた墨書き器を含む9~10世紀初頭の土器が出土し、廃絶時期は10世紀以後と考えられている。掘立柱建物群廃絶後も利用されており、斎串などが出土することから周辺で何らかの祭祀が執り行われていたのかもしれない。井戸2は溝3に付属する施設で、折敷を井戸枠に利用している。時期は7世紀末~8世紀前半か。井戸3は石組みの集水井戸。時期は8世紀代か。

(5) 木炭窯

木炭窯1は現存長6m、幅1.1mで、焚口・焼成室・煙道を備えている。焚口の形状はL字状で、ここから多量の焼土と土器が出土し、焚口に続く焼成室には藁灰が厚く堆積していた。こうした特徴から、造寺に伴う小鍛冶用の木炭窯ではないかと推測されている。時期は7世紀中頃~後半。木炭窯2・3は地山をU字状に掘りくぼめた窯で、内部にはスサ入りの窯壁や藁灰が堆積していた。

時期はいずれも7世紀後半か。

(6) 集石遺構

谷2の埋没後、調査区中央部の建物群と南東部の建物群とを分けるように南北20mの長さに及ぶ溝が掘削され、その溝に多量の石材が集積されていた。石材の大きさは20cm程度から2m大まで多样であり、花崗岩や砂岩を主とし、一部には人為的に積み上げたと見られる箇所も存在した。用途は不明であるが、時期的には掘立柱建物1・2と同時期に存在していたと報告されている。

第2項 遺物

遺物は瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・埠など）、土器（土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器など）、銀治関連遺物（鉄滓・銅滓・輪羽口・埴塙など）、木製品（舟串・横櫛・刀子柄・曲物容器底板・建築部材など）、金属製品（銅製飾金具・鉄釘・刀子など）、石製品（紡錘車・埴輪（馬形・家形・円筒・朝顔など）などが出土している。7世紀後半～8世紀代の寺院関連遺物が大半だが、寺院に先行する時期のものも多い。詳細は『概報』に譲り、寺院関連遺物について簡単に紹介しておこう。

(1) 瓦

瓦は一部を除き谷2の埋土から出土している(図18)。58～65は軒丸瓦。58はI型式。焼成は良好、色調は暗黒灰色。59はIII型式。焼成は良好、色調は青灰色。61～63はV型式。焼成は良好、色調は灰褐色。60はVII型式。焼成は良好、色調は灰褐色。64・65はXI型式。焼成は良好、色調は暗黄灰色。65のみ谷1から出土。66～69は軒平瓦。66～68はI型式。67・68の平瓦部凸面にはD-1類の叩き目がある。焼成は良好、色調は灰褐色・黄褐色。69はII型式。焼成は良好、色調は暗青灰色。平瓦再整理の過程でV型式軒丸瓦1点、I型式軒平瓦1点が追加されている〔安村2000〕。丸瓦はいずれも行基式。繩叩き目をナデ消したものが多いが、なかには70のように別種の叩き目

表4 鳥坂寺塔跡・僧房跡出土平瓦の特徴

類別	塔跡		僧房跡周辺		類別	塔跡		僧房跡周辺	
	点数	%	点数	%		点数	%	点数	%
A-1	2	0.2	65	1.3	D-1	47	4.7	185	3.8
A-2	129	12.8	2	0	D-2	11	1.1	36	0.7
A-3	0		2	0	D-3	47	4.7	240	4.9
A-4	0		8	0.2	D-4	0		6	0.1
A-5	0		3	0.1	D-5	4	0.4	3	0.1
A-6	50	5	1	0	D-6	0		59	1.2
A-7	4	0.4	0		D-7	83	8.2	119	2.4
B-1	3	0.3	6	0.1	D-8	0		15	1.2
B-2	0		2	0	D-9	0		0	
B-3	0		0		D-10	0		133	2.7
B-4	0		57	1.2	D-11	13	1.3	0	
C-1	0		4	0.1	D-12	55	5.5	0	
C-2	0		34	0.7	E-a	212	21	1908	38.9
C-3	12	1.2	103	2.1	E-b	78	7.7	1377	28.1
C-4	209	20.7	278	5.7	F-a	46	4.6	222	4.5
					F-b	4	0.4	40	0.8
					合計	1009		4908	

・表の出典は〔安村2000〕

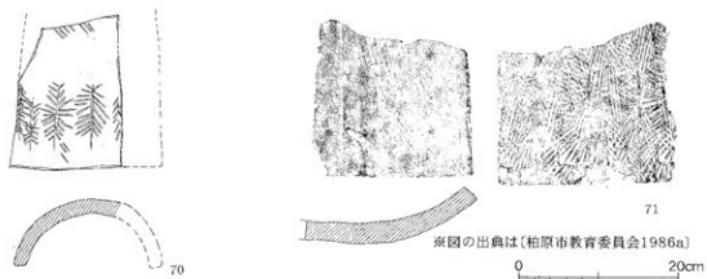
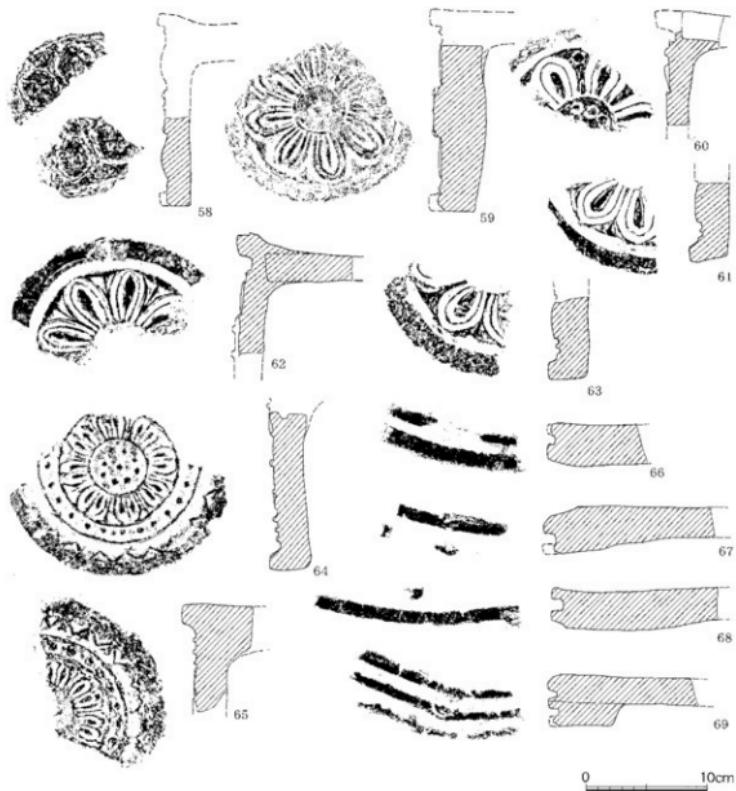
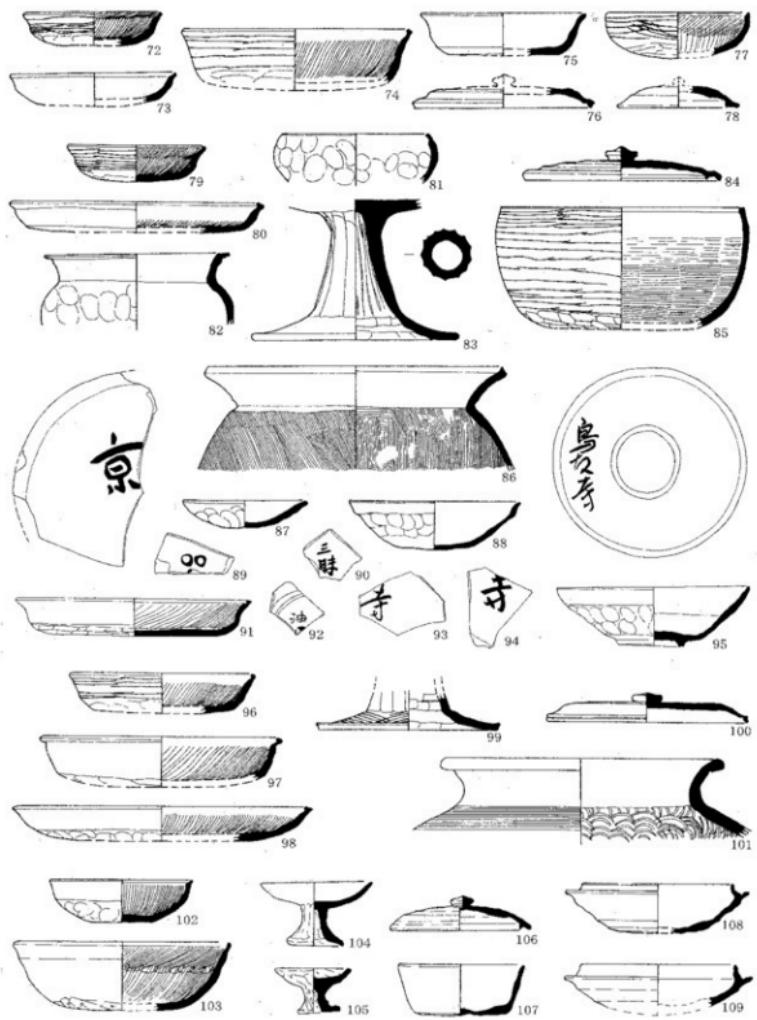


図18 昭和58・59年度発掘調査 瓦



72: 建物1 73・74: 建物2 75・76: 建物5 77・78: 建物8 79~85: 溝3 86~88・95: 井戸1

96~101: 谷1 102~109: 谷2 89~94: その他の墨書き器

※図の出典は〔柏原市教育委員会1986a〕

0 10cm

図19 昭和58・59年度の発掘調査 土器

(D-11?) を施したものもある。

平瓦は再整理の成果に基づいて概要を紹介しておこう(表4)。この表でE-a類は縄叩き目で補巻作り、E-b類は縄叩き目で一枚作り、F-a類は縄叩き目を含まない複合文様、F-b類は縄叩き目を含む複合文様になる。また塔跡の数値は平成元年度発掘調査資料によるもの。僧房跡出土の約5000点の平瓦のうち最も多い叩き目はE類で、全体の67%を占めている。次はC-4類(5.7%)、F類(5.3%)、D-3類(4.9%)であり、さらにD-1類(3.8%)、D-10類(2.7%)、D-7類(2.4%)、C-3類(2.1%)と続く。縄叩き目が過半数で、年代的に後出する一枚作りの数量も多い。これらの数値を塔跡と比較すると大きく異なっている。整理を行った安村俊史は、谷2の瓦の多くは最も近い金堂からもたらされた可能性が高く、こうした様相も金堂の平瓦の特徴と考えている〔安村2000〕。なお平瓦再整理の過程で埠1点が追加されている〔安村2000〕。

(2) 土器

寺院関連の土器の一部を『概報』から抜き出し造構ごとにまとめた(図19)。このうち89~95は墨書き土器、墨書きには施設または場所を示す「寺」(93・94)や「鳥坂寺」(95)、仏教用語の「三昧」(90)、記号や習書(89)の他に「大」「十」「京」(91)、「美家」、「油口」(92)、「鳳」、「諸氏」、「玉友」などがある。44点出土しており、文字28点のうち「寺」は13点。土師器杯・皿・椀の底部に記す場合が多く、時期は8世紀代がほとんどである。「鳥坂寺」の墨書きは土師器椀の体部外面に書かれているが、その土器は完形、口径14.5cm、器高4.9cm、焼成は良好、色調は黄灰色、時期は9世紀後半から10世紀初頭。墨書き土器は調査区が寺域に含まれることを示し、高井田所在の古代寺院跡が『続日本紀』記載の「鳥坂寺」であることを示している。

註

- その後の高井田遺跡の発掘調査でも下駄の出土例が多い。
- 重井八葉蓮華文で周縁に珠文が配されている。名称は昭和36・37年調査の報告書に依拠したもので、以下の本書における記述もこれに基づいている〔大阪府教育委員会1968、以下『報告書』〕。
- 図6の造構平面図は、『報告書』掲載の図に現在の井戸・狛犬の位置と座標値を加えたものである。
- 図7の造構平面図・立面図は、『報告書』掲載の図面が小縮尺で細部が判然としなかつたため、府教委の許可を得て発掘調査時に現場で作製した図面を再トレースし、これに世界測地系の座標値を加えたものである。
- 図8の造構平面図は、註4)と同じく府教委の許可を得て発掘調査時に現場で作成した図面を再トレースし、これに世界測地系の座標値を加えたものである。
- III型式のうち1点は、小片のため判断しにくいが、後述するIV型式の可能性がある。
- もっとも『報告書』によれば丸瓦・平瓦について観察を終えた資料は金堂と講堂基壇周辺に堆積した瓦の一部のみであるという。したがって厳密に言えば塔跡の状況は反映されていないことになる。
- ここに掲載した造構配置図は、『概報』の図3を一部改変して描き直した図面に、柏原市教育委員会文化財課で保管している当時の測量図(日本測地系)から変換した世界測地系の座標値を加えたものである。

第4章 平成21・22年度の調査

今回の調査では、大きく塔跡地区、金堂跡地区、講堂跡地区に分け、講堂跡周辺は講堂跡東地区、講堂跡西地区…と調査地区を設定した（図20）。また各調査地区には、昭和36・37年度の調査範囲と一部重複する調査区と、新たに調査を行った調査区がある。前者は塔跡1～3区（塔雨落溝）、金堂跡1区（金堂北階段）、金堂跡2区の北側（金堂南階段と南辺基壇）、講堂跡1～3区（講堂礎石）、講堂跡4区（講堂礎石と講堂北辺中央部）であり、後者は金堂跡2区の南側、講堂跡東1～6区、講堂跡西1～4区、講堂跡北東1区、講堂跡北1区、講堂跡北西1～3区が相当する。なお遺構番号は、それぞれの調査地区ごとに付けている。

第1節 塔跡

塔跡は天湯川田神社境内にあり、約50m四方の平坦地のやや南寄りに位置する。標高は約43mを測る。今回の調査では、雨落溝の位置と現状を確認するため、1～3区の調査区を設定した。なお塔跡の北側には神社拝殿が建ち、塔心礎は、その拝殿前左手の狛犬南側に位置する。

調査は、まず右手の狛犬南側に1区を設定し雨落溝の検出を行った。その雨落溝から以前の平面図を基に、西に11mの地点に2区、2区から南に5mの地点に3区を設定した（図21）。

層位は、いずれの調査区にも、まず硬く締まった表上が10～15cmほどの厚さで堆積していた（図22）。3区周辺では神事に関連して火を焚くことがあったようで、表土や搅乱層中には炭や焼土が含まれていた。表上下の旧調査埋土を除去すると、雨落溝に伴う板石列とともに、雨落溝内整地層（2～4層）、その周辺の整地層（5～8層）が検出される。一部、断割り調査を行ったところ、さらに下層にも整地層（9～11層）があることが判明している。

第1項 塔基壇

今回設定した調査区には、以前の調査で推定された基壇部分は含まれていないが、その周間に巡る小石敷が2区で見つかっている。小石敷は2～5cm大の円礫で構成され、石種は安山岩や砂岩などである。標高は約43.15mで、雨落溝の板石上面とほぼ同一レベルである。以前の調査では、この小石敷が約90cmの幅で検出されている。1区基壇側の標高は約43mで、2区の小石敷に比べ約15cm低く、小石敷は削平されたとみられるが、この面で凝灰岩片が集中する範囲が検出された。凝灰岩片を含む層は、後述する雨落溝内でもみられた（2・3層）。これらの凝灰岩片は、基壇設置の際の加工屑と考えられることから、塔基壇にも凝灰岩の切石が使用された可能性が高い。

第2項 雨落溝

板石を直線的に並べ溝の側石とし、その幅は約40cm、溝底の標高は約43mを測る。2区の遺存状

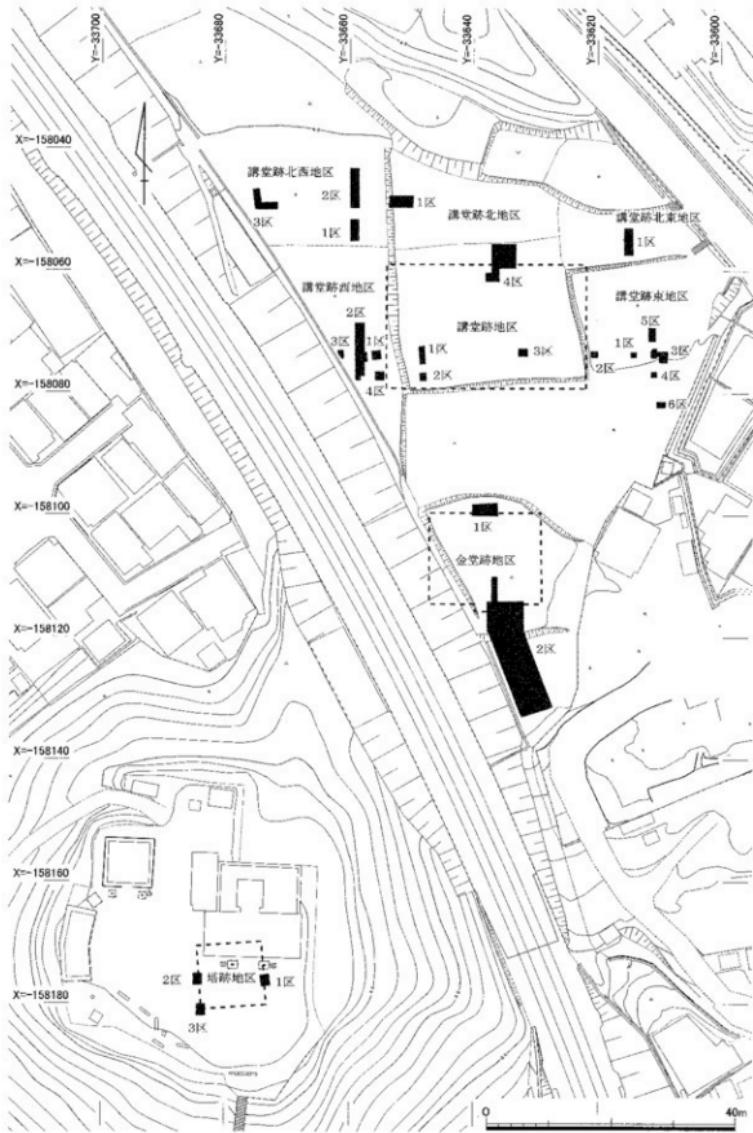


図20 平成21・22年度調査区位置図

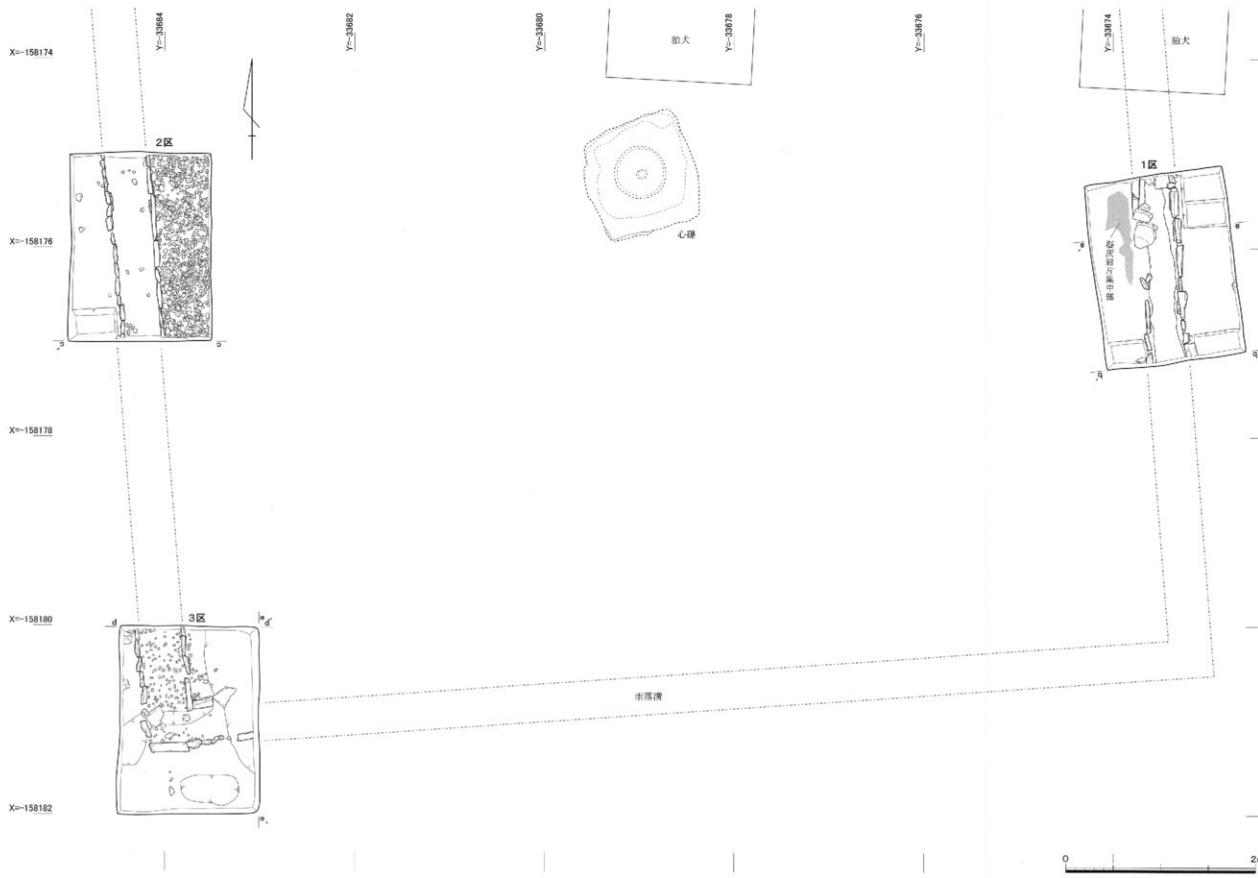
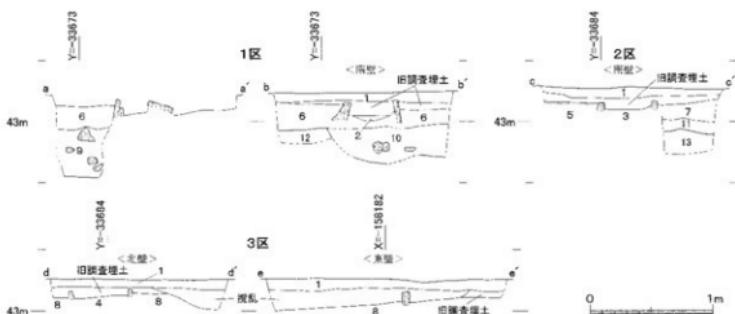


图21 塔跡1~3区 平面图



1. 混凝 (5Y7/4) 粗砂 かなりしまる <素土>
 2. 明黄泥 (10YR6/6) 中砂 しまる 凝灰岩片を多く含む
<溝内整地土>
 3. 明黄泥 (10YR7/4) 中砂～粗砂 しらる 円礫・凝灰岩片を少數含む
<溝内整地土>
 4. にふい黄泥 (10YR7/4) 中砂～粗砂 円礫を多く含む
<溝内整地土>
 5. にふい黄泥 (10YR7/4) 中砂 しまる 円礫を多く含む <整地土>
 6. 明黄泥 (10YR6/6) 中砂～粗砂 しまる 硫化物を含む <整地土>
 7. 明黄泥 (10YR7/4) 中砂～粗砂 しまる 硫・白色鉱を多く含む
<素地上>
8. にふい黄泥 (10YR7/4) 中砂～粗砂 硫・白色鉱を含む <整地土>
 9. にふい黄泥 (10YR6/4) 粗砂 ややしまる 大型礫を多く含む
<整地土>
 10. にふい黄泥 (10YR6/4) 中砂～粗砂 ややしまる 硫を含む
<整地土>
 11. 明黄泥 (10YR7/6) 中砂 しまる 硫・白色鉱を多く含む
<素地上>
 12. 混凝 (2, R7, 4) シルト しまる 地山礫を含む <地山>
 13. にふい黄泥 (10YR7/2) 中砂～粗砂 しまる <地山>

図22 塔跡1～3区 断面図

況が最もよく、1・3区では板石列の一部が倒れたり、抜かれたものもあった。各板石は、長さ10～30cm、幅2～5cmで、板石上面から現状での溝底までは約10cmの高さを測る。側石の石種は主に安山岩である。3区で検出した雨落溝の隅部には、比較的大きな板石が置かれている。また側石の補強のためか、一回り小さな板石を溝内側に据え、側石と重ねて立てている箇所もみられた。この溝の軸方向は、南北方向をみると座標北に対して約4°西に振る。心礎部分は今回未調査のため、以前の調査成果を援用すると、心礎中心部から基壇側の側石までは5.1～5.2mとなっている。

1区では、溝内に凝灰岩片を多く含む層（2層）がみられ、その検出ラインが板石列に並行することから、当初、板石設置のための掘形と考えられた。しかし断割り調査を行ったところ、2層は溝内にレンズ状に堆積した層であることが確認された（図22 b-b'）。この状況から基壇構築までの工程を復元すると、まず地山層（12層）の上に9・10層が盛られ、さらにその上は6層により整地されるが、それと同時に板石列の設置を行う。その後、おそらく凝灰岩切石による基壇の構築とともに、凝灰岩片を含む層が、溝内・板石列周辺に整地層として盛られ、最終的には雨落溝から基壇側にかけて、円礫が敷き詰められる状況が想定される。ただし3区の溝内整地層（4層）では、円礫が点在していることから、部分的に溝内にも円礫を敷いていた可能性がある。なお10層をみると、地山層を掘り込んだようにもみえるが、同じ整地層である9層が観察された地点では、そのような掘り込みがみられない（図22 a-a'）。したがって調査範囲の限られている現時点では、塔基壇範囲の全体を掘り込んで地業を行ったというよりも、地山層の一部を掘り込むなどして整地したものと考えておきたい。

第2節 金堂跡

南北に延びる丘陵上に位置する金堂跡は、現地表面で標高約40mを測る高まりとなっている。西側は線路の法面と接し、北側・南側は一段下る。北側ブドウ畠との境には高さ1mほどの石垣があり、南側平坦地との比高差も約1mを測る。

今回この調査地では、金堂北階段の現況を確認するために1区、金堂南階段と基壇南辺の現況および、南側に広がる平坦地での遺構の有無を確認するために2区を設定した。

第1項 金堂跡1区

この調査区は以前の調査範囲と重複するため、表土以下は全て旧調査埋土である（図23）。調査区の現況は地表面に西側登り葛石と羽目石の一部が露出し、周囲にも羽目石上部の凝灰岩が露出していた。なお以前の調査では、基壇最下部の延石下端を検出しているが、本調査は現状確認を目的としているため、延石上面の検出に留めた。

（1）金堂北階段・基壇

北階段・基壇は、最下部の延石にのみ安山岩・閃緑岩などの自然石が使用され、他は凝灰岩切石で構成される。延石は長さ30～60cmと様々だが、階段前面には比較的小形の石材が置かれる。階段中央付近の延石外側で、30cmほどの礫が1点検出されている。延石上面よりわずかに低く、『報告書』では他にも数点見つかっているが（図7）、性格は不明である。

地覆石は長さ50～100cm、高さ20～22cm、基壇部で見付けの奥行き15～17cmを測り、上面の標高は約39mである。階段部では地覆石をコの字状に張り出させている。階段幅は側面の地覆石外面間で288cm、出は基壇部と階段前面の地覆石外面で92cmを測る。基壇地覆石のみ外面上部の一部を切り欠いており、階段側面地覆石に切り欠きはない。また登り葛石を固定するため、平面22cm×12cm、深さ5cmの長方形のホゾ穴が階段地覆石にある。西側のホゾ穴は、側面地覆石と前面地覆石との境界部分に位置し、東側のホゾ穴は階段前面地覆石に穿たれる。また基壇地覆石と階段側面地覆石との組み方が西隅と東隅で異なっているが、この点は金堂南階段も含めて後述する。

段石は3段分残っており、ほぼ階段中央部で二分される。段石一つの大きさは、最上部の段石の状況から長さ100～105cm、奥行き32～35cmを測る。高さ（蹴上）は19～22cmで、地覆石の高さとほぼ同じである。段石の角は摩滅して丸く、特に最下部の段石は欠損して斜面となっている（図23 d-d'、e-e'）。踏面は、1段目（地覆石上面）で24～26cm、2・3段目で19～24cmと、1段目の踏面が若干広い。なお東端の階段前面地覆石の奥行きが29cmであることから（図23 b-b'），最下部の段石は3～5cmの幅で階段前面地覆石に載っている。また登り葛石を受ける段石の側面部分には、斜めの切り欠きが施される（図23 d-d'、e-e' 破線）。しかし、実際にはその切り欠きに登り葛石は嵌っておらず、隙間に土が入っており、登り葛石はその土と階段側面の羽目石に支えられている。さらに最上部の東側段石側面にのみ、一段低い場所に平坦面が造られる。

階段側面には、それぞれ大小2つの羽目石が使用されている。小形羽目石の階段前方側の角が欠

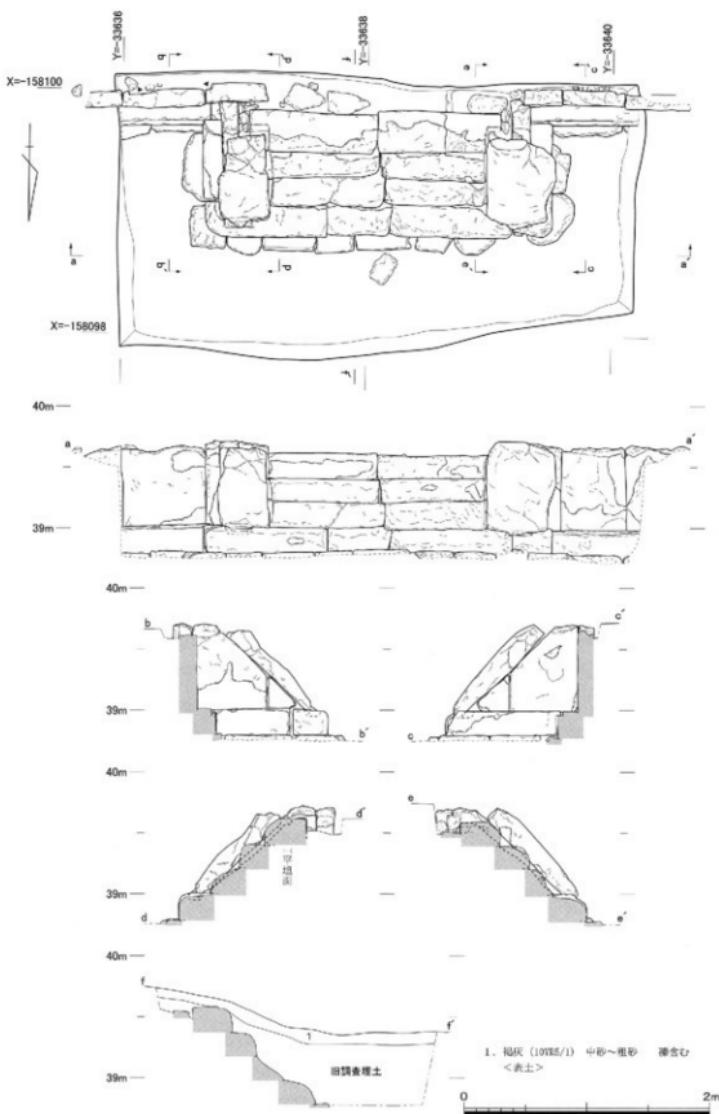


図23 金堂跡 1区 平面図・断面図・立面図

損しているが（図23 b-b'、c-c'）、これは地覆石にあるホゾ穴の空間を確保するために当初から打ち欠いていたらしい。この階段側面の羽目石と段石の間には約10cmの隙間があり、その隙間に土と拳大の凝灰岩片や瓦片が詰まっていた。基壇羽目石は幅30～65cm、残存高65～70cm、厚さ12～15cmを測る。基壇東側の羽目石には内側（基壇側）に加工痕を留めるものがある（図23 ▼印）。また基壇から階段に屈曲する部分で羽目石の組み方が東西で異なり、東側では基壇羽目石外面に階段羽目石を密着させているのに対し、西側では階段羽目石の角部を切り欠き組み合わせている。

登り葛石については、東側の登り葛石は、上部・東側面を欠き遺存状況は良好ではないが、西側の登り葛石の両側面には平坦面が残されており、その幅は58cmを測る。上面に残る平坦面と階段前面地覆石との関係から、長さ約100cm、厚さ約20cmと推定される。下端には先述した地覆石のホゾ穴に納めるためのホゾが造り出される。以前の調査では、この西側登り葛石の上にもう1つ登り葛石片があったが、今回の調査では見つかっていない。旧調査埋土中からやや大形の凝灰岩片が出土していることから、以前の調査で埋め戻す際、その登り葛石が崩落したものとみられる。

他に最上段の段石の背面（基壇側）から、30cm大の凝灰岩片が3点見つかっている。上部にあつた段石を支えるものとも考えられるが、最上部の段石より低い位置にあり性格は不明である。

第2項 金堂跡2区

この調査区の北寄りは、以前の調査範囲である（図24）。なお『報告書』には記載されていないが、階段南側が南北1.3m、東西1.9m以上の範囲で深さ10cmほど掘り下げられ、その埋土中に20～40cm大の礫が4点ほど含まれていた。今回の調査では階段延石の保護のため、範囲を確認したのみで完掘していない。また階段東側と倒れた羽目石の間でも、断割り調査が行われており、今回はそれをさらに掘り下げ、そこから北側に延長する形で調査区を拡張している（図25）。

全体的な層位は、現地表面でも確認される段差際に、土坑状と溝状の擾乱があり、2層（床土）はその擾乱を境に南側にしかない。段差の北側では、瓦片などを多く含む3・4層がある。5層は溝1の埋土である。6層は金堂廃絶後の1次堆積層とみられ、この層にも多数の瓦片が含まれていた。2区南端部は南に向って傾斜し、7層はその傾斜に沿って堆積した層である。8層は溝2の埋土である。金堂周辺の造成に関わる整地層とみられるのが9～16層で、9層（=図25-5層）が地覆石下端から延びる状況から（図25 c-c'）、9層上面が金堂当時の地表面とみられる。ただし、実際には9層と上位層の境界は不明瞭であり、南に傾斜する地形（図24 b-b'、c-c'）を考慮すると地表土の流失や擁擠なども想定されるため、地表面を厳密に区別することは難しい。地山層の17～20層は北から南に向って傾斜し、9・13・16層によってある程度平坦面を造成した後、地形に沿って12層⇒11層⇒10層と順に整地を行い、平坦面を拡大していった工程が想定される。なお10～12層には白色礫・板石が多く含まれており、中でも10・12層が特に多い。古墳時代前期の円筒埴輪片もこの層から出土している。白色礫や板石などは、古墳の主体部で使用された石材の可能性があることから、付近に存在したとみられる古墳時代前期の古墳を壊し、その土を整地層として利用したと考えられる。

1. 鹿灰 (1036/1) シト しまりなし <炭灰>
2. 鹿灰 (1036/1) 中砂 しまる <鶴灰土>
3. 鹿灰 (1036/2) 中砂 やしまる <鹿灰土>
4. にじい黄灰 (1036/4) 中砂 しまる <鹿灰土>
5. 鹿灰 (1036/4) 中砂～堆砂 其を多く含む <地山>
6. にじい黄灰 (1036/4) 中砂 しまる <鹿灰土>
7. 鹿灰 (1036/4) 中砂～堆砂 やしまる <鶴灰土>
8. 黄灰 (2.06/2) 堆砂 しまる マンガナ化質 <鶴2号土>
9. にじい黄灰 (1036/3) 中砂 しまる <鹿灰土>
10. にじい黄灰 (1036/3) 中砂 しまる <鶴灰土>
11. にじい黄灰 (1036/4) 中砂 しまる <地山> 堆物多く含む
12. にじい黄灰 (7.58/4) 中砂 しまる <地山> 堆物多く含む <鶴灰土>
13. にじい黄灰 (1036/4) 細砂～中砂 しまる マンガナ留まり 堆物多く含む <鶴灰土>
14. 砂 (1036/4) 中砂 しまる <鶴灰土>
15. 砂 (1036/4) 粗砂 しまる <鶴灰土>
16. にじい黄灰 (1036/4) 中砂 しまる <鶴灰土>
17. にじい黄灰 (1036/4) 堆砂～中砂 しまる マンガナ混入 <地山>
18. にじい黄灰 (1036/4) 中砂 しまる <鶴灰土>
19. にじい黄灰 (1036/4) 堆砂 しまる <地山>
20. 砂 (1036/6) 粗砂 しまる 地山混多く含む <地山>

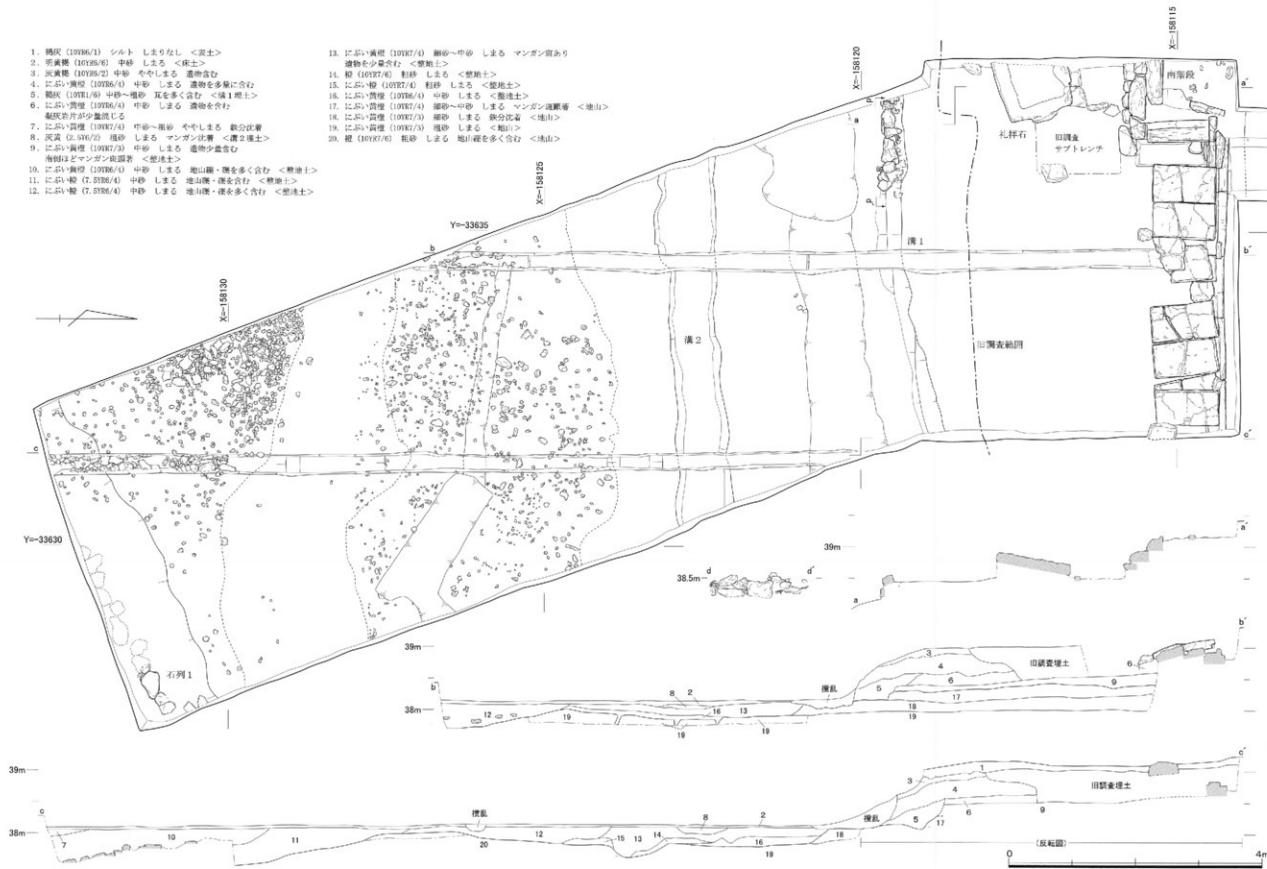


図24 金堂跡2区 平面図、断面図、立面図

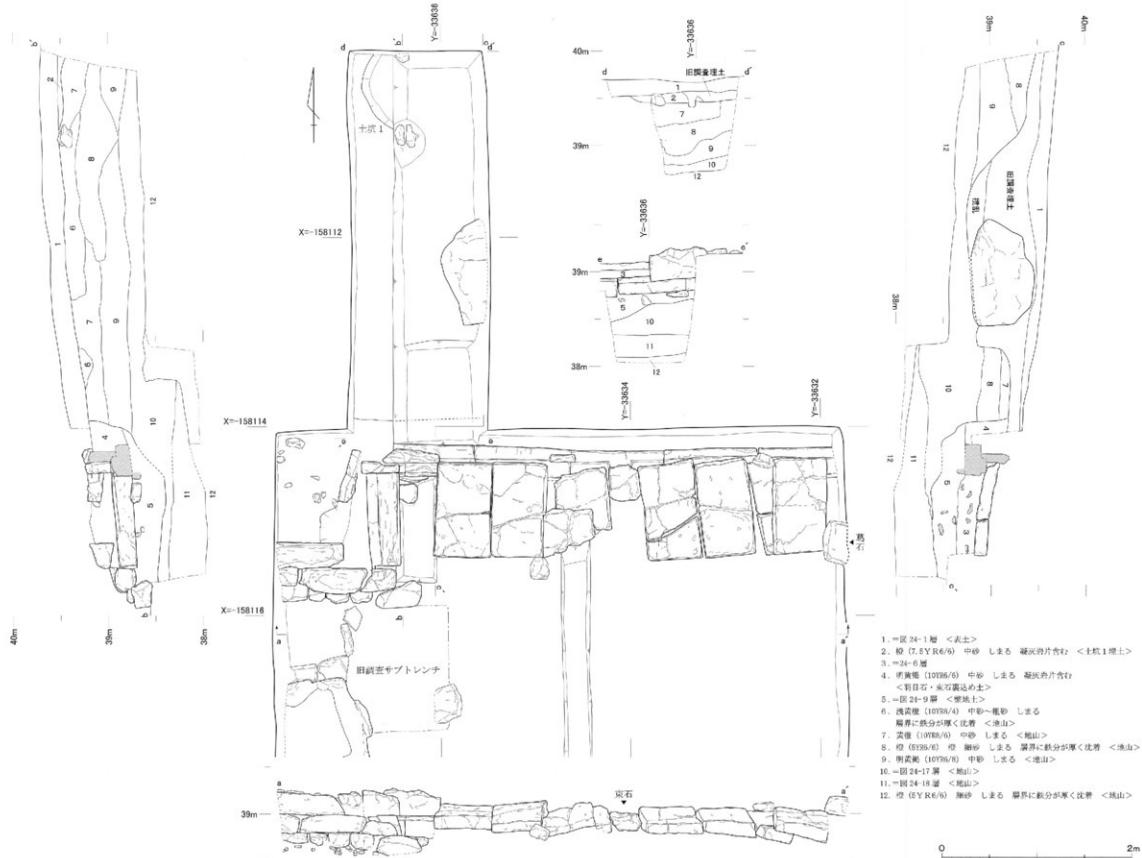


図25 金堂跡 2区北側 平面図・断面図・立面図

(1) 金堂南階段・基壇

南階段は、北階段に比べ遺存状況が悪く、今回の調査区では登り葛石は見つかっていない。また基壇も本来の姿とは大きく異なるが、羽目石は倒れていたために、完存していた。

延石は北階段同様自然石で、階段南東隅には比較的大形の石材が置かれる。また基壇から階段へ屈曲する隅部には置かれているものの、階段側面には並べていない点が北階段と異なる。なお今回検出していない階段西側でも、側面に延石はない(図7)。

地覆石は長さ98~105cm、高さ20~22cm、奥行き32~33cmで、階段前面の地覆石は奥行き28cmを測る。基壇と階段側面地覆石の外面上部には幅3cm、深さ4~5cmの切り欠きがあり、基壇側上部には羽目石を組み合わせるための幅9~14cm、深さ5~6cmの切り欠きが施される。東石を立てる箇所のみ、左右L字形に切り欠く。地覆石上面の標高は、1区と同様約39mとなっているが、階段側面地覆石は延石が下にならぬためか、上面は水平ではなくやや南に傾斜する(図25 b-b')。東端の階段前面地覆石には平面9cm×3cm、深さ3cmほどの切り欠きが、階段側面地覆石と接する部分にあり、登り葛石のホゾを納めるためのホゾ穴とも考えられるが、北階段に比べかなり小さいことから、羽目石を載せるための切り欠きの可能性もある。

基壇地覆石と階段地覆石との組み方について、北階段を含めてみてみると、いずれも基壇地覆石の外面に、階段側面地覆石を合わせている点で共通する(図26)。しかし細部では異なる手法がそれぞれ採られ、南階段東側では幅5cm、奥行き4cm、高さ16cmの四角柱の凝灰岩を、基壇地覆石側に嵌め込んで組み合わせている。北階段では階段側面地覆石の外面上部に切り欠きがないため、図のように複雑に加工し組み合わせており、北階段東側でのみ見付けの大きさ12cm四方の凝灰岩を隅に置く。北階段は南階段に比べ規模が小さく、また階段側面地覆石の切り欠きや、隅部に東石がないなど、視覚的には南階段に比べ簡略化されている。しかし細部では北階段のほうが、より入念な造りがされていると言える。

段石は1段分のみ残されている。検出した長さは70cmだが、『報告書』を参照すると全長は105cm、奥行き29cm、高さ(戴上)は北階段とほぼ同様で22~23cmを測る。上面は磨滅が著しく斜めになっているが、北側の上端部には、段石が載っていたとみられる平坦面がわずかに残っていたことから、踏面は約24cmと推定される。なお1段目(地覆石上面)の踏面は、階段前面地覆石が若干移動している可能性があるため推定で約26cmである。

羽目石は、下端部の一部が立った状態のものもあるが、ほとんどが外側(南側)に倒壊している。土圧により亀裂が入るもの、形状は完存している。寸法は全長98~100cm、幅55~60cm、厚さ10~15cmで、下端部には地覆石と組み合わせるための5cm角の切り欠きが施される。調査区ほぼ中央に延びる分割割りの延長線上の羽目石のみ、折れて重なった状態であった。

東石は基壇から階段へ屈曲する隅部と、基壇部で見つかっている。隅部のものは立った状況で、幅40cm、高さは現状で36cm、厚さ12cmだが、羽目石と組み合わせる部分は8cmと薄い。基壇部のものは南側に倒れているが、羽目石と異なり一部しか残存していない。幅32cm、残存する長さ38cm、厚さ10cmほどとみられる。『報告書』では東石の断面が「凸字形」とあるが、見つかった東石

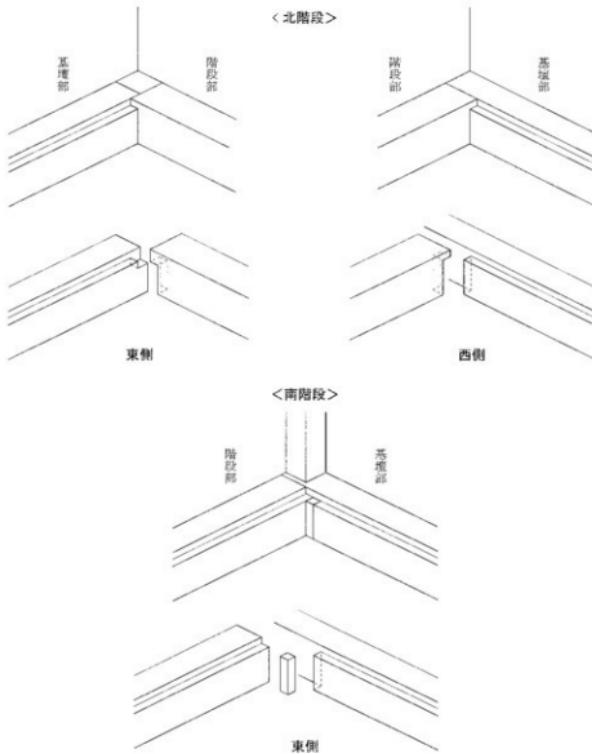


図26 金堂跡 北・南階段地覆石組み合わせ模式図

は磨滅しており、明確な形状は確認できなかった。

葛石とみられる切石が、調査区北側東壁の表土付近で見つかっている。形状や切り欠きがある点から、葛石の可能性が高い。幅は不明で、奥行き47cm、高さ20cm、切り欠きは奥行き3.5cm、高さ2.5cmを測る。『報告書』では高さ19cm、奥行き63.4cmとあり、奥行きが異なる。そのため今回見つかった葛石は、一部欠損したものとみられる。

他に性格不明な凝灰岩の板石が、階段隅の東石の西側に隣接している。長さ56cm、厚さ7cmほどの板状のもので、『報告書』の図面には、階段西側にも同様の凝灰岩がみられる（図7）。階段内部に位置し、双方とも階段側面地覆石と並行せず、若干北側に向って開くように据えられている。位置からみて、段石に関連する切石と考えられる。

これまで述べた基壇外装を構成する凝灰岩切石の状況をもとに金堂南辺の基壇高を復元すると、葛石高19cm、羽目石高98~100cm、地覆石高20~22cmであることから、葛石上端から地覆石下端ま

でが137～141cmとなり、以前の調査成果とほぼ同様である。また葛石上端(基壇上面)の標高は約40.2mと推定される。

基壇に関連して、基壇構築のための掘り込みが調査区北側の拡張部、基壇地覆石北端から約20cmの地点で検出された。地覆石の下方約15～25cmの深さまで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で約80cmを測る(図25 b-b', c-c', e-e')。その断面状況から基壇の構築手順を復元すると、基壇部分の地山層を掘り込み、図25-5層により平坦面を形成。その平坦面上に延石、地覆石を順に設置した後、羽目石・東石を立て、その裏込め土として図25-4層を入れている。なお注意されるのは、最下層の図25-5層から少量の瓦片とともに、階段東側断削り部分において8世紀代の土師器の甕が出土している点である。金堂基壇の築成年代を検討する上で重要な資料である。

北側の拡張部では、他にも金堂の礎石が見つかっている。以前の図面を参考にすると、南北・東西軸とともに1.2mほどで、高さは65cmを測る。『報告書』にも記載されているように、原位置を保っておらず、この礎石を落とし込むための掘り込みが断面から確認できる(図25 c-c')。この礎石の下端付近まで掘り下げたところ、柱を据えるための平坦面が確認されたことから、おそらく上下逆転した状態とみられる。

基壇に付属する遺構として、礼拝石と推定されている家形石棺蓋石が、階段前面地覆石より南に約1mの場所で検出された。以前の報告の通り上下逆転したもので、石種は凝灰岩であるが、石質は基壇のものと異なる。『報告書』の平面図では、金堂基壇と並行して長軸を東西方向に揃えているが(図7)、今回検出したところ長軸方向が反時計回りに若干移動していた。またこの礼拝石の一部とみられる破片が、旧調査埋土中から出土している。

(2) その他の遺構

土坑1

北側拡張部の礎石から北西に約1.5mの地点で検出した(図25)。一部しか検出できなかつたため規模は不明だが、検出面からの深さは約25cmで、周囲に20cm大の礎が点在する。金堂礎石の据え付け土坑で、点在する礎が礎石下に置かれた根石の可能性も考えられたが、基壇上で他に同様の土坑が検出されていないため、明確にはできない。また遺物も出土していない。

溝1・2

溝1は調査区中央から北寄りに位置する(図24)。東西に延びる溝で、北側に向かって緩やかにカーブする。搅乱によって南側の溝肩が失われているため、幅は不明で、北側の検出面からの深さは20～30cmを測る。埋土は中砂～粗砂で、ラミナはみられない。西側の北側肩には20～40cm大の礎が石垣状に積まれ(図24 d-d')、礎の隙間に瓦片が多くみられた。金堂基壇周辺にみられる1次堆積層(図24-6層)を切って、その土を礎の裏込めとして構築したためと考えられる。石積みが東側で途切れていることから、断面で観察できなかつたものの、幾度か掘り直されている可能性がある。出土している遺物から、近世墳に掘削・埋没したとみられる。

溝2は調査区ほぼ中央に位置する(図24)。東西方向に直線的に延び、幅は50～60cm、検出面からの深さは4～8cmで浅い。埋土は粗砂で、ラミナはみられない。調査区南半では、耕作による影

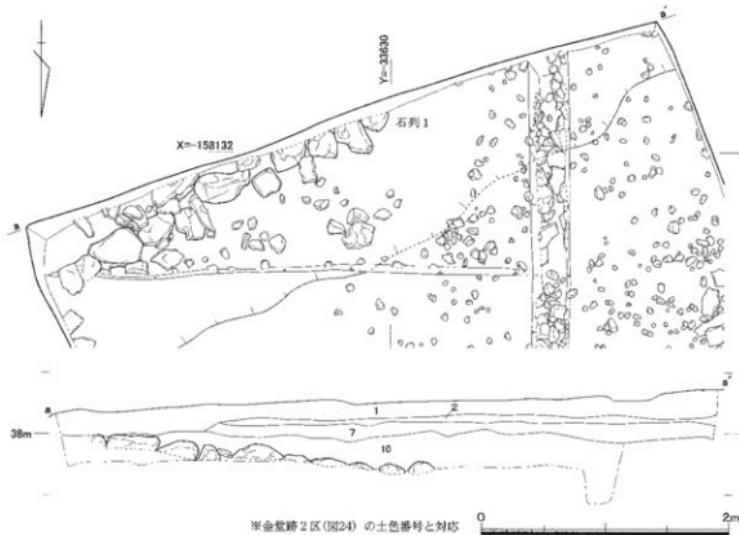


図27 金堂跡2区 石列1平面図・断面(見通し)図

響で、金堂基壇周辺の堆積層(図24-3・4・6層)がないため、どの段階に形成された遺構か判断し難い。出土遺物も少量で、年代を示す遺物はないが、金堂基壇の軸方向と同一である点から、寺院に関連する遺構の可能性がある。

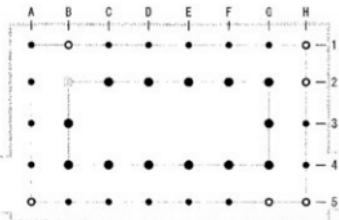
石列1

調査区南端東隅の整地層検出面で、比較的大形の礫が数点見つかった(図24)。性格を明らかにするため、一部掘り下げたところ、礫が北東-南西方向に直線的に並ぶことが確認された(図27)。礫は20~40cm大で比較的丸みを帯び、周囲で多数見つかっている板石とは異なる。礫上面は、西に向かって緩やかに傾斜し、標高は37.8~38.0mを測る(図27 a-a')。礫下方を確認したところ、石垣状に礫を積んでいる様子はみられなかった。現状から旧地形を窺うことは難しいが、石列1を検出した辺りから南側は、谷へと下る斜面地であったことが推定される。石列1に関わる掘形も確認できないため、平坦地造成の際の土留めのために置かれていた可能性が考えられる。

第3節 講堂跡

金堂基壇北辺より北に約30mの地点に講堂中心部があり、現地表の標高は約40mを測る。現況では畠だが、以前はブドウ畠であり、ブドウ棚を支えた支柱が幾本も立ち並んでいる。北側には平坦地があり、北側を除く三方には、基壇の推定範囲付近に段差が巡り、周囲は50cm~1mほど低い。

この調査地区では、講堂跡で見つかっている構造の正確な位置を確認するため、講堂礎石にあたる1～3区と、講堂基壇の北辺にあたる4区の計4箇所に調査区を設定した。なお講堂の礎石について、記載の便宜上、北西の礎石を基点として、北から南に向けて1～5、西から東に向かってA～Hの番号を付し、礎石1A・礎石2B…と呼称する（図28）。



第1項 講堂跡1～3区

調査は礎石4Bの確認から着手し、以前の図面をもとに1区南側部分を掘り下げたが、層位の状況から未調査範囲であることが判明し、北側に拡張したところ旧調査範囲が確認され、礎石4Bを検出した。礎石4Bを基準に、南に約4mの地点に2区、東に約16mの地点に3区を設定した（図29）。

1・2区ともに、表土下に耕作層である2～3層があり、その下層には橙色を呈する4層（床土）が検出される。5層はシルト～細砂の堆積層で、非常に多くの瓦片を含む。瓦片は大形のものが多く、完形に近いものもみられた。このような状況から礎石周囲の未調査範囲には、いまだにかなりの量の瓦片が堆積していることが予想される。3区では床土に相当する層ではなく、耕作層が下方まで及ぶ。1・2区の5層が、3区の4層に相当し、1・2区と同様に瓦片が多く含まれていた。1・2区の6層、3区の5層は、地山層ではなく、礎石据え付けのための掘形埋土とみられる。

（1）講堂礎石

1区の礎石4Bは身舎の南西隅の礎石で、南北軸76cm、東西軸は『報告書』を参考にすると120cm、中央部の標高は39.36mを測る。石種は黒雲母花崗岩である。上面は平坦で、楕円形の柱座が造りだされているが、後述する3区の礎石4Fほど明確ではない。平坦面は南北軸60cm、東西軸65cm以上となっている。

2区の礎石5Bは底の礎石で、南北軸64cm、東西軸94cmと身舎の礎石4Bに比べ一回り小さい。中央部の標高は39.30mを測る。石種は黒雲母花崗岩である。上面は平坦であるが、明確な柱座はみられなかった。平坦面は南北軸55cm、東西軸70cmとなっている。2区の東壁には、凝灰岩の切石の一部が検出されている。これは『報告書』で「扉の唐居敷きの座」の可能性が指摘された凝灰岩で、さらに東側に並ぶ（図8）。北側の比較的大きな凝灰岩は、礎石上面とほぼ同一レベルにあるが、南側のやや小振りのものは、礎石上面より低い位置に据えられている。

3区の礎石4Fは身舎の礎石で、南北軸94cm、東西軸116cm、中心部の標高は39.30mを測る。石種は黒雲母花崗岩である。中央部に平坦面をもち、直径約65cmの円形の柱座が造り出されている。礎石の北西側に、大きな亀裂がみられる。

以上の3基の礎石上面の標高は、39.30m（礎石5B・4F）、39.36m（礎石4B）で、後述する4区の礎石1Eが39.41mとなっており、北側に位置する礎石1Eが最も高い。この結果は『報告書』に

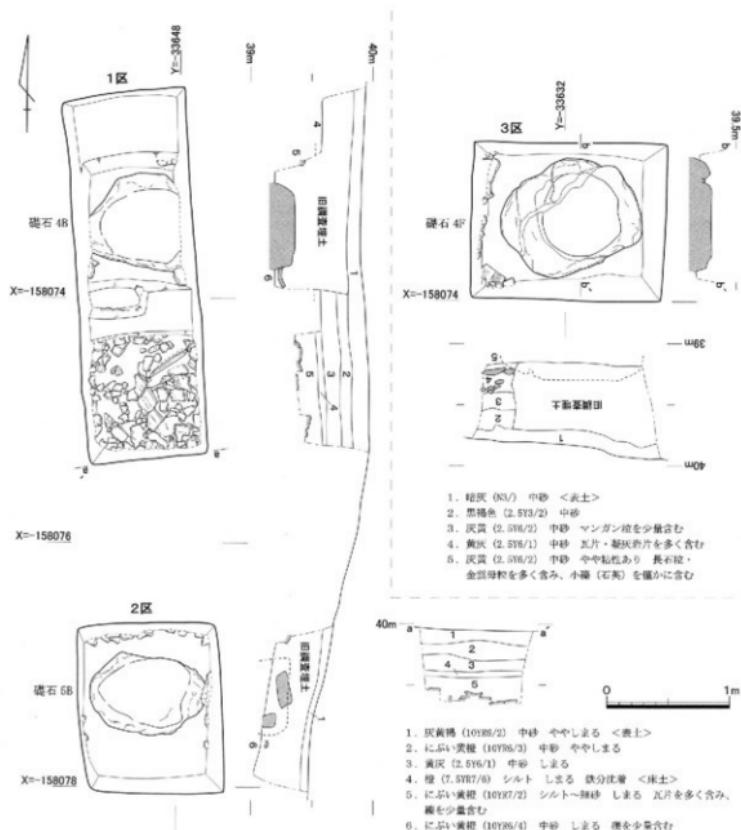


図29 講堂跡1～3区 平面図・断面図

掲載されている講堂礎石高低表とも合致する。その中でも述べられているように、北側から南側に向かって下る地形の傾斜に沿って据えたため、当初から南北の礎石間に10cm前後の高低差が生じた可能性が考えられる。

第2項 講堂跡4区

この調査区は、南半が以前の調査範囲と重複するが、一部南北に陸橋状に延びる未調査範囲が存在する(図30)。当初、4m四方の調査区であったが、基壇と講堂礎石との状況を確認するため、一部南側に拡張した(図31)。

層位を概観すると、表土下では1・2区でも確認された2層(床土)が検出される。それとともに

に、2層を切る形で、東西方向に延びる土管の掘形も確認された。2層下には、耕作層の3～5層があり、3・5層は調査区全体に広がっている。5層には瓦片が多く含まれており、基壇の外側では、5層と下層との境界に多数の瓦片を検出した（図30）。これらは講堂跡1区南側で検出した瓦片と異なり、比較的小片のものが多いことから、耕作層である5層により攪拌された状況とみられる。5層を除去すると、基境外側では6～10層（溝1～3埋土）と18層（地山層）が検出され、基壇部では11～13層が検出される。11・12層は石組1上に堆積する粘土層である。なお11層から、扉金具とみられる複数の鉄製品が出土している。13層は基壇上に薄く堆積している層で、溝3埋土の8～10層と同様に炭化物が混じる。13層下では、礎石掘形埋土（14層）、石組1掘形埋土（15層）、石列1掘形埋土（16層）が検出された。17・18層は地山層で、基境外側でみられた18層には地山礎が多く含まれている。

（1）講堂礎石・基壇

講堂礎石

礎石1Eは講堂中央間東側の底の礎石で、南北軸65cm、東西軸は『報告書』を参照すると75cm、上面中央部の標高は39.41mを測る。石種は黒雲母花崗岩である。上面は平坦であるが、柱座などの造り出しありはみられない。平坦面は南北軸60cm、東西軸50cmを測る。礎石から幅約12cmの範囲で、

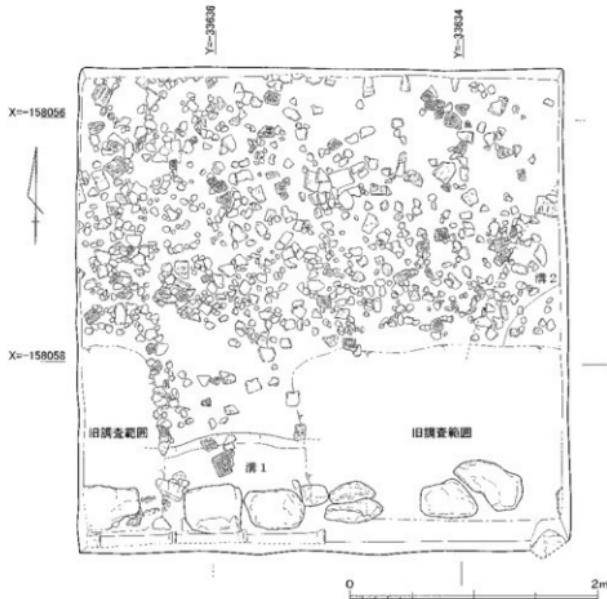


図30 講堂跡4区 遺物検出（5層除去）状況平面図

礎石を据えるための掘形が確認されている。

石列 1

基壇外装である石列 1 は、約 20～50cm の礎で構成され、礎の長軸方向を東西に揃えて据えられている。石種は花崗岩・閃緑岩・安山岩で、人為的な加工痕はみられない。礎の高さは約 20～35cm で、部分的に礎を 2 個積んでいる箇所もある。礎上面の標高は 39.25～39.4m と幅がある。また崩落したのか、一部礎が抜けている部分もみられた。

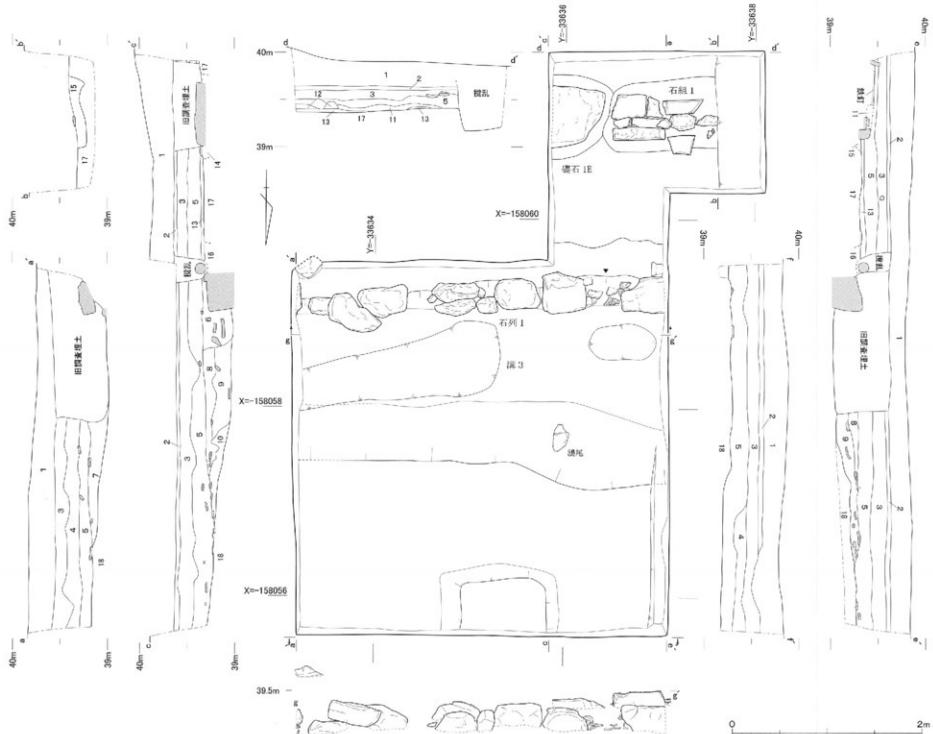
石列 1 から南に 30～40cm の地点で、石列を据え付けるための掘形が確認された。断面調査を行っていないため、深さなどは不明である。なお礎の隙間から瓦片が露出している箇所がある（図 31 ▼印）。『報告書』で、この石列が創建当初のものではなく、造り替えられた可能性が指摘されていることから、露出していた瓦片は、掘形埋土中にともと含まれていた可能性がある。しかし、他の地点では瓦片が露出しておらず、ちょうど礎が抜け落ちた部分とみられることから、石列を修復する際、裏込めとして使用した瓦片が掘形埋土中に沈み込んだとも考えられる。基壇外装全体か、部分的には明確にできなかったが、いずれにせよ二次的な手が加えられている可能性が高い。

溝 3

基壇とほぼ並行して延び、石列 1 からの幅は 1.5～1.8m を測るが、北側の溝肩は明瞭ではなく、緩やかである。検出面からの深さは、最深部で約 25cm を測る。この溝の西側延長部とみられる遺構が、『報告書』の図面に示されている（図 8 磂石 1D 北側）。その図では基壇から 2.3m ほどの距離にあり、今回検出した溝 3 よりも幾分幅が広くなるものの、同一の遺構と考えられる。埋土の 8～10 層には瓦片や土器片以外にも鶴尾片、炭化物が含まれていた。基壇上で検出している 13 層にも炭化物が含まれており、一連の層とした場合、この溝は講堂と並存していた可能性が高い。なお最下層の 10 層は、部分的にしか検出されていないため、幾度か掘り直されたとみられる。この溝は寺域の北限となる斜面に近いこともあり、伽藍に流入する雨水等の排水施設と推定される。地形的な理由で基壇北辺は、南辺や西辺に比べて受ける水量が多くなり、その影響で溝 3 の北側肩は削られ緩やかになり、また基壇外装である石列 1 は崩落しやすい状況下にあったと考えられる。

（2）石組 1

以前の調査が及んでいない礎石 1E の西側で、数点の礎で構成される石組 1 を検出した（図 32）。北東に位置する礎は、長軸 55cm、短軸 12cm と他に比べて大きく、ほぼ垂直に立つ。標高は最も高いところで 39.5m を測る。石種は橄欖石安山岩である。この立石外面の左上は、幅 3cm ほどの曲線がレリーフ状に盛り上がる。おそらく上方に続くものとみられるが、礎上部は後世の耕作により失われている。立石の南側では 10～40cm 大の平面長方形、厚さ 5cm 前後の板石が、一部重なっているものもあるが、基本的に長軸を東西方向に揃えて 2 列敷かれている。これら敷石上面の標高は約 39.4m で、礎石 1E 上面のレベルとはほぼ同一である。敷石のうち、南東にある最も大きな礎の東側面は、隣接する礎石に形を沿わせるためか、波状に打ち欠いている。また立石の西側にも板石があり、これが倒れたものか、原位置のままか判断が難しいが、周囲に抜けた痕跡が確認できなかったことから、当初からこの状態であった可能性が高い。



1. 油更葉 (1075/2) 中砂～細砂 ややしまる <黄土>
2. 砂 (7.3186/3) 中砂～粗砂 ややしまる <灰土>
3. 砂 (076/1) 細砂～中砂 ややしまる マンガノ鋼あり 鉛分微量 <耕作土>
4. 泥塊 (7.3186/2) 黏砂～中砂 ややしまる 鉛分微量 <耕作土>
5. 油更葉 (1075/3) 細砂～中砂 ややしまる 下部に土鉄錆、瓦、瓶を多く含む 鉛分微量
6. 上部層 (076/3) 中砂～細砂 ややしまる 土鉄錆、瓦等を多く含む ラメナあり <鉛1 壤土>
7. 上部層 (076/3) 中砂～細砂 ややしまる 土鉄錆、瓦等を多く含む <鉛2 壤土>
8. 上部層 (7.3186/4) ブルト ややしまる 鉛化物を少量含む <鉛3 壤土>
9. 上部層 (7.3186/1) 粗砂～中砂 ややしまる 土鉄錆、瓦を多く含み、炭化物を含む <鉛3 壤土>
10. 上部層 (7.3186/1) 鮎卵～中砂 ややしまる 土鉄錆、瓦を多く含む <鉛3 壤土>
11. 上部層 (2.3186/1) 鮎卵～中砂 ややしまる 土鉄錆、瓦を多く含む <鉛3 壤土>
12. 上部層 (2.3186/1) 鮎卵～中砂 ややしまる 土鉄錆、瓦を多く含む <鉛3 壤土>
13. 上部層 (2.3186/1) 鮎卵～中砂 ややしまる 土鉄錆、瓦を多く含む <鉛3 壤土>
14. 上部層 (2.3186/1) シルト ややしまる <鉛3 壤土>
15. 上部層 (2.3186/1) シルト ややしまる <鉛3 壤土>
16. 上部層 (2.3186/1) シルト ややしまる <鉛3 壤土>
17. 灰土 (2.3186/1) シルト～細砂 ややしまる 瓦、瓶分微量含む <鉛3 壤土>
18. 上部層 (7.3186/1) 鮎卵 ややしまる 瓦、瓶分微量含む <鉛3 壤土>

図31 講堂跡4区 平面図・断面図・立面図

石組1の周囲にはその掘形が検出されている。西側に攪乱があるため長軸115cm以上、短軸74cm、深さ約10cmを測る(図31 b-b')。東端で礎石据え付けの掘形を切っていることから、礎石設置後の遺構である。なお西側で検出した攪乱は以前の図面でも確認され、講堂の中央部を南北に縦断している(図8)。

石組1上では粘土質の堆積層(11層)がみられ、その中から大形の鉄釘、板状鉄製品や鉄片などが出土した。鉄製品の周囲の土は、鏽が溶け出し橙色に変色していた。いずれの鉄製品も、立石の南側から出土しており、大形の鉄釘は4本、頭部を北側に向かって南北方向に並行した状態であった(鉄釘①~④)。詳細は第6節に譲るが、鉄釘の幅はそれぞれ最大の箇所で約2.5cm、長さは鉄釘④が最も長く46cm(検出時)、その他の鉄釘は38~40cm(検出時)を測る。また長軸を東西方向に向けた幅7.5cmの板状鉄製品が、鉄釘④を上下から挟む形で見つかった。上部のものは長さ約20cm、上面に突起が3箇所あり、周囲には長さ3~5cmほどの鉄釘が点在している。下部のものは、長さ17cmほどが検出されていたが、取り上げ後、長さ38.5cmで、さらにその東端部が上方向に湾曲することが判明した。湾曲部付近からは、鉄釘、断面方形の棒状鉄製品、鉄片などが数点出土している。先の敷石上面(標高約39.4m)から鉄釘①~④と下部の板状鉄製品は5~7cm、上部の板状鉄製品は10cmほど高い位置での出土である。

板状鉄製品は、下部の湾曲部から繋がる上部東半分は欠損しているものの、その形状から扉板の軸付近に使用された八双金具と考えられる。西側で見つかった長さ3~5cmの鉄釘は、八双金具を扉板に留めるためのものである。上部で観察された突起は鉄釘の頭部で、取り上げ後、下部でも6箇所確認された。都合12本の鉄釘が、八双金具に打たれていたことになるが、破片となっていたため、上部と下部の間の土中から出土したものも含めて、20点ほどの鉄釘片が出土している。湾曲部は、扉板の軸部分を巡る部位で、周囲の棒状鉄製品や鉄片は、軸の補強などに使用された可能性がある。なおこの八双金具の西端部は、下部の様子から直線的な形状とみられる。この八双金具に対して、垂直方向に軸を揃える鉄釘①~④は、その位置関係から扉板の補強用に用いられる端喰に打ち込まれた鉄釘と解釈される(図33)。

以上から、講堂中央間東側の扉板が南側に倒れた状況とみられ、倒壊後木材部分は粘土化し、残った扉板下方部分の鉄製金具を検出したことになる。扉板の木目方向が、鉄釘③・④の表面で観察され、釘頭部から13.5cm辺りまでは横方向、そこから先は縦方向となっている点からも、端喰があったことは疑いなく、端喰の幅も13.5cm前後とみられる。断面からみた八双金具とその鉄釘、鉄釘①~④の位置関係を復元してみると、鉄釘③上に、「く」の字状に東側(扉軸側)に折れた八双金具の鉄釘を検出していることから、本来、上部の八双金具は鉄釘③よりも、西側(扉中央側)寄りにあったとみられる。八双金具の湾曲部と、鉄釘①~④がほぼ原位置のままで仮定した場合、八双金具、扉板の寸法を推定してみると、八双金具は復元した断面の状況から上部の長さは約45cm、下部は土圧で変形しているため、検出した長さよりも若干長く考え、約40cmと推定される。扉板の厚さは、八双金具の鉄釘で残りの良いものが約5cmを測ることから、それ以上の厚さになることは間違いない。八双金具の鉄釘の長さ、鉄釘①~④の太さなども勘案し、厚さ約10cmと想定される。扉の

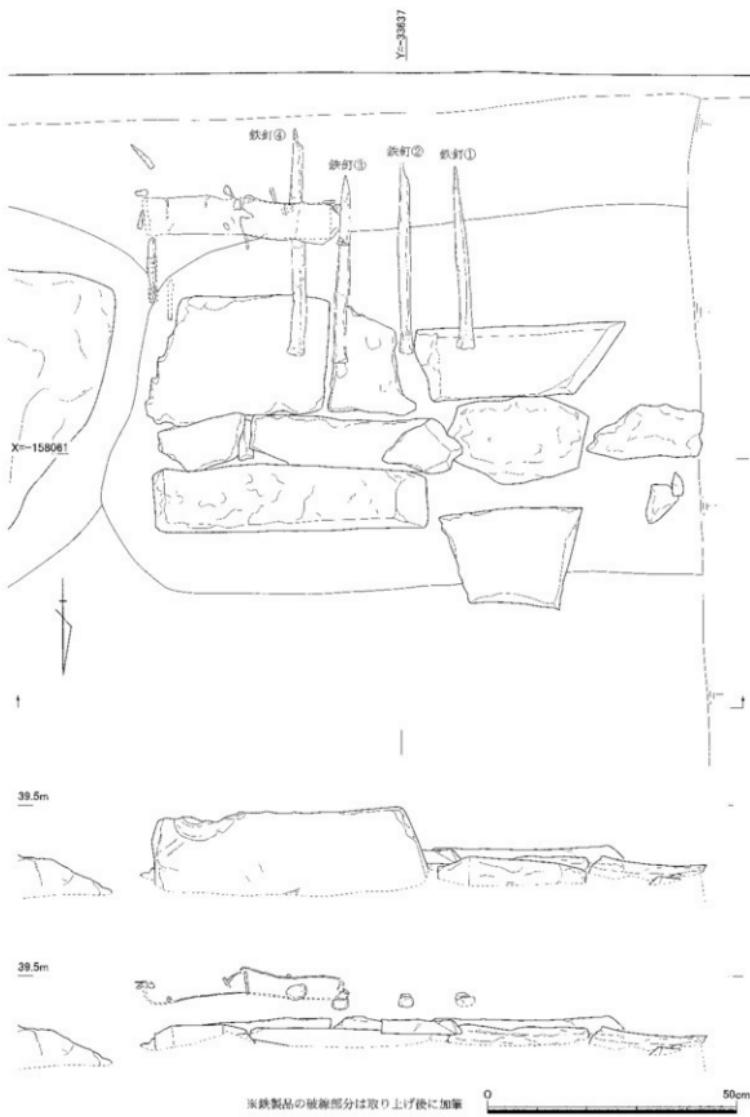


図32 講堂跡4区 石組1・鉄製品出土状況平面図・立面図

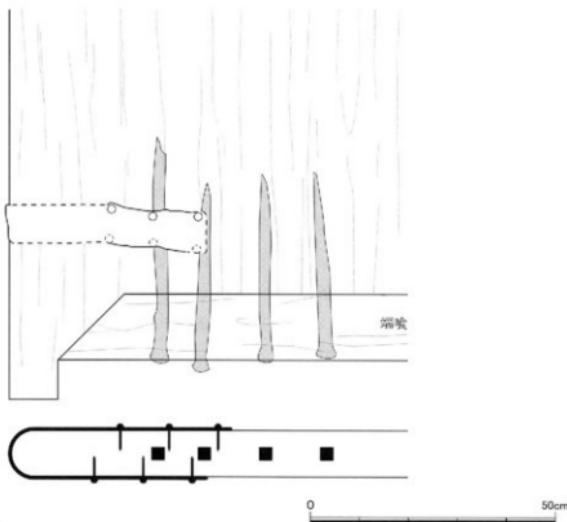


図33 屏板模式図・復元断面図

高さは不明であるが、幅について『報告書』にある礎石間（礎石1D—礎石1E）の距離（409cm）から計算すると、屏軸（八双金具の湾曲部）と礎石1E中心部の距離が約40cmであることから、 $409\text{cm} \div 2 - 40\text{cm} = \text{約}165\text{cm}$ と推定される。

石組1は屏に関連する構造物とみて間違いないが、具体的にどのように屏を設置していたのかは明確にし難い。八双金具の湾曲部が原位置とすると、軸は立石の東側面のラインとほぼ一致するが、その周囲に軸穴などの形跡はみられない。したがって軸を納めるための横材（長押）を敷石上に据え、その上に屏を設置していた状況が想定される。その場合、立石の役割など不明な点もある。なお5層中であるが石組1付近から、円盤状の鉄製品が出土しており、軸擦金具の可能性がある。屏の状況については、講堂南面で検出されている凝灰岩の「唐居敷きの座」も含めて、今後の検討課題としたい。

(3) その他の遺構

溝1・2

5層下で、石列1に接する溝1、調査区東壁にかかる溝2を検出している（図30）。いずれも溝3埋土（8～10層）を掘り込む。溝1は石列1と接して並行に延び、石列1からの幅は40cm、検出面からの深さは30cmを測る。中砂～粗砂の埋土（6層）にはラミナがみられ、一時流水していたことがわかる。溝2は北東～南西方向に延び、幅は不明で、検出面からの深さは20cmを測る。落ち込み状の遺構である可能性もあるが、埋土（7層）にも一部ラミナがみられ、溝1と一連の遺構であ

る可能性が高い。溝1・2の埋土中から瓦片、土師器片以外にも黒色土器片、瓦器片なども出土している。溝3埋没後の遺構であることから、10世紀以降に掘削・埋没した溝とみられる。

第4節 回廊跡

講堂跡の東側と西側では現況でブドウ畠が営まれ、講堂跡とは段差によって区切られる。講堂跡東地区では、現地表での標高は39.1～39.2mで、講堂跡より80cmほど低い。調査地内では東西に延びる浅い排水溝が数箇所にあるため起伏が多い。北斜面から流れ込む地下水の影響で、段差際に掘られた側溝は常に滯水していた。講堂跡西地区の標高は約39.3mで、東地区より若干高い。比較的平坦な地形であるが、西側は線路方面と接しているため、南に向って狭くなる。

今回の調査では、講堂に付属する回廊の有無を確認するため、講堂東地区では1～6区、講堂西地区では1～4区の調査区を設定した。

第1項 講堂東1～6区

先に調査が行われていた講堂跡西地区で、回廊礎石・抜き取り土坑が見つかっていたことから、その成果を基に1区を設定した。そこで土坑1が検出され、その土坑を基点に、西に約7mの地点に2区、東に約3.5mの地点に3区を設定し調査したところ、2区で同様の土坑2と、3区で礎石を検出したことから、回廊礎石とその抜き取り土坑と確認された。3区の東側を拡張するとともに、3区から南へ約3.5mの地点に4区、北へ3.5mの地点に5区を設定し、周辺の状況を調査している（図34）。なお3区から4区にかけてさらに1段低くなっている、4区周辺での標高は約38.7mを測る。さらに南側の状況を確認するため、4区から南へ約4mの地点に6区を設定した（図37）。

この調査区の層位をみると（図35～37）、1・2層下において、床土が3・5区のほぼ全面で検出されるが、1区ではなく、2・4・6区では部分的に残る。床土の下層には、瓦器片などの遺物を含む耕作層が厚く堆積し（1区～3・4層、2区～4・5層、3区～4～6層、5区～4・5層、6区～4～6層）、その耕作層を除去し遺構を検出している。なお4区では床土下層が地山層となる。5区西壁の断割り調査で検出した11層からは土師器片・須恵器片のみが出土し、同様の層が6区～9～14層でもみられた。断割り内ののみの状況のため明確にはし難いが、これらの層は回廊築成時の整地層、あるいはそれ以前の遺物包含層のいずれかが考えられる。ただし6区～9～14層については、6区の東側は近接する谷の斜面地付近であり、土層の堆積状況から、整地層の可能性が高い。

（1）回廊礎石・基壇

回廊礎石、土坑1・2

礎石、土坑1・2は東西方向に直線的に並び、後述する講堂跡西地区の成果から、北面回廊東部の北側礎石列（痕）と判明した。3区で検出された回廊礎石は、長軸80cm、短軸65cm、上面中央部の標高は38.69mを測り、長軸方向を南北に揃える。石種は黒雲母花崗岩である。礎石東側に幅約20cmの断割りをしたところ、礎石上面から約30cm下のところで、礎石据え付け土坑の掘形の一

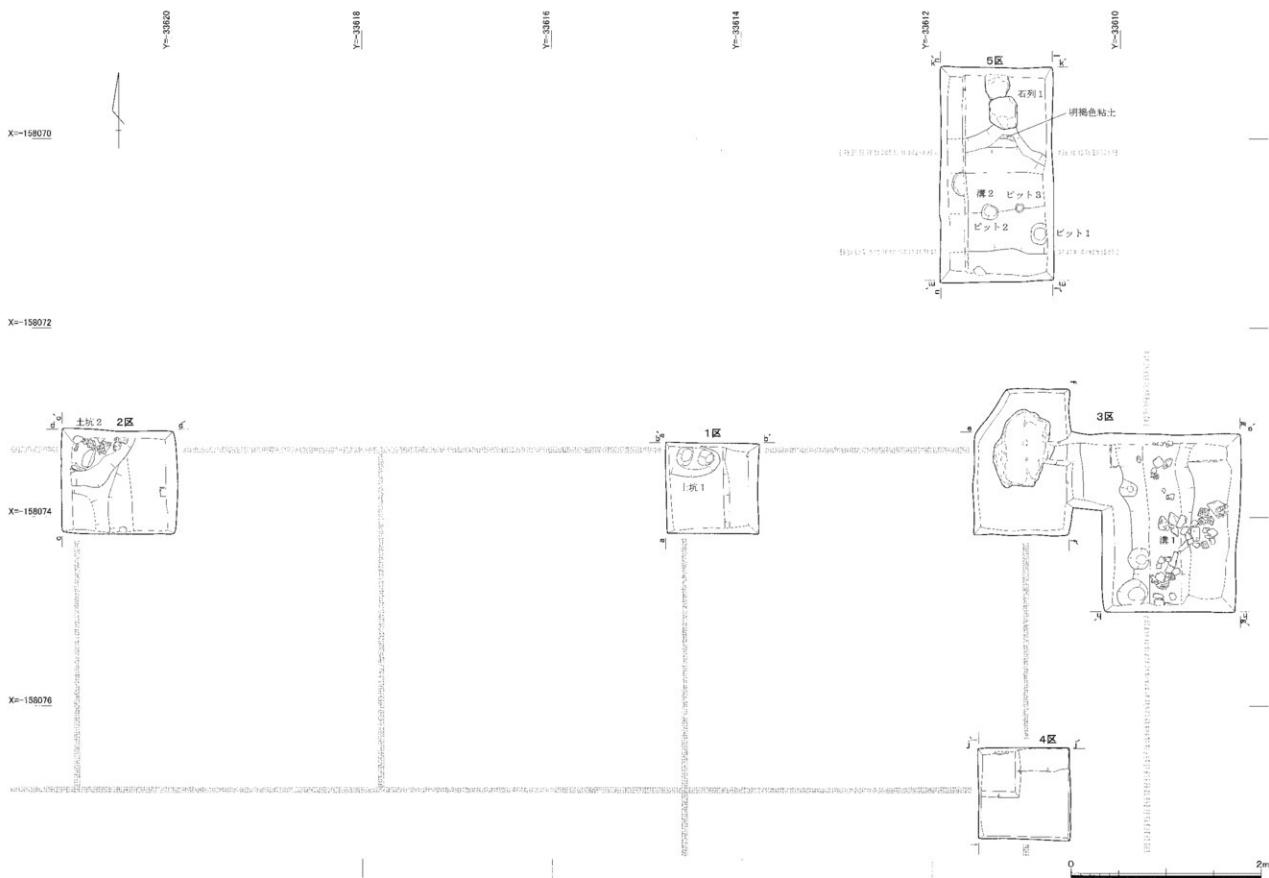


図34 講堂跡東1～5区 平面図

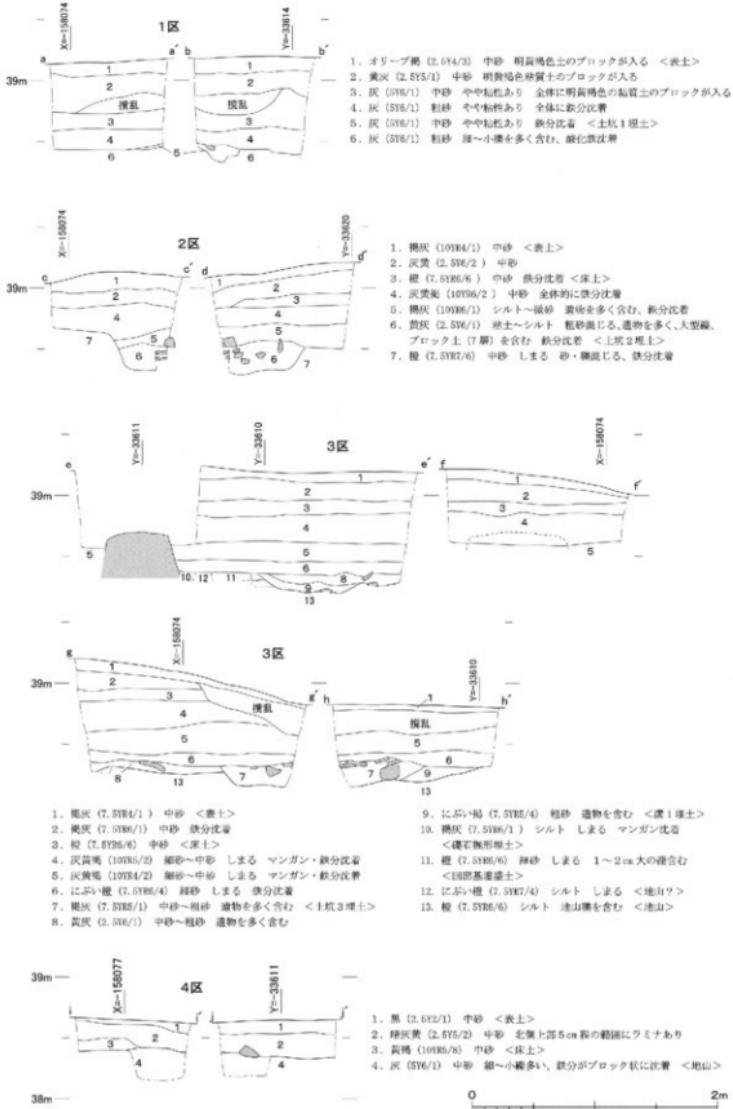


図35 講堂跡東1～4区 断面図

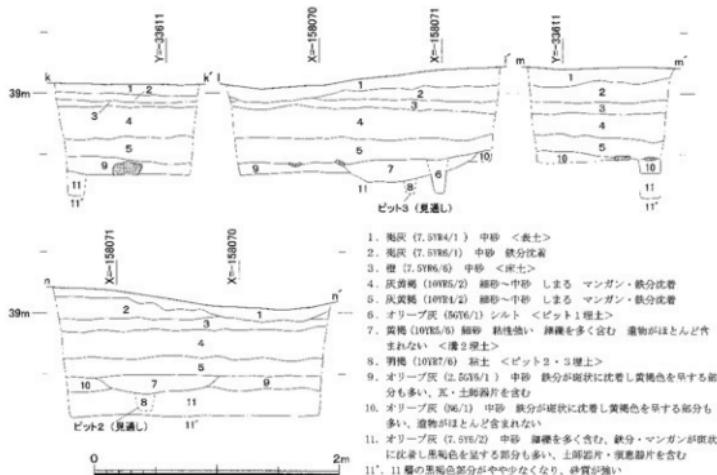


図36 講堂跡東5区 断面図

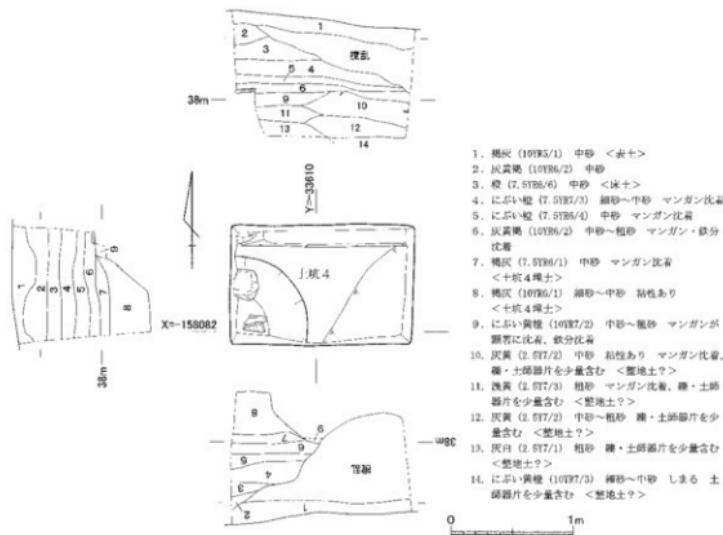


図37 講堂跡東6区 平面図・断面図

部を検出した。さらに同一のレベルで後述する溝1も検出したことから(図35 e-e')、耕作層がかなり下層まで及んでいることがわかる。なお講堂跡3区の礎石4F上面の標高は39.30mで、この礎石は約60cm低い。

1区の土坑1の検出面の標高は38.5m、規模は検出長で長軸55cm、短軸30cmの平面楕円形で、検出面からの深さは15~20cmを測る。埋土からわずかに瓦片・土師器片が出土している。東側には溝状の低い落ち込みがある。

2区の土坑2の検出面の標高は38.5m、規模は検出長で長軸65cm、短軸50cmで平面形はほぼ円形とみられる。検出面からの深さは20~25cmを測る。埋土中に礫と多数の瓦片が含まれていた。東側に浅い落ち込みがあり、また南側には高まりが残されている。土坑2は講堂との位置関係から、北面回廊東部西端の礎石抜き取り土坑であり、講堂礎石4Hとの距離は約3mを測る。

土坑1と土坑2の中心部間の距離は約6.4mを測り、回廊の桁行2間分に相当する。土坑1と礎石の距離は約3.6mで、判明している回廊の桁行よりも長く、礎石は南北方向に長軸を抱えている点から、回廊の隅部と考えられる。その場合、隅部では桁行3.6m×梁行3.6mの等間となる。ただ3区の南側に設定された4区では、礎石やその痕跡は検出されていない。検出した地山層上面の標高は約38.4mで、削平により完全に失われていた。

溝1

3区の礎石中心部から東へ約1mの場所で検出され、南北方向に延びる。幅は60~80cmを測る。西側に比べ、東側の肩が若干低く、西側肩の検出面からの深さは10~15cmで、溝底部の標高は北端部・南端部とともに38.2mを測る。溝1の検出面において、礫と多数の遺物が見つかっている(図38)。

3区-6層下部から8層上部にかけての出土で、礫の多くが検出された西側肩付近にみられた。完掘したところ、西側肩に沿って礫を据えていたとみられる窪みが見つかったことから、本来、溝の西側にあった礎石が、崩落あるいは耕作により二次的に移動したものと考えられる。原位置を推定すると、溝の西側下端辺りが礎石外縁のラインとみられ、礎石中心部から礎石外縁の距離約1.3mまでが基壇となる。基壇の高さは、基壇上面が礎石上面より10cmほど低い位置とすると、溝底部から40cm前後の高さになる。基壇外装は、復元した高さと見つかった礫の大きさから、礫を2段ほど積んだ状況が想定される。一方、溝の東側肩は西側肩に比べ低く緩やかで、8層が堆積していることから、もともとあまり高くなかったか、あるいは流水などにより肩が崩落し低くなった可能性がある。3区南端から約6m南に位置し、溝1の延長線上に当たる6区では、溝が検出されておらず、すでに削平されたものとみられる。

(2) 他の造構

溝2

5区で検出された溝で、東西方向に延び、幅約1.1m、検出面からの深さ約20cm、溝底部の標高は約38.3mを測る。埋土(図36-7層)は粘性が強く、遺物がほとんど含まれていなかった。3区の回廊礎石中心部から溝南側肩までの距離は約2mを測る。溝1とは埋土の様相が異なり、溝2の基盤層(図36-9層)から瓦器片が出土している。土色が異なるものの、溝2の基盤層である5区

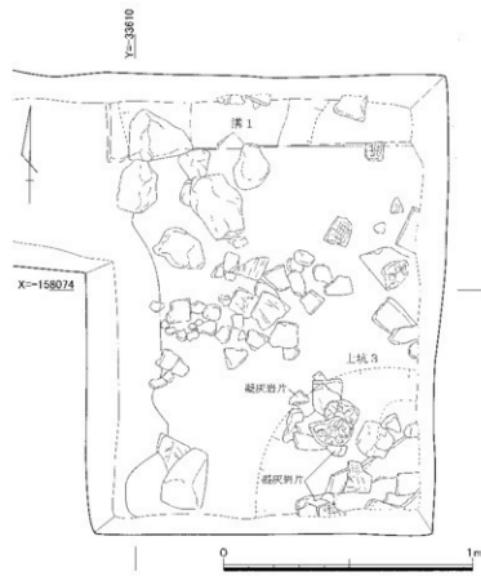


図38 講堂跡東3区 溝1検出（6層除去）状況平面図

–9・10層と、ほぼ同一レベルに堆積する3区–6層が対応する層位と考えた場合、溝2は溝1埋没後の遺構となる。

石列1

5区の中央北端に位置し、30cm大の礫で構成される。礫を南北方向に沿って並べるが、3区の回廊礎石に比べ、やや西寄りに位置し、礫上面は標高38.48~38.49mを測る。溝2の基盤層中で検出され、溝2に先行する。石列1南側の溝2内には段差があり、そこに20cm×5cmの範囲で明褐色粘土が検出された。石列1の延長線上であることから、溝2掘削時に礫が抜かれた痕跡の可能性がある。したがって石列1は本来、現状よりも幾分南側に延びていたとみられるが、その性格は不明である。

土坑3・4

土坑3は3区–溝1の南東隅で検出した（図38）。直径約50cmの平面円形の土坑とみられ、3区–8・9層と溝1東側縁の一部を掘り込む。検出面からの深さは約20cmを測る。埋土中（3区–7層）から、土器片・瓦片・凝灰岩片などが出土しており、一部の軒丸瓦には二次被熱がみられた。黒色土器を含む3区–8層を切ることから、9世紀以降の遺構とみられる。

土坑4は6区西側で検出した。直径60cmの平面円形の土坑とみられ、検出面からの深さは約50cmを測る。埋土中から瓦片・土器片以外にも砥石が出土している。出土遺物に瓦器椀片が含まれる

点から、10世紀以降の遺構とみられる。

ピット1～3

5区で3基のピットを検出している。ピット1は直径約20cmの平面円形で、検出面からの深さは25cmを測る。溝2埋没後に掘り込まれた遺構である（図36 1-I'）。ピット2・3は、溝2埋没以前の遺構で（図36 1-I'、n-n'）、検出面からの深さは10～14cmを測る。石列1の延長線上に位置することから、関連する遺構の可能性がある。いずれのピットからも遺物が出土していないため時期は不明である。

なお5区の西側断割り中央部の11'層上面で、25cmほどの礫が見つかっている。先述したように11・11'層は回廊築成時の整地層、もしくはそれ以前の遺物包含層の可能性があり、後者の場合、回廊築成以前の遺構の一部である可能性がある。

第2項 講堂跡西1～4区

1区は以前の調査範囲と重複し、礎石を確認後、その西側に2・3区を設定した。2・3区でも同様の礎石が確認されたことから、回廊の礎石であることが推定された。2区を南北方向に拡張し、南側で土坑1を検出。1区の南側に設定した4区でも土坑2を検出したことから、土坑1・2は礎石の抜き取り土坑と解釈され、回廊が講堂のやや南寄りに付く状況が明らかとなった（図39）。

層位をみると（図39・40）、表土下には床土である2層が全体に広がっている。3～7層は耕作層とみられ、5層掘り下げ中に、2区の礎石が検出された。8・9'層は礎石の抜き取り土坑の埋土である。10層はピット1埋土である。2区の礎石南側でみられる11層には、炭化物や凝灰岩片、白色礫などが含まれており、遺物を多数検出している。12層は溝1の埋土で、ラミナが観察された。13層は礎石掘形埋土である。14層は礎石周辺に盛られた整地層と考えられる。15・16層は地山層で、非常に多くの地山礫を含む。

（1）回廊礎石、土坑1・2

1区の礎石は以前の調査でも見つかっていたもので、『報告書』を参照すると、長軸約65cm、短軸約45cm、講堂礎石4Aからの心々距離は3.2mを測る。石種は橄欖石安山岩である。礎石周囲には、据え付けのための掘形の一部が検出されている。2区の礎石は長軸約70cm、短軸約55cmを測る。石種は黒雲母花崗岩である。据え付けの掘形は、直径約125cmのはば円形を呈す。3区の礎石は、長軸約65cm以上、短軸約55cmを測る。石種は黒雲母花崗岩である。礎石据え付けの掘形は、調査範囲が限られていたため検出していない。礎石の上面は、いずれも標高約38.8cmで（図39 a-a'）、講堂跡東3区の礎石に比べ約10cm高い。また礎石の長軸を東西方向に揃え、この点も講堂跡東3区の礎石と異なる。なお、この調査区に近い講堂跡1・2区の礎石4B・5Bの上面は約39.3mで、50cmほど回廊礎石は低くなっている。

土坑1は2区の南端で検出された。検出面の標高は約38.7m、長軸約100cm、短軸約90cmの平面不整橢円形である。検出面からの深さは約20cmを測る。礎石抜き取り時の埋土である8層と、礎石を据え付けるための裏込め土である13層からなるが、いずれからも遺物は出土していない。

土坑2は4区で検出された。検出面の標高は約38.65m、長軸約80cm、短軸約70cmの平面不整楕円形である。中心部の直径約50cmの円形の範囲がやや深く、検出面からの深さは約25cmを測る。埋土の9'肩から遺物は出土していない。

回廊の柱間寸法は、桁行は1～3区で見つかった3基の礎石間の距離から3.2mとなる。梁行は、礎石が抜き取られているため中心部が明確ではないが、2区礎石-土坑1、1区礎石-土坑2それぞれの距離から3.6mと推定される。梁行の規模から単廊と考えられる。

(2) 溝1

2区のやや北寄りで検出され、幅約2m、東西方向に延びる。溝底部の標高は約38.5m、検出面からの深さは、北側で約20cm、南側で15cmと北側がやや深い。埋土の12層にはラミナが観察されたことから、一時期、流水または灌水していた状況が窺える。瓦片がやや多く出土しており、それ以外は数点の土師器片のみであった。礎石との位置関係や、断面の状況から、回廊に伴う溝とみられ、礎石中心部から溝南側肩の距離は約1.3mで、講堂跡東3区で検出した礎石と溝1の距離と等しい。しかし、この溝には講堂跡東3区-溝1と異なり、礎石側の肩に礎を据えていた痕跡が確認できなかった。講堂東側の回廊は主要伽藍東側の谷に近接し、雨天時には北側の尾根から流下する水量が西側に比べ多いことが予想される。そのため回廊基壇を強固にする必要があり、基壇外装として礎が積まれたのではないだろうか。推測の域を出ないが、立地的な状況から、講堂を隔てた東側と西側の回廊基壇で、構造上の差異が生じた可能性を考えておきたい。

(3) その他の遺構

ピット1

溝1の東寄りに位置し、7層除去後に検出した。直径約40cmの円形で、検出面からの深さは25cmを測る。溝1埋没後に掘り込まれ（図40-h-h'）、土器片が出土しているが、時期は不明。

瓦列

6層除去後、2区礎石周辺から南側にみられる11層を精査中に検出した（図41）。礎石の南端に接して直線的に延び、北から丸瓦と平瓦を交互に5個体並べ、約75cmの長さとなる。いずれも完形のものではなく、破片となった瓦が使用される。当初、暗渠などの可能性が考えられたが、下部に瓦や掘り込まれた形跡はなかった。また瓦列と同一面では、礎石周辺に瓦片や上師器鉢、瓦器枠、礎が散在し、瓦列からさらに南側でも瓦片や凝灰岩片が出土している。なお南側のものは、根の擾乱の影響を受け15層（地山層）に沈み込んでいるものもある。遺物の出土状況から11層は回廊廃絶後の堆積層と考えられ、瓦列は回廊に関連する遺構ではなく、11層中の土器から10世紀頃の遺構と考えられる。ただし明らかに礎石を意識した配置となっていることから、礎石を含めて間仕切りとして並べられた可能性もある。

瓦列の南側で出土している凝灰岩片は、最も南側のものは長方形で面を持つ部分があり、長軸25cm以上、短軸15cmを測る。厚さは数cmで、かなり脆い状態であった。他にも数点の凝灰岩片が、瓦片に混じって出土している。これらの凝灰岩片が二次的に移動したものであることは疑いないが、本来どこで使用されていたものだろうか。出土地点が、推定される講堂基壇から西へ5mほどの場

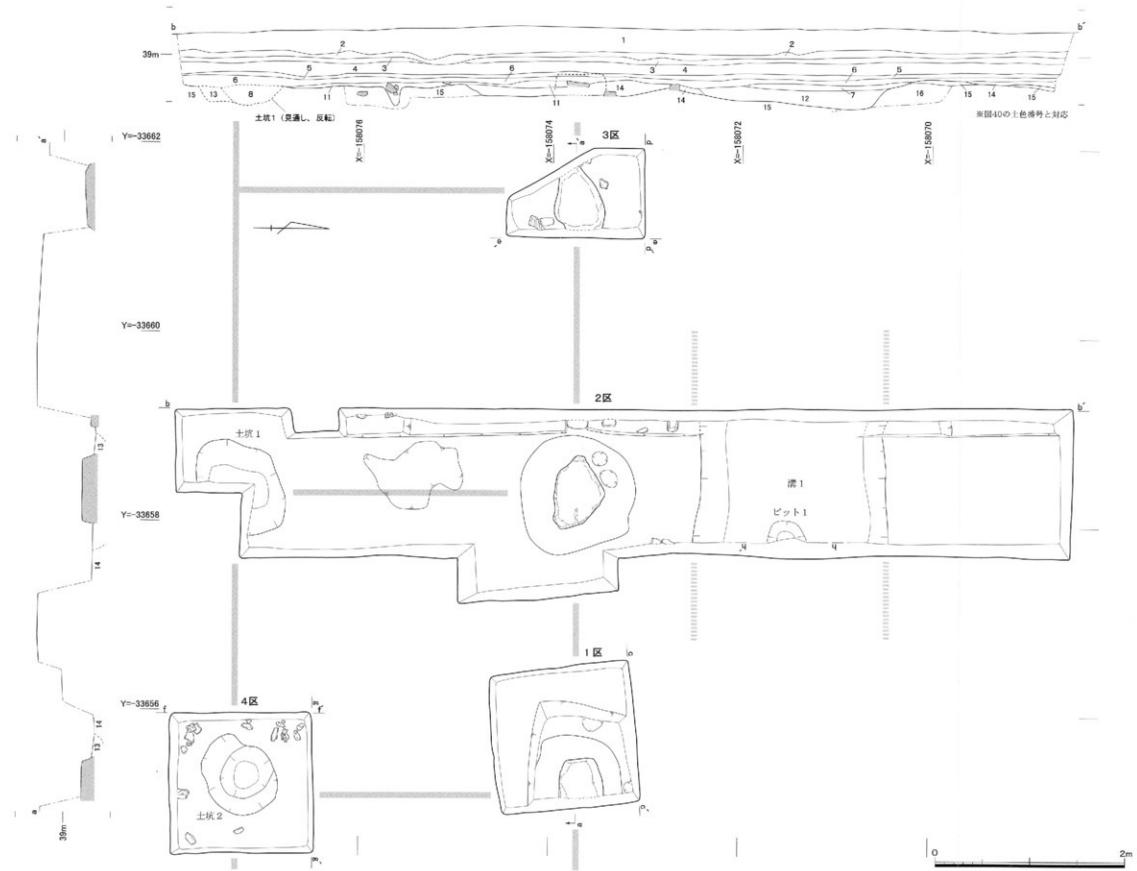


図39 講堂跡西1～4区 平面図・断面図

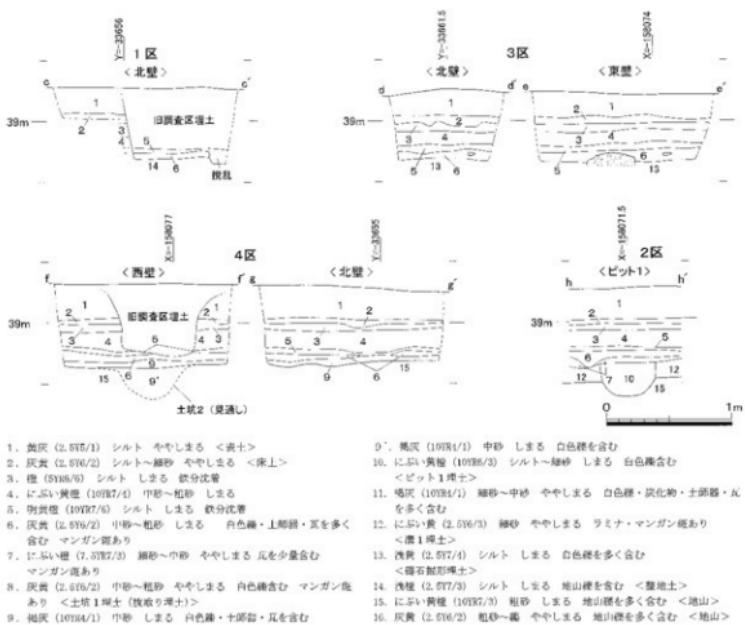


図40 講堂跡西1～4区 断面図

所に当たることから、講堂基壇のものである可能性がひとつ考えられる。別の可能性を示すものとして、講堂跡東地区にも目を移すと、3区－土坑3の埋土（7層）からも、凝灰岩片が見つかっている（図38）。土坑3は回廊築造から一定期間後、あるいは廃絶以後に掘り込まれた遺構で、講堂基壇の凝灰岩が十数m離れた土坑の埋土に混入したとみるより、そもそも回廊に使用されていた凝灰岩と考えた方が自然である。その場合、回廊基壇上面の礎石と礎石の間に掘えられた地覆石（狭間石）などが考えられ、回廊にも凝灰岩の切石が使用された可能性を指摘しておきたい。

第5節 講堂跡周辺

いずれも講堂跡から北側の範囲に設定された調査地区で、講堂跡北東1区、講堂跡北1区、講堂跡北西1～3区がある。

第1項 講堂跡北東1区

この調査区は想定される講堂基壇の北東隅から、北に約2m、東に約6mの地点に相当する。現

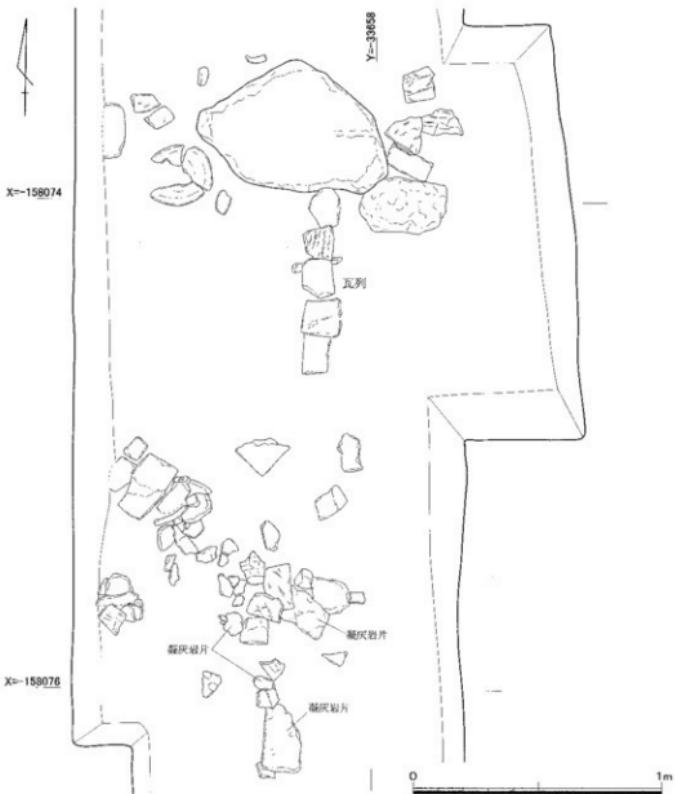


図41 講堂跡西2区 遺物検出（6層除去）状況平面図

地表面の標高は39.8～39.9mと、講堂跡に比べ若干低い。この周辺には北側の丘陵地から相当量の地下水が流れ込んでおり、20～30cm掘り下げると瞬く間に滲水する状況のため、調査区の北端と南側の一部を掘り下げた（図42）。

表土下では、講堂跡地区や講堂跡東地区などでみられた床土は検出されず、シルト質の2・3層が堆積する。4層以下はグライ化し、青灰色系の粘土～シルト質の堆積層となっている。掘り下げた範囲が狭いこともあるが、表土を除いた遺物の出土が7層に限られ、その他の層中から遺物はみつかっていない。7層出土の遺物には、陶磁器片が含まれており、寺院廃絶以後の耕作層とみられる。調査区南側の8層中には非常に多数の礫が含まれていた。拳大のものから約40cm大のものまで様々である。北端部では同様の礫は見つかっていない。その礫群を含む8層を除去した面で、地山

層（10層）を掘り込む溝1が検出されている。

（1）溝1

調査区北端部で溝西側肩、南側で溝東側肩を検出している。幅は推定で約1.5m、検出面からの深さ約15cm、溝底部の標高は北端部で38.65m、南端部で38.4mを測る。方向は北北東—南南西か。溝を覆う8層中に礫が多数みられた南側では、礫群を一部除去したのみで、溝肩より西側でしか溝底部を検出していない。礫群は人為的に溝を埋め戻す際に投入されたものと考えられるが、8層と溝埋土（9層）から遺物が出土していないため、埋没時期は不明である。

規模・時期など不明な点が多いため、溝1の機能は推測の域を出ないが、溝1の位置や方向から判断して、北斜面からの水を排水する機能が考えられる。同じような機能が想定された講堂跡4区—溝3と接続する可能性があるが、講堂跡4区—溝3の底部の標高が約39mで、この溝1の底部が約40~50cm低い。そのため仮に接続した場合、東側の谷へ向けて排水していた状況となる。

第2項 講堂跡北1区

講堂基壇北辺より北に約9m、

想定される講堂基壇西辺の延長線

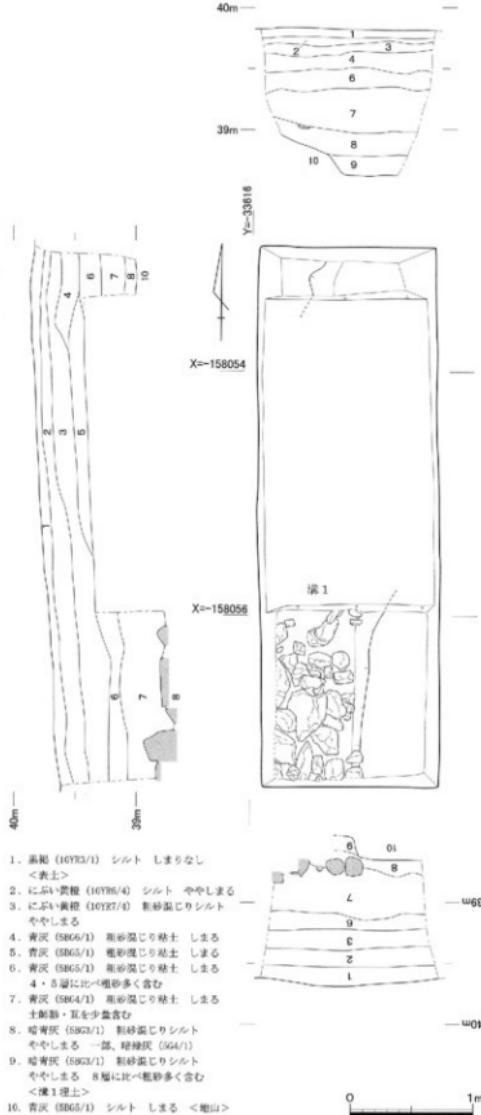
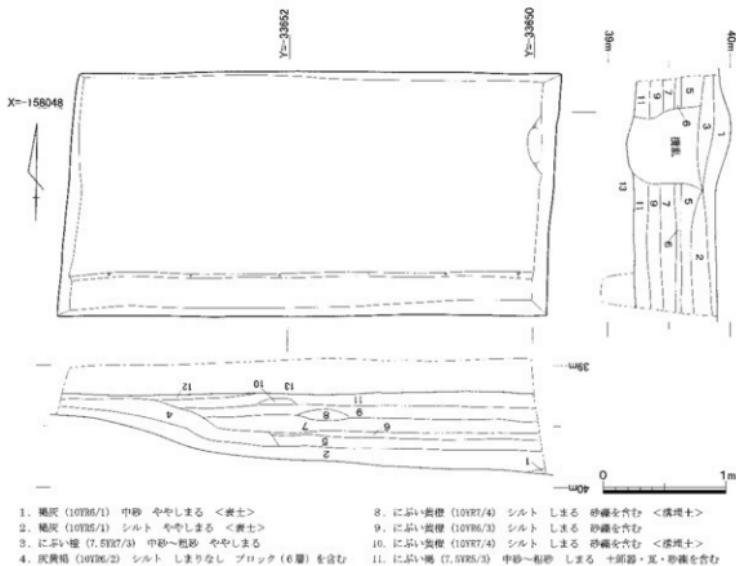


図42 講堂跡北東1区 平面図・断面図



1. 鳥居 (10YRT/1) 中砂 ややしまる <表土>
2. 鳥居 (10YRT/1) シルト ややしまる <表土>
3. にぶい黄土 (7.5YR7/3) 中砂～粗砂 ややしまる
4. 灰質粘土 (10YR6/2) シルト しまりなし ブロック (6層) を含む
5. 黄土 (2.5YR7/1) 粘土～中砂 ややしまる
6. 明黄色 (10YR7/6) シルト しまる <表土>
7. にぶい黄土 (10YRT/2) シルト しまる 忽離が入る
8. にぶい黄土 (10YRT/4) シルト しまる 砂礫を含む <底層土>
9. にぶい黄土 (10YRT/3) シルト しまる 砂礫を含む
10. にぶい黄土 (10YRT/4) シルト しまる 砂礫を含む <底層土>
11. にぶい黄土 (7.5YR7/3) 中砂～粗砂 しまる 土師器・瓦・砂礫を含む
12. 鳥居 (10YRT/1) 中砂～粗砂 しまる 土師器・瓦・砂礫を多く含む
13. にぶい黄土 (7.5YR7/4) 粗砂 しまる 地面的に灰白色 (2.5YR7/1) の細砂礫が入る <地山>

図43 講堂跡北1区 平面図・断面図

上に設定された調査区である。(図43)。現地表面での標高は39.4~39.9mと西側に向かって下る。この調査区では、鳥坂寺跡に関連する遺構は検出していない。

層位をみると、表土下に耕作層（3~5層）があり、4層の状況から講堂跡北地区と講堂跡北西地区の境界にある段差（図20）は、表土（2層）下から掘り込まれている。6層は床土で、検出した標高が約39.6mであることから、講堂跡1区（4層）や講堂跡4区（2層）と同一のものである。7層以下では、遺物が多く出土しており、中でも土師器片が目立つ。瓦片は、講堂跡から離れていたためか、土師器片に比べ少量であった。また瓦器片も他に比べて多い。なお南北方向に延びる2条の溝が検出されたが（8~10層）、基盤層である9~11層からも多数の瓦器片が出土していることから、鳥坂寺廃絶後の遺構と考えられる。地山層（13層）まで掘り下げたが、他に遺構は検出されなかつた。耕作などで削平され、幾分低くなっている可能性があるものの、地山層上面の標高は39.2~39.3mを測り、講堂跡4区北側の地山層上面と同一である。

第3項 講堂跡北西1~3区

隣接する講堂北地区との境界に段差があり、この調査地区が1段低い。現地表面での標高は39.4~39.6mで、南に向かって緩やかに下る。講堂跡西2区のほぼ延長線上に当たる地点に、南から1

区(図44)・2区(図45)を設定し、2区から西に約12mの地点に3区(図46)を設定した。

他の調査区に比べ擾乱が多く、3区南寄りで検出した東西方向に延びる溝状の擾乱の延長部分が、1区と2区の境界付近でも確認され、講堂跡北西地区を横断している。同様の溝状の擾乱や、大形の土坑状の擾乱が1・2区でもみられることから、講堂跡北西地区全般の遺存状態が悪いことが予想される。耕作層(図44・45-2層、図46-2・3層)を除去すると、同一の標高で床土(図44・45-3層、図46-4層)が検出された。1・2区では床土下の耕作層(図44・45-4・5層)を除去した地山面で遺構を検出している。3区では耕作層(図46-5・6層)を除去すると7・9層と地山層(10層)が検出された。9層は地山縁を多く含む堆積層で、この上面と地山層上面で遺構を検出している。

(1) 柱穴1・2

2区南側で柱穴2基を検出した。柱穴1と柱穴2は重複しており、柱穴1が柱穴2を切る。いずれも西側は調査範囲外となっている。

柱穴1は平面不整梢円形で、東西軸50cm以上、南北軸は80cmを測る。掘形内西寄りの地点で柱痕跡とみられる東西軸30cm以上、南北軸26cmの平面長方形のプランが確認された。検出面からの深さは、柱部分で57cm、掘形は39cmとなっている。柱部分の11層下方での粘性が強く、柱材が粘土化したものとみられる。柱跡、柱掘形内から遺物が出土していないため、時期は不明である。

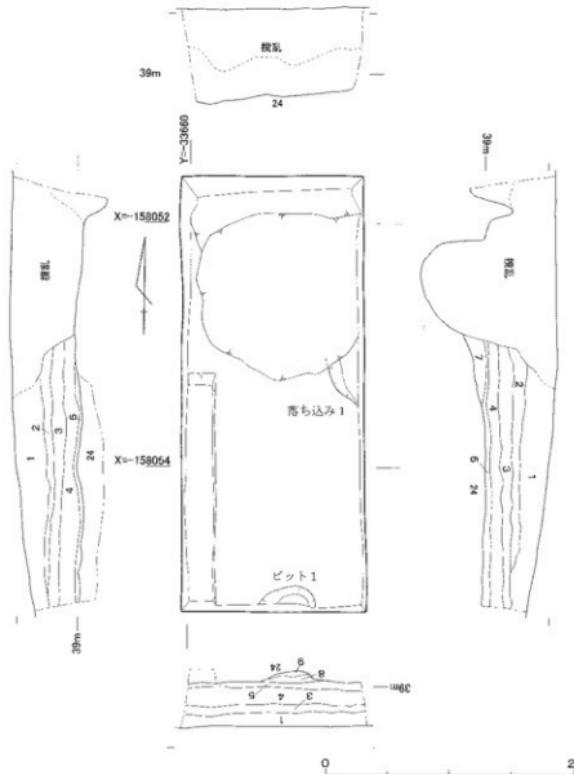
柱穴2は平面隅丸方形で、東西軸88cm以上、南北軸96cmを測る。柱穴1柱痕跡とほぼ同様の地点で、柱穴2の柱痕跡が見つかり、東西軸22cm以上、南北軸26cmとなっている。柱部分の深さは、柱穴1により失われている部分も加えて、検出面から97cmを測る。掘形は直立気味に掘り込まれ、底部はほぼ水平で、検出面からの深さは105cmを測る。掘形の最下部に20層を敷き、その上に柱を設置。その後、柱の周間に15~19層を順次入れている。柱痕の埋土から刷毛目が施される土師器の胴部片、掘形埋土の17層から土師器片が出土しているが、遺構の時期は明確にし難い。ただ柱穴1・2埋土上層の4層には、黒色土器片・瓦器片が含まれているが、柱穴1・2埋土には全くみられないことから、古い時期の遺構の可能性がある。

仮に柱穴1・2が鳥坂寺跡に関連する遺構とした場合、切り合う状況から、掘立柱建物の建て替などが考えられるが、南北方向に対応する柱穴はない。権列の可能性もあるが、やや距離があるものの、2区から約5m東に位置する講堂跡北1区で、柱穴は見つかっていない。このような状況から、宝幢遺構の可能性が考えられる。宝幢遺構は中央の旗竿と支柱で構成され、2~3基の柱穴が隣接する。講堂と同じく東西方向を軸にもつとすると、調査範囲外である東側あるいは西側に、同様の柱穴が並ぶ可能性がある。

(2) 落ち込み1・2

落ち込み1は1区の中央北寄りの東側で検出された。北側は土坑状の擾乱により失われ、東側は調査範囲外のため、規模は不明である。検出面からの深さは10~15cmで、北側に向かって深い。埋土中から丸瓦片が出土しているのみで、遺構の時期は不明である。

落ち込み2は2区の北半、東寄りの地点で検出された。北側は擾乱により分断される。規模は検



1. 墓オリーブ灰 (2.5G73/1) <表上>
2. オリーブ灰 (2.5G75/1) 中砂 酸化鉄・長石板岩を含む
3. 明赤塊 (5W5/8) 中砂～粗砂 錐練含む 酸化鉄沈着 (赤土)
4. 墓オリーブ灰 (2.5G74/1) 中砂 長石の細砂～粗砂含む マンガン粒を含むあり
5. 灰 黄褐色 (10B8/8) 中砂 しまる 積み多く含む 酸化鉄沈着
6. 灰 黄褐色 (10B8/2) 粗砂混じりシルト ややしまる
7. 墓オリーブ灰 (2.5G74/1) 中砂 しまりなし 積みや花崗岩の風化粒などを含む <落ち込み1埋上>
8. 墓オリーブ灰 (2.5G74/1) 中砂 長石粒を多く含む マンガン粒あり <ビット1埋土>
9. 墓オリーブ灰 (2.5G74/1) 中砂 しまりなし <ビット1埋上>
10. にぶい黄緑 粗砂 ややしまる 瓦・大型礫を含む <落ち込み2埋土>
11. にぶい黄緑 シルト しまる 上部マンガン沈着 下部の粘性強い <柱穴1柱筋跡>
12. 深黄 (2.5G7/4) 中砂 ややしまる マンガン沈着 地山巣含む <柱穴1柱筋跡>
13. 深黄 (2.5G7/4) 中砂 ややしまる 地山巣含む <柱穴1柱筋跡>
14. 黄土 (2.5B7/1) 細砂～中砂 ややしまる <柱穴2柱筋跡>
15. 明黄褐 (10Y7/6) 中砂 しまる マンガン沈着 <柱穴2柱筋跡上>
16. 深黄 (2.5H7/2) 中砂 ややしまる マンガン沈着 地山巣含む
17. 深黄 (2.5H7/3) 中砂 ややしまる 地山巣含む <柱穴2柱筋跡上>
18. 深黄 (2.5H7/4) 中砂 ややしまる 地山巣含む <柱穴2柱筋跡上>
19. 深黄 (2.5H7/2) 中砂 ややしまる 地山巣含む <柱穴2柱筋跡上>
20. にぶい黄緑 (10Y8/7/2) 中砂 ややしまる 地山巣を多く含む <柱穴2柱筋跡上>
21. にぶい黄緑 (10Y8/7/2) 粗砂 しまる <地山>
22. にぶい中 (7.5Y8/7/4) 粗砂～中砂 ややしまる 部分的に粗砂がレンズ状に入る <地山>
23. 深黄 (2.5H7/3) 粗砂～中砂 ややしまる <地山>
24. にぶい黄緑 (10Y8/8/3) ややしまる 地山巣を多く含む <地山>
25. 明黄褐 (7.5H8/3) 粗砂～粗砂、埋オリーブ灰 (2.5G4/1) 粗砂 <地山>
26. 明黄褐 (10Y7/6) 中砂～粗砂 ややしまる <地山>
27. にぶい黄 (2.5H6/3) 精練じり中砂 しまる 地山巣を多く含む <地山>
28. にぶい橙 (7.5H7/4) 中砂 しまる <地山>

図44 講堂跡北西1区 平面図・断面図

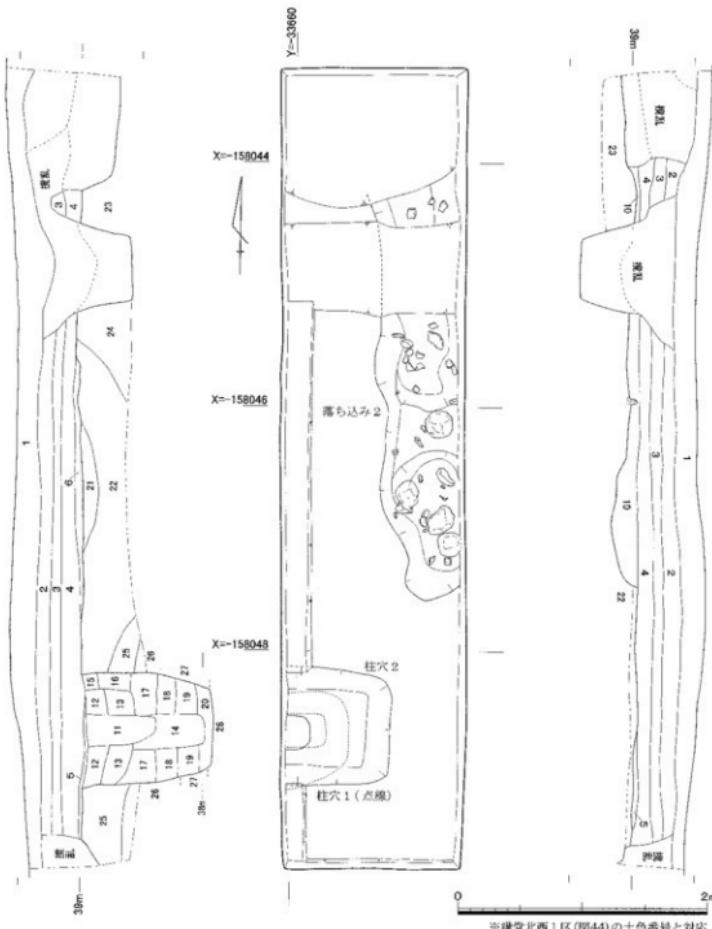


図45 講堂跡北西2区 平面図・断面図

出長で南北3.5m以上、東西70cm以上、底面には窪みがあり、検出面からの深さは最深部で約20cmを測る。埋土中に20cm大の礫や瓦片が含まれており、その他に銅銭2点、青銅製金具1点が出土している。2点ある銅銭のうち1点は「元祐通宝」(1086年鑄造、写真図版15)とみられるところから、11世紀代以降の遺構とみられる。

(3) 土坑 1 · 2

土坑1は3区の東寄りに位置し、3区—9層上面で検出された。東西に延びる擾乱により分断さ

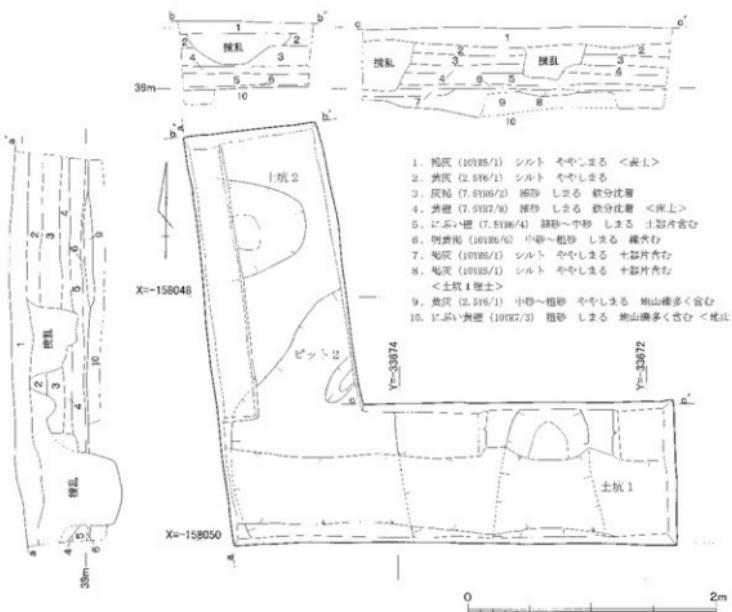


図46 講堂跡北西3区 平面図・断面図

れ、南側は調査範囲外である。規模は南北1m以上、東西は最大で90cm、検出面からの深さは15~20cmを測る。埋土中から瓦片・土師器片・瓦器片が見つかっている。遺物から、10世紀頃の遺構と考えられる。

土坑2は3区北側に位置し、地山層上面で検出された。規模は東西90cm以上、南北は最大で95cm、検出面からの深さは7cmと浅い。埋土である3区-9層は、L字形を呈する調査区の屈曲部付近でみられる段差にも堆積しており、土坑2は浅い落ち込みの可能性がある。3区-9層から遺物が出土していないため、遺構の時期は不明であるが、先の土坑1は3区-9層上面で検出していることから、土坑1に先行する遺構である。

(4) ビット1・2

ビット1は1区南端で検出された。南側が調査範囲外であるため、東西45cm以上、南北15cm以上で、検出面からの深さは9cmを測る。埋土中から遺物が出土していないため、時期は不明である。

ビット2は3区の屈曲部で検出され、東側は調査範囲外であるため、長軸35cm以上、短軸は18cmで平面橢円形を呈する。検出面からの深さは7cmを測る。埋土は土坑2と同じく3区-9層である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第6節 遺物

出土遺物は表5・6にまとめた。主な遺物は瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・半瓦)、鶴尾、埠、土器(土師器・須恵器・施釉陶器・黒色上器・瓦器・瓦質土器・陶磁器など)、埴輪(円筒・朝顔)、金属製品(鉄釘・八双金具・鉄製品・鉄滓・青銅製品など)、土製品・石製品(輪羽口・管玉・サヌカイト剥片・原石など)、凝灰岩(基壇部材など)などである。出土点数はかなり多いものの、状態としては細片・微細片が多く、例えば軒丸瓦には瓦当面が完存しているものは皆無であり、平瓦・丸瓦にしても1個体として実測できるものはほとんどなく、土器や埴輪についても実測できるものはごく限られた点数であった。また表土層・旧調査区埋め戻し土層・搅乱土層出土遺物については、

表5 平成21・22年度発掘調査出土遺物(1)

調査区	層位	瓦		土器				単縄		その他
		前丸	軒平 丸	平	筋尾	土器	須恵 色	瓦器	向輪	
[床跡]										
1	1	2	2					1		
	2									
	6									
	10			2						
2	1		11	17	5					
	埋			1	5					
	3	1		1	9					
	埋			1	4			1		
[企画坑]										
1	金	2	3	346	1416	1	2		3	御瓦器
	瓦			3	6					
	焼	12	6	648	3771	4	60	18	2	7
	瓦	3	76	176		6	41	1	1	2 鉄釘4、秋製品2、青銅製品2、凝灰岩
	焼	1	1	134	443	1	2	3		2 錫瓦(平瓦、近瓦)2、サヌカイト剥片1
	瓦	16	1015	2596	1	23	23	1	13	3 平瓦(平瓦)2、サヌカイト剥片1、向輪石1、凝灰岩1、錫瓦241
	焼			32	76		3	3		4 平瓦(平瓦)2、錫瓦2、秋製品1、サヌカイト剥片1、向輪石1、凝灰岩1
	瓦	2	1	23	40		19	7		5 平瓦(平瓦)2、錫瓦1、秋製品1、サヌカイト剥片1、向輪石1、凝灰岩1
	焼	2	180	562		3	3	1	1	6 平瓦(平瓦)2、錫瓦1、秋製品1、サヌカイト剥片1、向輪石1、凝灰岩1
	4	3	5	792	1811	3	15	8	5	7 平瓦(平瓦)3、瓦質土器1、凝灰岩1
	5	1		205	416	1	2	2	6	8 平瓦(平瓦)2、生土1石1、錫製品1、サヌカイト 9 烧
	6	8	4	501	1136	2	29	15	6	10 平瓦(平瓦)2、生土1石1、錫製品1、サヌカイト 7 烧
	9			2	2		2			11 平瓦(近瓦)1、秋製品1、サヌカイト剥片1、向輪石1、凝灰岩1
	9			7	7		1	1		12 秋製品5、方錐製品1、粘土塊1、サヌカイト剥片1、向輪石1
	10					1	5	1		13 逆河25の6層
	11			1	2		11			14 1
	12			2	7		11	1		2
	13			2	3					3
	16			2		1		1		4
[調査坑]										
1	金	1	69	460		4	5	2	2	サヌカイト開石1
	1-4	1	129	289		9	4	1		
	5		12	80		2				
2	1-埋		79	431	2	11	5		1	
3	1-埋		52	299	17	5	5	3	1	青銅製品1、凝灰岩片
	4		7	39		1				2 錫製品1、錫製品3
	金		19	84		110	13	1	6	3 錫製品1、錫製品3
	1	1	21	112		36	8	1	7	4 錫製品1
	5		4	14		10	1			
	焼		73	325		99	16		4	5 錫製品1
	土		3	29		8	2	3		
	2		5	11		11	1	1		6 1
	5		15	107		137	21	3	27	7 サヌカイト剥片1
	4	3	41	83		16	6	33		8
	5	4	1	199		829	107	23	64	9 三形陶器3、鉄製品3、秋津1、管玉1、サヌカイト剥片1
	6		30	95		127	7	13	3	10 錫製品1、錫製品1、錫製品1
	7		5	17		32	2	2	1	
	8		4	6		4	3			
	9		12	51		16	1			
	10	1		2	16	1	24	1		
	11						16			
	13		1	4	21		14	2	1	14 褐鉄1・八双金具1
	16					6	1	4		

表:出土層 標:旧調査区埋戻し土層 横:搅乱土層

表6 平成21・22年度発掘調査出土遺物（2）

調査区	層位	瓦			土器			埴輪			その他
		軒丸	軒平	丸	平	箱瓦	下脚	裏板	黑色	瓦器	陶瓶
【調査区東地区】											
全	瓦	16	46	3	1	1	1	1	1	1	1
1-2						1	1				
3						6	1				
4		2	8	19	7	2					
5		15	26	21	2	2	6				
6				1							
7				1							
8		6	7	2	1			1			
9		12	28	1	2	2					
10				1							
11		33	34	9	5	1		1			
12		1	17	54	17	4		1			
13		13	23	9							
14		1	5	10	4			1	1		
15		7	13	91	20	2	19				
16		15	26	93	21	6	21				
17		8	19	41	2	2					
18		66	93	231	12	21	15				
19		2	4	3	1	1					
20		8	1	26	68	18	3	1			
21		1	14	17	15						
22		9	1	1							
23		1	1	5							
24		4	2	1	3	3	1	1	1		
25		5	6	39	59	115	20	18	17		
26		6	1								
27		7	1			12	2				
28		9	1	12	6	39	10	1	1		
29		10	11	30	4						
30		1	1	3	1						
31		1	1	12	14	9		1			
32		3	7								
33		4	3	4	1			2			
34		6	2	4	1						
35		7, 8	6	7	15	1	1	1	1		
36		9	1	3							
37		10-13			10	1					
【調査区西地区】											
全	瓦	91	221	1	2		1				
1	瓦	14	44	7	5		2				
2		6	42	46	17	9	11	6			
3		22		14	7	6					
4	1	9	86	115	19	5	21	1			
5		23	100	111	5	25					
6	1	64	248	1	217	9	46		1		
7		3		4	1						
8		11	75	167	17	15	9				
9		4	27	2							
10		14	3	4	2						
11		1	5	2							
12		4	6	1	3						
13		6	7	14	1	2					
14		9	46	3	1	1	1	1	1		
15		6	22	68	131	2	3	2	2		
16		9	14	38	2	4					
17		1									
18		2	1	3		1					
19		7	37	41	33	6	3				
【調査区北地区】											
1	瓦	2	1	3		1					
2		7	37	41	33	6	3				
【調査区北西地区】											
全	瓦	1									
1		1	11	23	11	7	3				
2		7	1	6	42	16		16			
3		9	4	16	256	30	71				
4		11	6	30	321	27	9	40			
5		11-12	12	70	191	18	34	23	1		
【調査区北東地区】											
1	瓦	1			2	1		1			
2		4			3	1					
3		5			3	1					
4		7			16	3					
5		7									
6		1			8	2	3				
7		1			2	3					
8		1			3	6					
9		1			6	3					
10		1			3	6					
11		1			2	3					
12		1			1	2					
13		1			1	2					
14		1			1						
15		1			1						
16		1			1						
17		1			1						
18		1			1						
19		1			19	3		6			
20		1			39	2		3			
21		5	1		58	2	5	1			
22		7	1		19	1		3			
23		8	2	1	21			1			

各調査区が距離的に隔たっているため、当該調査区所属遺物と判断している。

第1項 瓦・鶴尾・埠

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は『報告書』の基準に基づき分類した（本書24頁、図10・11）。その結果、IX型式中に蓮弁・間弁の大きさや形状が従来と異なるものが見出されたため、これをIX b型式とし、従来例はIX a型式とした。各調査区出土軒丸瓦の種類・点数・報告書番号は次のとおりである（図47・48）。

【金堂】49点 I:9点(110~112, 114~116) V:20点(119~121, 123, 124, 128~131, 133~

142, 144) V⁺:1点(122) VI:1点(146) VII:1点(147) VIII:2点(155)

IX b:1点(158) ?:14点

【講堂】6点 I:2点(113, 117) V:2点(127, 138) VII:2点(153)

【講堂東】15点 I:1点(118) V:3点(132, 143, 145) VII:2点(149, 150) VIII:1点(154) IX a:1点(156) ?:7点(157)

【講堂西】2点 V:1点(126) VII:1点(148)

【講堂北】1点 V:1点(125)

I型式の瓦当厚は1.8~2.0cmと比較的薄い。110・113・117・118の色調は橙色、焼成はやや軟であり、こうした特徴のI型式は講堂跡周辺に多いかもしれない。V型式は径4.6cmの中房に1+8の蓮子を子葉に描えて方形に配し、反りの強い蓮弁の中心の子葉は2段に成形されている。121の瓦当裏面の接合溝と丸瓦の間には隙間があり、丸瓦端縁は指オサ工調整されている。全体として灰色~灰白色、焼成は堅緘~良好、胎土は密なものが多いが、例えば145のようにやや軟質で砂粒が多いものもある。122は瓦当厚が3.0cmとやや厚いためV⁺型式と判断した。VI型式の146は灰色、焼成は良好。VII型式の147は外縁幅が2.0cm。VIII型式の色調はにぶい黄橙色~灰白色、焼成は良好、胎土は砂粒が少ないものと多いもの(154)がある。IX a型式の156は瓦当径16.5cm、中房径5.0~5.3cm、瓦当厚1.8cm、中房は1+4+8の蓮子が配され、蓮弁の反りは大きい。色調は灰白色、焼成は良好、胎土には大粒の砂粒が含まれている。IX b型式の158は中房径6.0cm、蓮弁・間弁とも反りが大きく、蓮弁の縁取りは高い。色調は灰白色、焼成はやや軟質、胎土は精良。157は型式不明だが、裏面に丸瓦端面の刻線が反転したと思われる細い隆線が数条見られる。

(2) 軒平瓦

軒平瓦も『報告書』の基準に基づいて分類した（本書25頁、図11・12）。ただし今回の調査では新たに波状重弧文軒平瓦（湖東式、指頭圧痕重弧文などと呼ばれる）が検出されたため、これをIV型式とした。この瓦は大脇潔の分類によるA類にあたり、瓦当面の凸面側広端縁に指頭による押圧を加えたものである〔大脇2005〕。また特に肥厚した瓦当面を作らず平瓦広端面に弧状の太い凹線を加えた平瓦(177)があり、同じように細い沈線を加えた事例は採集品にもある（図4）。今後、軒平瓦として検討すべきかもしれない。各調査区から出土した軒平瓦の種類・点数・報告書番号は次のとおりである（図49）。

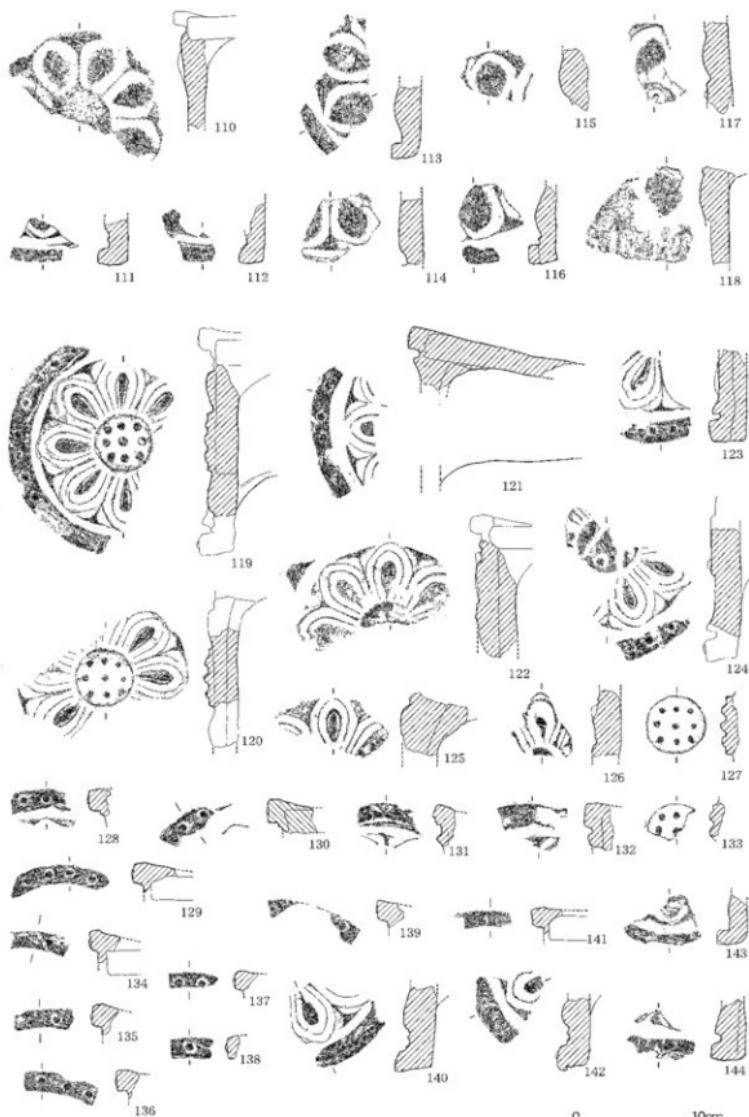


図47 平成21・22年度発掘調査 軒丸瓦（1）

0 10cm

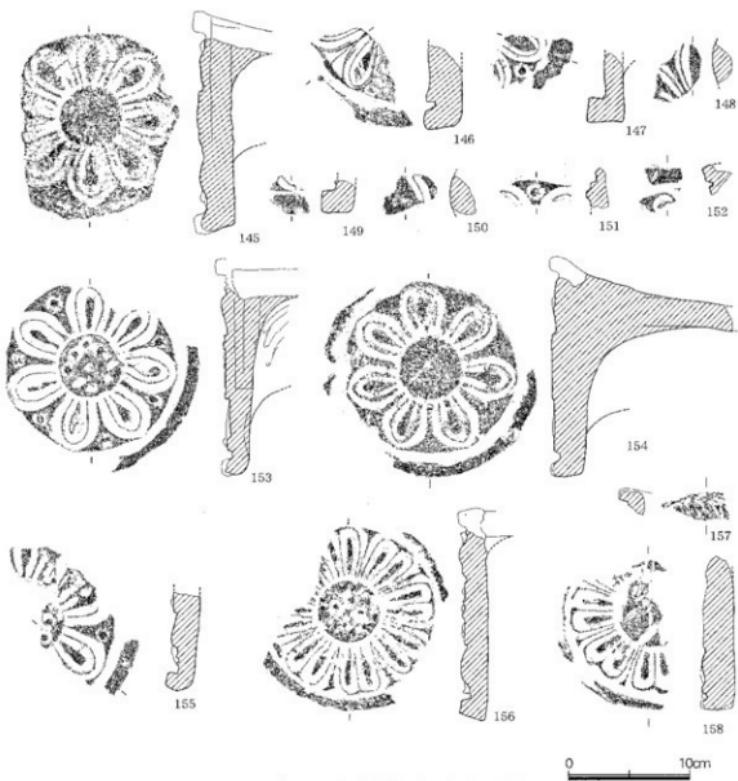


図48 平成21・22年度発掘調査 軒丸瓦（2）

0 10cm

【金堂】19点 I : 3点(159, 161, 162) II : 8点(164~166, 169, 170~172, 174) IV :

2点(175, 176) ? : 5点 平瓦: 1点(177)

【講堂】4点 I : 2点(160, 163) II : 2点(167, 168)

【講堂東】2点 II : 1点(173) ? : 1点

177の凹線は幅5mm、深さ2mm。色調は浅黄色、焼成は良好、胎土は密、凹面にわずかに模骨痕を留め、凸面は丁寧に縦ナデ調整、側面は丁寧にケズリ・ナデ調整。I型式には重弧の断面形が直線的なもの(159)と曲線的なもの(163)がある〔今井・林2010〕。また色調は淡黄色～灰白色、焼成は良好、胎土は密な一群(159・161・162)と色調はぶい褐色、焼成はやや軟、胎土はやや粗といった一群(160・163)がある。II型式は段頸部分で剥離しているものが多く瓦当の厚さが不

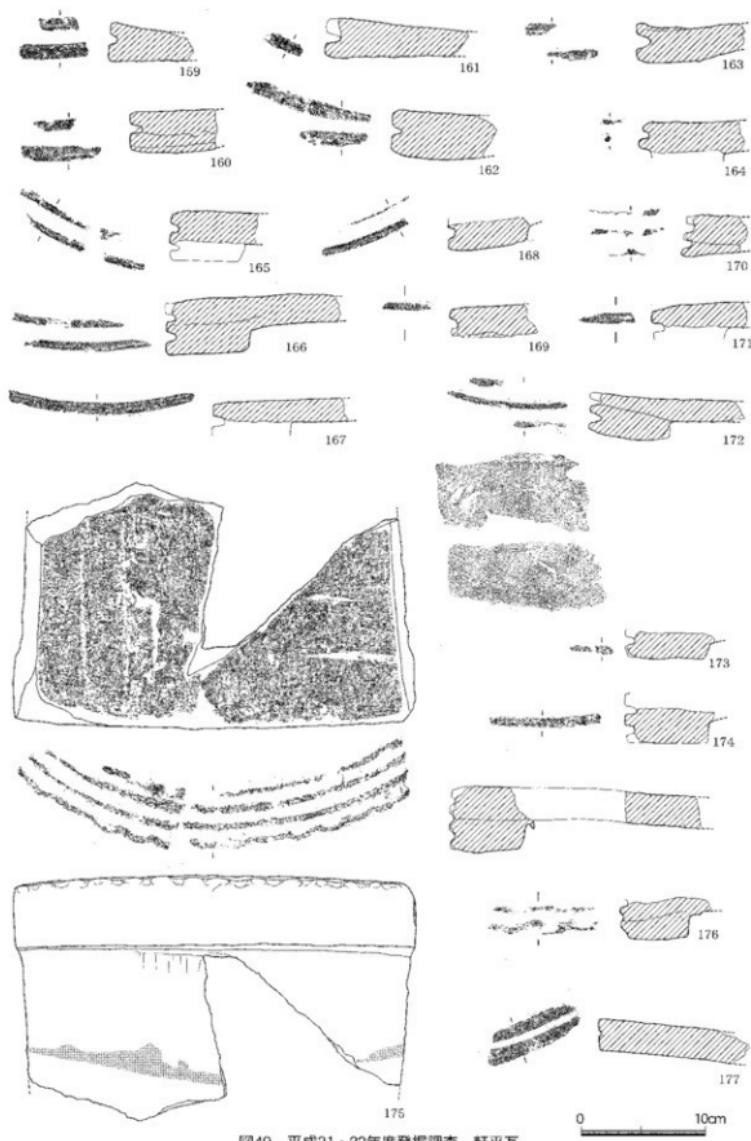


図49 平成21・22年度発掘調査 軒平瓦

明なものが多いが、やや厚いもの（166）とやや薄いもの（172）がある〔今井・林2010〕。平瓦部凹面は模骨痕を留め、色調は灰色～黄灰色、焼成は堅緻～良好、胎土は密なもの（171）と粗いものの（174）が存在する。なお段頸の貼り付け面には指頭痕や擦痕が残るものがある。また173の段頸凸面にはB-3?叩き目が残る。IV型式の175は貼り付け段頸で瓦当幅32.0cm、厚さ5.5cm、長さ6.4cm。平瓦部凹面には3.0～3.5cm幅の模骨痕があり、凸面は綫ナデ調整、段頸凸面にはわずかに布目痕が残る。色調はぶい赤褐色～黒色、焼成はやや軟、胎土は粗。なお平瓦凸面には、側縁部で段から8cm、中央部で段から10cmの位置に朱が付着している。176の小片もIV型式であり、色調は灰白色、焼成はやや軟、胎土は粗。

（3）丸瓦

丸瓦は金堂跡2区出土の玉縁部小片1点以外は全て行基式であり、叩き目の種類（『報告書』、本書29頁）と模骨痕の有無を表7にまとめた。叩き目にはB～E類があり、繩目文が最も多く、次いでB-3・4といった綫方向の綾杉文がしばしば観察される。また模骨痕のあるものは少ないが、この点数は瓦片の大・小にも左右され、観察時の実感としてはより多いようにも思われる。なお講堂跡周辺出土丸瓦では模骨痕を残す割合が金堂跡に比べ高くなっている。なお本書掲載丸瓦の特徴と報告書番号は次のとおりである（図50・51）。

表7 平成21・22年度発掘調査出土丸瓦の特徴

地区	凸面タタキ痕の大別						細別	凹面模骨痕		合計
	A	B	C	D	E	F		有	無	
塔跡						16		4	12	16
金堂跡	65	19	5	558	3324	B3/4/?、D1/D6		324	3647	3971
講堂跡	55	9	5	24	652	B3/4/?、C1/2/3/?、D6/?		232	513	745
講堂跡東	7	5		50	250	B3/4、C1/?		89	223	312
講堂跡西	3	4	8	9	237	B3/?、C3、D?		71	190	261
講堂跡北京					10			2	8	10
講堂跡北				2	21			3	20	23
講堂跡北西					19			2	17	19

【B-3類】模骨痕あり：178～180/金堂、181～184/講堂、204/講堂西

【C-2類】模骨痕あり：185～188/講堂

【C-3類】模骨痕あり：189/金堂 模骨痕なし：190/講堂

【D-6類】模骨痕なし：191/金堂

【E類】模骨痕あり：192～194/講堂、203/講堂西 模骨痕なし：195/金堂

【無】模骨痕あり：197～199/講堂、200・202/講堂西 模骨痕なし：196/金堂、201・205/講堂西
 丸瓦の長さは40.0cm（178）、35.0cm（195）である。模骨痕の幅は最も狭いもので0.9cm、最も広いもので1.5cmであり、1個体に1.0～1.2cm幅の模骨痕を留めるものが多い。模骨痕の断面形が円弧状を呈するものもあり竹状模骨の可能性もあるが、いずれも小片のため明確な綫縫の痕跡が見られないため、現状では側板連結模骨としておきたい〔今井・林2010〕。



図50 平成21・22年度発掘調査 丸瓦（1）

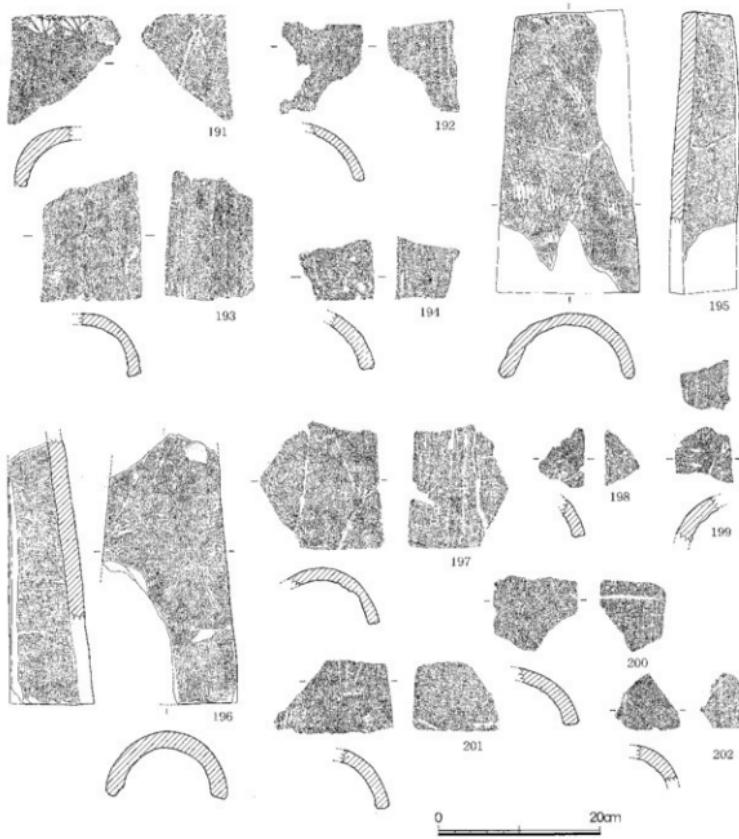


図51 平成21・22年度発掘調査 九瓦（2）

(4) 平瓦

平瓦もほとんどが小片・細片である。『報告書』の基準に基づいて多様な叩き目を分類し（本書29頁、図13）、種類および調査地区ごとに個体数を数えた（表8）。その際F類においてD-6類+D-8類という文様が見つかり、これをF-16類とした。A～D・F類は凹面に模骨痕を留めるものが多く、基本的には桶巻き作りである。縄叩き目のE類は文様を細分せず、凹面模骨痕や側面ヘラ切り痕から明らかに桶巻き作りと看做せるものをa類、それ以外をb類とした。小片のため一枚作りと断定することが難しく、b類には両者が含まれるものと思われる。F類は塔跡出土平瓦の分類基準に基づき縄叩き目を含まないものをa類、含むものをb類とした〔安村2000〕。この表から各調査地区的傾向を知ることができるが、問題は平瓦の出土量が多い調査地区は金堂・講堂跡であり、その中でも表土層や旧調査区埋土層が主体になっていることである。これらの土層から出土した遺物は過去の調査によって選択的に遭棄された可能性もあり、調査区の傾向を正しく反映しているか慎重に見極めなければならない。

金堂跡ではE類が過半数を占め、20～30%の講堂跡周辺とは違っている。この傾向は金堂跡の状況を反映しているとされる僧房跡でも同様であり〔安村2000〕、金堂跡の特徴かもしれない。逆にF類は講堂跡で高い比率を示す。一方A～D類は、金堂跡ではC-2類やD-1類、講堂跡ではA

表8 平成21・22年度発掘調査出土平瓦の特徴

地区	A(格子系)					B(綾衫系)					C(平行線系)					D(交錯線系)								
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7		
塔跡			3									1				1	5	5						
金堂跡	57	16	12	4	4			10	10	42	4	64	75	228	98	240	96	50	3	32	132	49		
	1.4	0.4	0.3	0.1	0.1			0.2	0.2	1	0.1	1.6	1.9	5.7	2.4	6	2.4	1.2	0.1	0.8	3.3	1.2		
講堂跡	1	125	147	16	76	15	30	48	78	18	69	295	57	26	19	14	15	4	6	21				
	0.1	6.5	7.6	0.8	3.9	0.8	1.6	2.5	4	0.9	3.6	15	3	1.3	1	0.7	0.8	0.2	0.3	1.1				
講堂跡東	1	3	2	11	1			3	1	13		10	13	18	10	58	7	3		1	18	3		
	0.3	0.8	0.5	2.9	0.3			0.8	0.3	3.4		2.6	3.4	4.7	2.6	15	1.8	0.8	0.3	4.7	0.8			
講堂跡西	6	14	12	9		1	8	6	8		11	39	25	46	7	14	13	6	1	8	7			
	1.3	3	2.5	1.	1.9	0.2	1.7	1.3	1.7		2.3	8.3	5.3	9.8	1.5	3	2.8	1.3	0.2	1.7	1.5			
講堂跡北東	1	1	1									1	4		1						1			
講堂跡北		4	1							1		1	7	6		1	1		1		1	4		
講堂跡北西	1	1		1					1	1		5	7	1	1	1	1		1	1	3			
D(交錯線系)																								
E(縄目)																								
F(複合)												細別										不別		
8												細別												
9												細別												
10												細別												
11												細別												
12												細別												
全												細別												
a												細別												
b												細別												
57												細別												
55												細別												
9												細別												
36												細別												
25												細別												
2271												細別												
787												細別												
1484												細別												
226												細別												
28												細別												
198												細別												
F-2～16												細別												
55												細別												
9												細別												
36												細別												
25												細別												
69												細別												
196												細別												
F-1, 4, 5, 7, 8, 10, 13～15												細別												
368												細別												
266												細別												
102												細別												
255												細別												
37												細別												
0.7												細別												
4.9												細別												
5.3												細別												
3.6												細別												
10.2												細別												
21												細別												
11												細別												
21												細別												
11												細別												
21												細別												

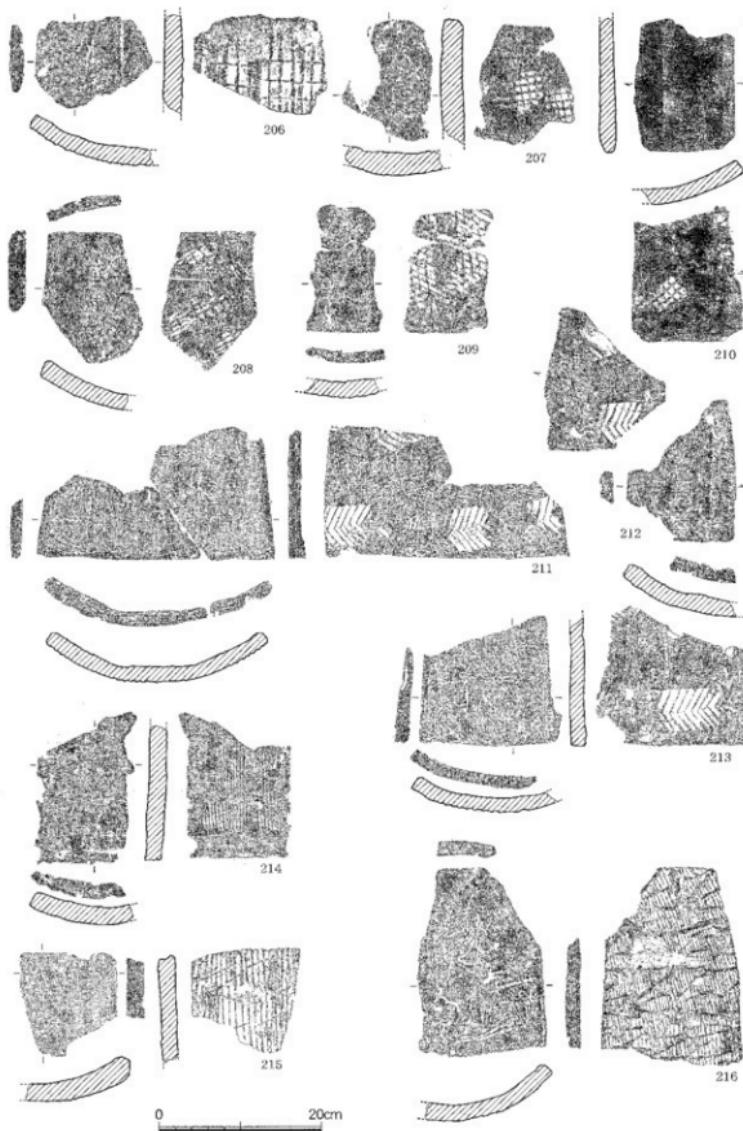


図52 平成21・22年度発掘調査 平瓦（1）

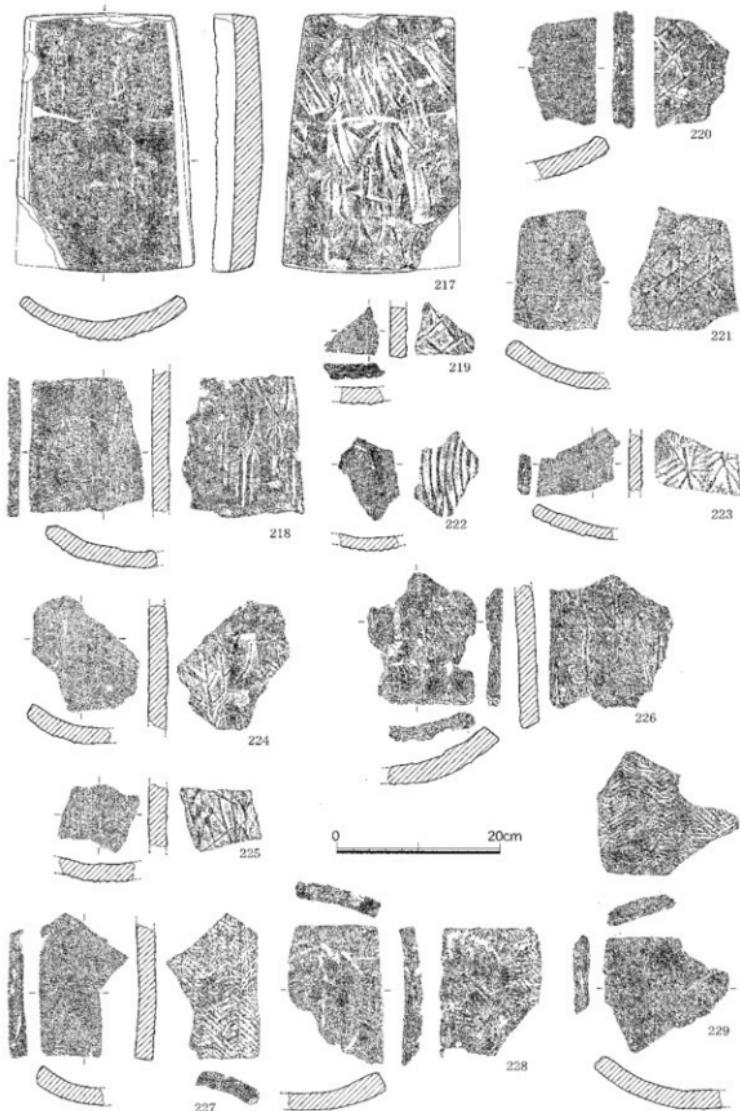


図53 平成21・22年度発掘調査 平瓦（2）

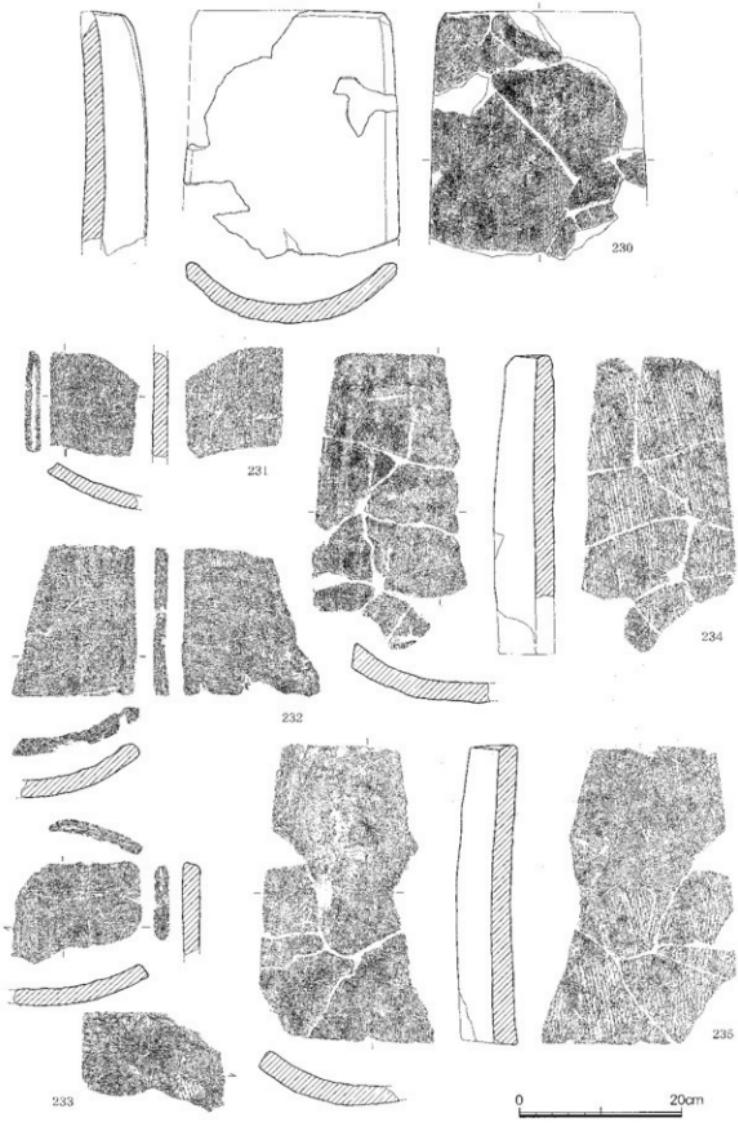


図54 平成21・22年度発掘調査 平瓦（3）

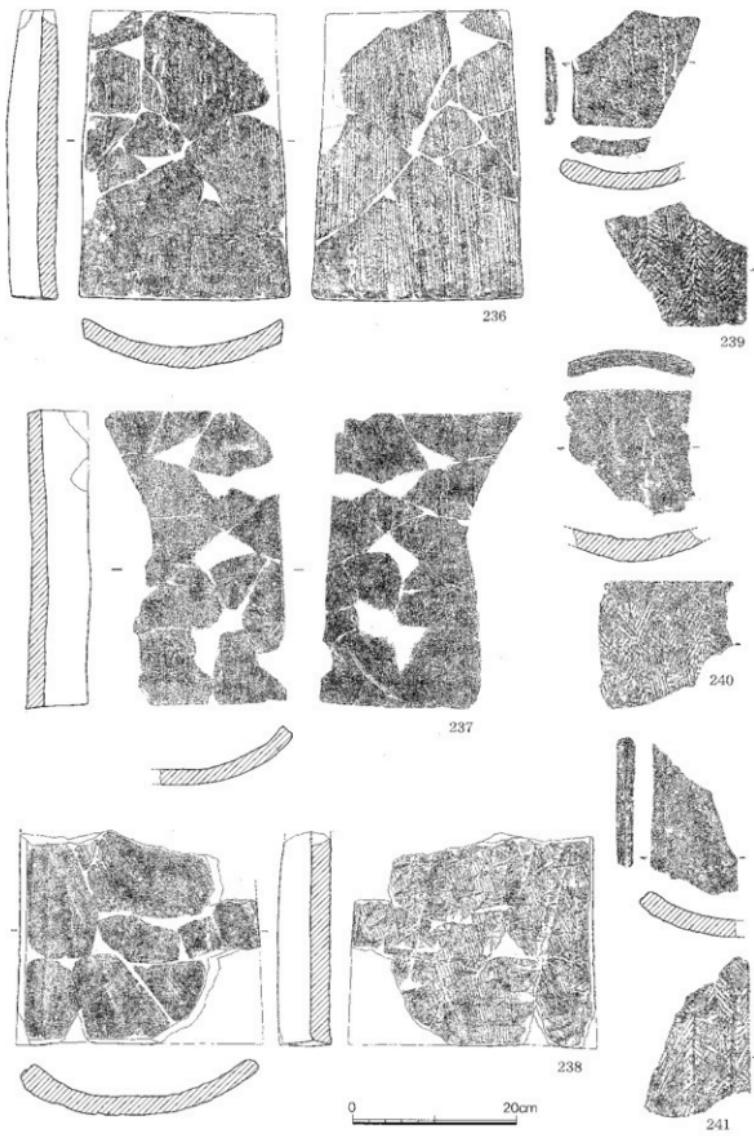


図55 平成21・22年度発掘調査 平瓦(4)

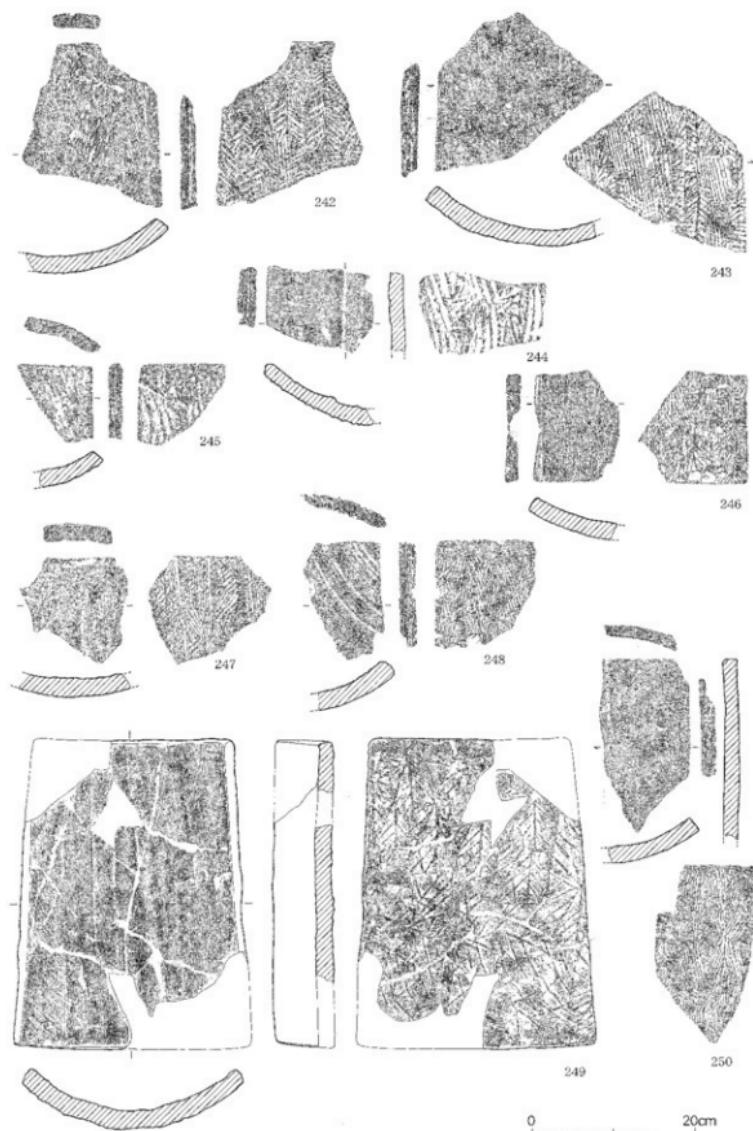


図56 平成21・22年度発掘調査 平瓦（5）

—2・3類やC—2類、講堂跡東ではD—1・8類、同じく西ではC—2・3・4類などが高い出現率を示している。なお本書掲載平瓦の特徴と報告書番号は次のとおりである（図52～56）。

【A類】 1：206/講堂、2：207/講堂、3：208/講堂、5：210/講堂西、7：209/講堂

【B類】 2：211～213/講堂

【C類】 2：214/講堂西、3：215/講堂、4：216/講堂西

【D類】 1：217・218/講堂、2：220・221/講堂西、6：223/講堂北西、7：222/金堂、8：224/講堂、225/金堂、226/講堂西、11：228/講堂西、229/講堂

【E類】 1：230/金堂、231/講堂、2：233～235/金堂、3：232・236/金堂、？：237/金堂

【F類】 3：238/金堂、5：239・240/講堂、8：241～243/講堂、9：244/講堂、12：245/金堂、13：247/講堂西、14：246・248・250/講堂、16：249/金堂

平瓦の大きさは211が広端部幅27.9cm、217が長さ42.6cm・狭端部幅18.5cm・広端部幅21.9cm、235が長さ37.5cm、236が長さ36.0cm・広端部幅25.5cm、237が長さ37.0cm、249が長さ38.5cmである。このうち236は一枚作り。側面部は断面形が円弧状になるまで丁寧に調整されているものもあるが、224・227・238・246・249のようにヘラ切り未調整のものも多い。また231の側面部は布の痕跡を留めている。なお210は講堂跡西2区の瓦列に使用されていた平瓦片である。

（5）鷗尾

金堂跡と講堂跡で鷗尾片が出土している（図57）。金堂跡出土の251～259は色調が灰白色、焼成は良好、胎土は密、厚さは4cm前後であり、同一個体と思われる。縦帯から鱗部の破片251は、鱗部内・外面の正段や腹部の浮き彫り文様など鷗尾C'に類似しているが〔大脇2002〕、縦帯内郭の段が逆段になるなど異なる点もあり、ここでは鷗尾C'とする。また同じ金堂跡出土の260は胴部に段（明確な段ではなく沈線状）を表現しており、從来から知られた唐様式とは異なる百濟様式の鷗尾である〔大脇1999〕。色調は灰オーラブ色、焼成はやや軟、胎土は密であり、鷗尾Eとする。

講堂跡出土の261～263は色調が灰白色、焼成はやや軟、胎土はやや粗、厚さは3cm前後であり、鷗尾Dの破片であろう〔大脇2002〕。また264は講堂跡出土、265は講堂跡東地区出土の破片。鷗尾Dの可能性もあるが、從来の資料では報告されていない器面の鍔叩き目が際立っているため、とりあえず鷗尾D'としておく。

（6）線画のある平瓦

金堂跡1区から平瓦凸面に何らかの絵画をヘラ書きで表現した破片が出土している（図58）。平瓦は桶巻き作り、側面はヘラ切り未調整、凸面は丁寧にナデ調整されている。

（7）埠

金堂跡2区から埠の破片が1点出土している（図58）。大きさは不明だが厚さは5.5cmを測り、色調はにぶい黄橙色、焼成はやや軟、胎土は密である。

第2項 その他

（1）土器

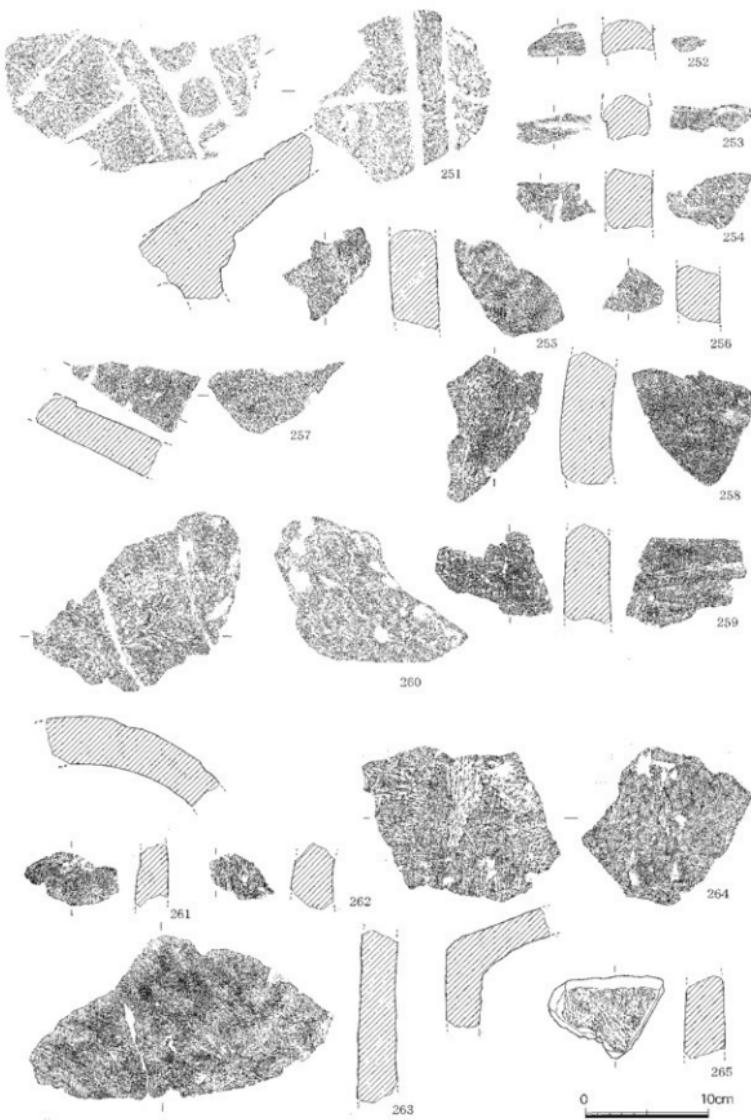


図57 平成21・22年度発掘調査 鰭尾

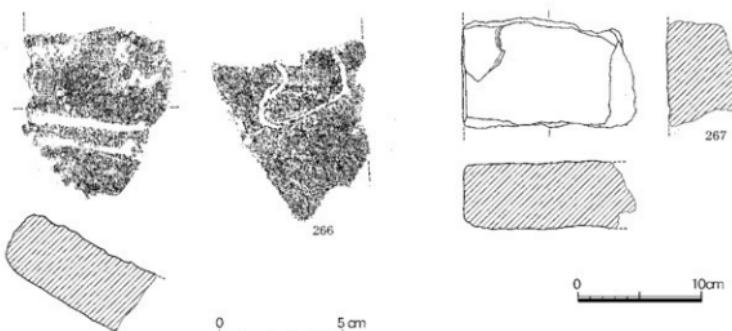


図58 平成21・22年度発掘調査 戯画平瓦・埴

弥生土器1点・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・施釉陶器(三彩・緑釉)・陶磁器などがある。出土点数は多いが、ほとんど微細片から小片という大きさであり、器形を復元し実測できる個体数は限られる(図59・60)。図示した土器の報告書番号と出土位置は次のとおりである。

【須恵器】〔無頬壺〕268/金堂2区12層〔杯〕269/講堂4区6層

【土師器】〔小皿〕271/講堂4区旧調査埋土層、270/同5層、272・274・277・280/講堂西2区11層、279/講堂北1区11層、275・276/講堂北西1区4層、278/同3区7層、273/同8層〔杯〕286/講堂3区4層、281・285/同4区5層、282/同6層、283/同8層、284/講堂西2区11層〔皿〕287~289/講堂4区5層〔鉢〕290/講堂西2区11層〔甕〕291/金堂2区9層(図25-5層)、297/同10層、293/講堂4区表土層、292/同5層、294・295/講堂東3区6層、296/同7層〔羽釜〕299/金堂2区10層、298/講堂東5区5層

【黒色土器】〔椀〕300~303/講堂西2区11層、304・305/講堂北1区11層

【瓦器】〔椀〕307/講堂東3区5層、309/講堂北1区11層、306・308/講堂北西3区8層

【施釉陶器】〔鉢〕310/講堂4区5層〔?〕311・312/講堂東5区5層

【陶器】〔小皿〕313/講堂4区埋土層

268は金堂南側整地層出土。土師器小皿には「て」の字口縁のものがある。杯には高台のつくものがあり、体部外面調整はナデ・指オサエ・未調整など。鉢の体部外面はほとんど未調整で部分的に指オサエ。内面は板ナデ。291は金堂基壇南面階段下層出土の甕。口径17.0cm、外面肩部の段は明瞭で体部は指オサエ、色調は赤褐色、焼成は良好。時期は8世紀か。294~296の甕は口径に比して体部の膨らみが大きく、体部は指オサエ後にナデ調整されている。羽釜のうち298は体部が大きく膨らむ。黒色土器のうち300・302・303は「内黒」、他は「両黒」。図示した施釉陶器は三彩。

今回出土した土器は寺院の創建から盛期にあたる7世紀後半から8世紀のものが極めて少なく、土師器小皿・杯・甕や黒色土器に示される10・11世紀のものが多い。また、これらの土器は主に講

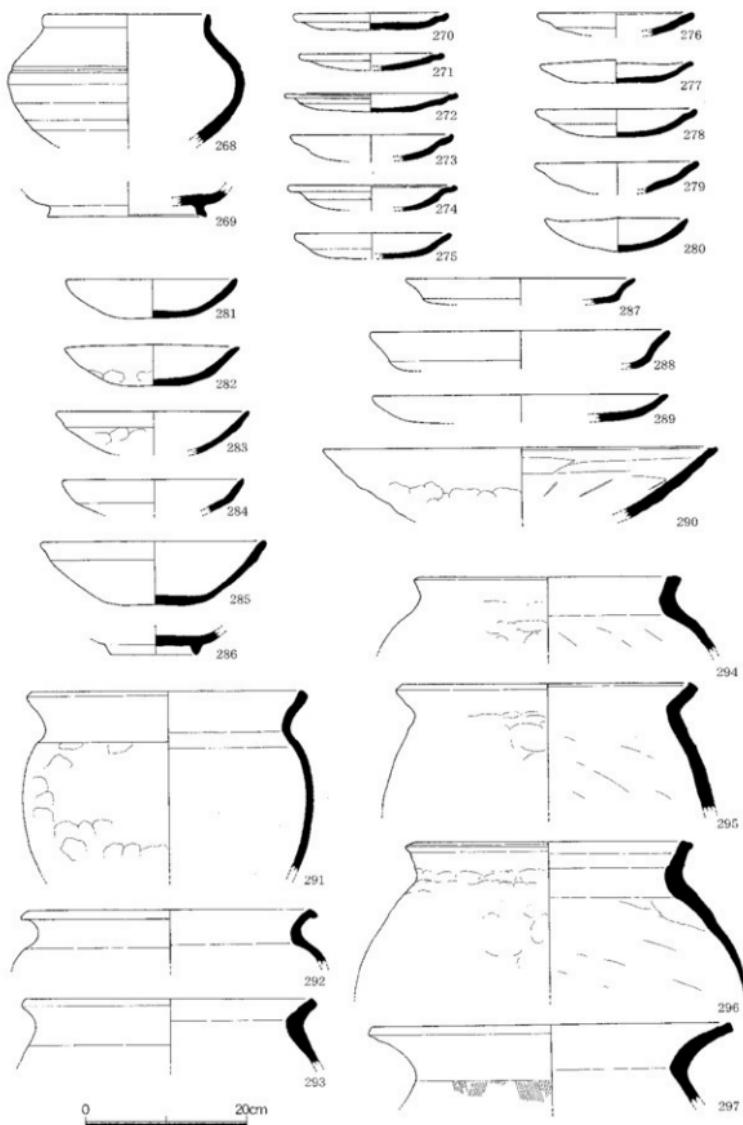


図59 平成21・22年度発掘調査 土器 (1)

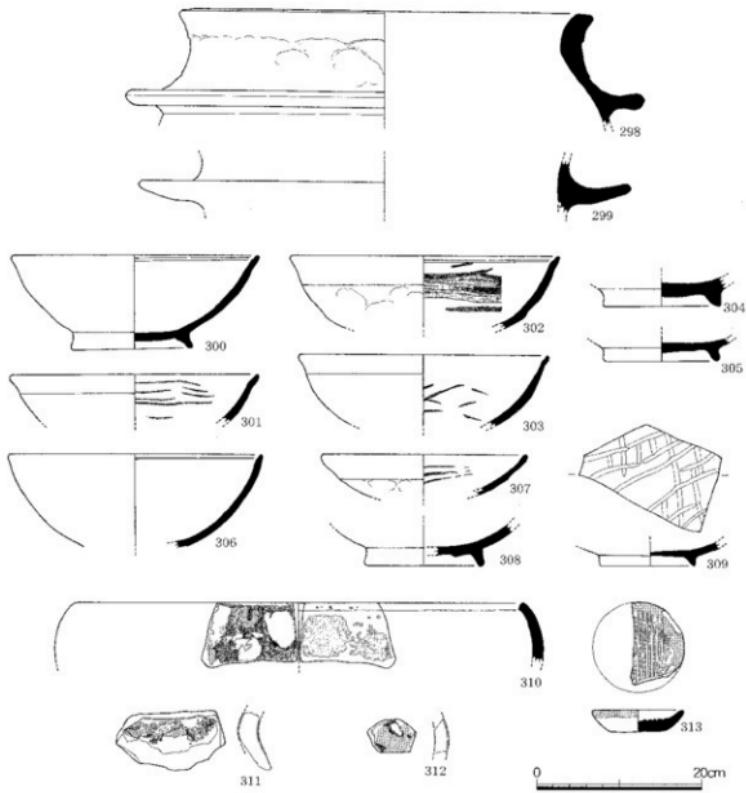


図60 平成21・22年度発掘調査 土器（2）

堂跡や講堂跡北側の区域で出土しており、寺城縁辺部に近い場所では周辺集落（高井田遺跡）からの影響をより多く受けているのかもしれない。

（2）金属製品

鉄釘・鍵・鐵製品・鐵滓・青銅製品・銭貨などが出土している（図61、写真図版15）。図示した資料の出土位置は次のとおりである。

【鉄釘・鍵】[釘]315・320・322・325・327/金堂1区、314・316~318・323・324・326・328・329/

同2区、335・336/講堂4区 [鍵]330・331/金堂2区

【鐵製品】〔?〕334/金堂1区、332・333/同2区 [軸擦金具?]337/講堂4区

【青銅製品】[金具]338/金堂2区、340/講堂北西2区、342/金堂1区 [?]339/講堂3区 [台

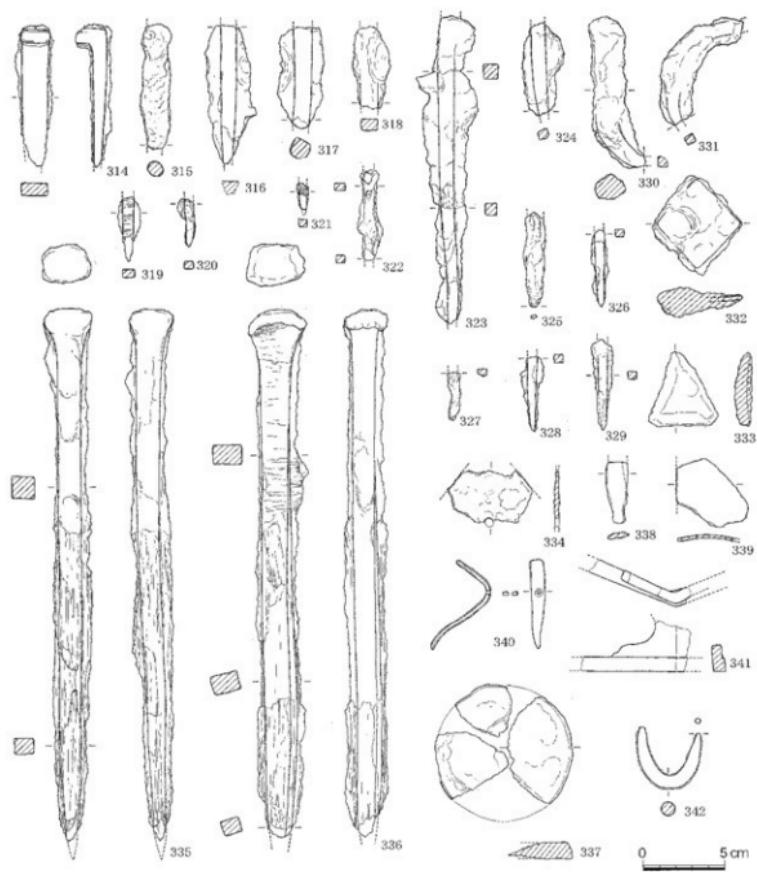


図61 平成21・22年度発掘調査 金属製品

座?】341/金堂1区

【銭貨】〔元祐通寶?〕写真図版15/講堂北西2区

鉄釘や鍵は鍛造が著しく形状や大きさが不明瞭である。314の頭部は折曲げ頭。319・321は先端部片で横方向の木目が残る。330・331は鍵としたが、鍛が著しく形状が不明瞭であり、折れ曲がった釘の可能性もある。332は菱形の鉄片。333は三角形の鉄片でわずかに湾曲する。334の形状は不明だが中心部に小さな円孔がある。青銅製の屈曲した細長い金具340には、屈曲部の頂点に小さな円孔がある。同じく341は雲形状の透かし孔と約138度に屈曲した形状に特徴があり、下端部が肥

厚しているところから、おそらく平面八角形の台座かと思われる。342は両端が尖るU字形の青銅製品で、断面形は直径8mmの円形である。鉄滓は小さいもので、重量は51.4g・30.7g・21.2g・17.2gのものがある。

335・336は講堂跡4区礎石西側検出の石組1上で出土した鉄釘(図61)。同様の釘が他に2本あり、同時に出土した八双金具や八双金具を留める小釘とともに扉板の付属品と思われる(図32)。本来はこれらを一括して報告すべきであるが、掲載した2点以外は遺存状態が劣弱なために図示できなかった。保存処理終了後、別の機会を設けて報告したい。335(鉄釘③)は現存長32.8cm、重量287.0g。頭頂部から13.8cm離れた位置から先端部にかけて縦方向の木目が残る。336(鉄釘④)は現存長32.6cm、重量416.6g。頭頂部から13.3cm付近まで横方向の木目、そこから先端部にかけて縦方向の木目が残る。木目の観察から扉板には幅13.5cm程の端枠材が使用されていたことが推測される。なお337はこれらの鉄釘近くで出土した鉄片で、接合はしないが円弧部分を合わせると直径約8cm、厚さ1.0cm、わずかに湾曲する円板になる。同様の資料は昭和37年の調査でも講堂正面扉の唐居敷座付近で出土しており、軸擦金具の可能性が指摘されている。337も講堂背面扉の軸擦金具の可能性が高い。

(3) 増輪

出土した増輪のほとんどは金堂跡2区から出土し、図示した増輪も全て同地区から出土したものである(図62)。343は色調や胎土から増輪と思われるが種類は不明。その他は円筒増輪で、331は口縁部。いずれも厚さ1cm未満の薄い器壁に高さ1~1.5cmの凸帯が廻り、前期古墳の増輪と思われる。

(4) 石製品(石器)・土製品

叩石・磨石・砥石・菅玉などがある(図62)。356は講堂跡東3区から出土した叩石。縫辺部と端部に敲打痕が残る。石材は砂岩で、重量は496.6g。357は講堂跡4区出土の花崗岩の磨石。358は講堂跡東6区出土の安山岩の砥石。表面全体と裏面の一部が磨かれている。359は講堂跡4区出土の碧玉管玉。長さ2.0cm、直径8mm。他にサヌカイト剥片や原石が出土している。1点といえ弥生土器の細片が出土しているので、これらの石器も弥生時代の遺物と思われる。

土製品としては、講堂跡4区で輪羽口の細片が1点出土している。

(5) 凝灰岩

凝灰岩片には基壇部材と礼拝石(石榴)の破片がある(図63)。360~368は金堂跡出土。360と366は一部に段がある。363は金堂北面階段西側登葛石の破片。369は講堂跡西2区出土で、実測図表面を下にしていた(図41)。370は講堂跡3区出土。出土位置からみると、壇上積基壇である須弥壇を構成した石材の一部かもしれない。371は金堂南面階段の前に据えられた礼拝石の一部。家形石榴の蓋を転用したもので、この破片はその隅角部にある。昭和37年の調査時には破片ではなかったが、埋め戻し等の際に破片として遊離したものであろう。兵庫県加古川市付近で産出する石材とされ(第7節)、当地域の家形石榴の石材としては類例が少ない資料である。

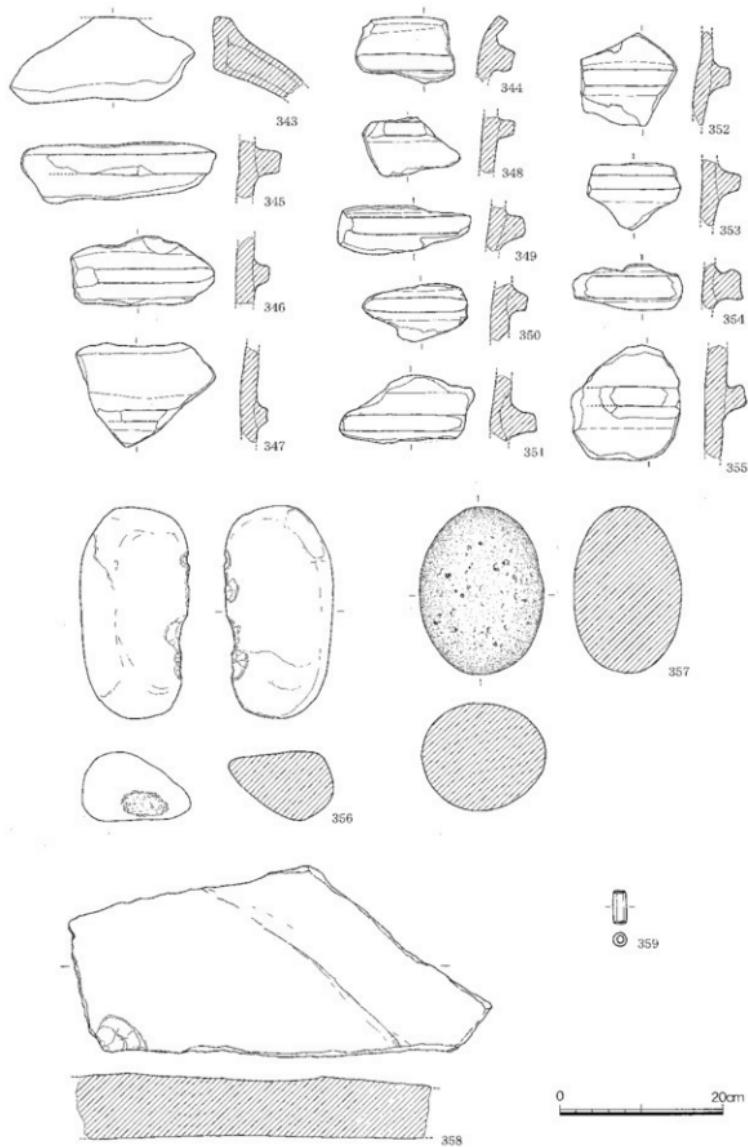


図62 平成21・22年度発掘調査 塗輪・石製品

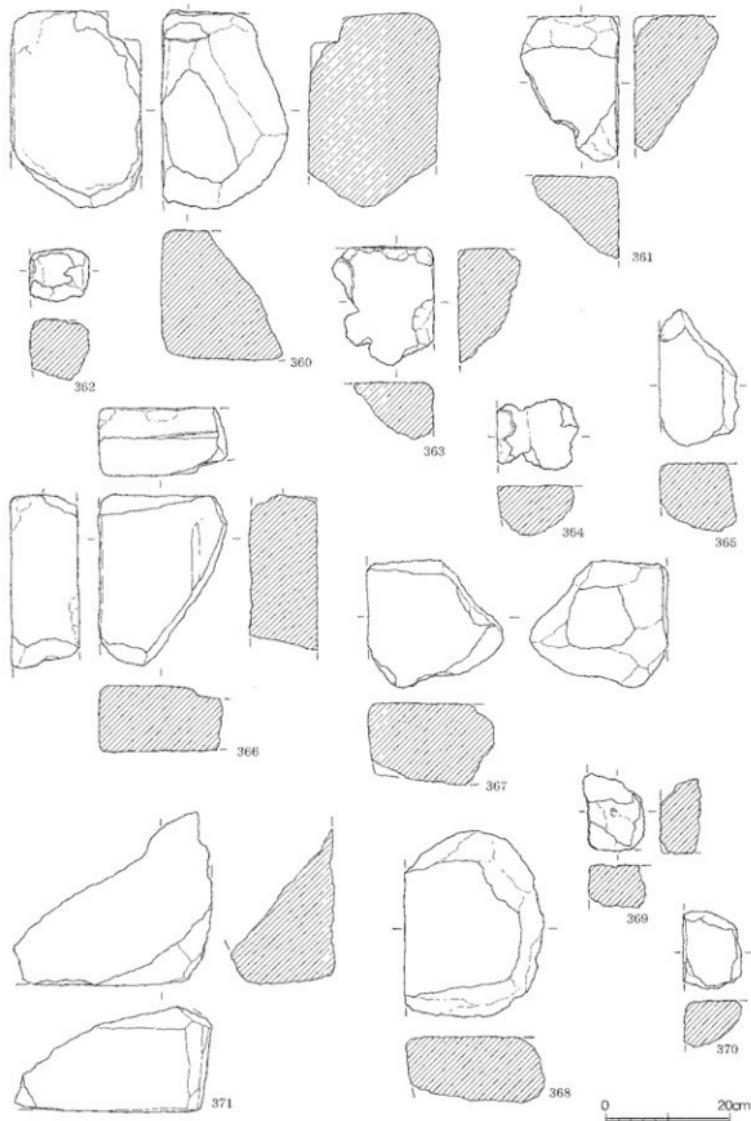


図63 平成21・22年度発掘調査 硬灰岩

第7節 石材の特徴とその採石地

鳥坂寺の塔跡・金堂跡・講堂跡の発掘調査で出土した石材の一部を裸眼で観察した。観察した石材の石種と用途、石材の採石地、石材の使用傾向について述べる。

観察した石材は基壇や礼拝石に使用されているような加工石、礎石のように造出は見られないが上面を平坦に加工されている石、露岩の節理面を利用して剥がしたような剥石、表面が滑らかな川原や海岸にみられるような石である。

第1項 石材の石種と用途

礎石は講堂付近で8基みられ、自然石の上面を平坦に部分的に加工が施され、石種が黒雲母花崗岩A・アブライト質黒雲母花崗岩・片麻状粗粒黒雲母花崗岩B・片麻状斑状黒雲母花崗岩・橄欖石安山岩である。講堂跡4区の敷石には自然石の閃綠岩、剥石の輝石安山岩C・輝石安山岩D・石英斑岩が使用されている。金堂の基壇や階段には方形に加工された流紋岩質火山礫凝灰岩が、裏込や基礎部に扁平な剥石の輝石安山岩C・橄欖石安山岩、川原石様の柘榴石アブライト・黒雲母花崗岩B・細粒斑鰐岩・中粒斑鰐岩が使用されている。また、用途不明の白色の石英質片岩の楕円礫（白石と呼ばれている石）が僅かであるがみられる。金堂前にある礼拝石は方形突起の一部が残る剝抜式家形石棺の棺蓋で、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩である。講堂跡4・5区の列石には自然石の片麻状細粒黒雲母花崗岩・片麻状粗粒黒雲母花崗岩B・閃綠岩・中粒斑鰐岩・黒雲母安山岩・輝石安山岩Bが使用されている。塔の溝端に使用されている列石には扁平な割石の輝石安山岩C・橄欖石安山岩・玄武岩・石英斑岩、自然石の流紋岩質溶結凝灰岩Aが使用され、礎敷には拳大以下の径をなす川原石様の亜角～円礫の安山岩・流紋岩質溶結凝灰岩A・砂岩・礫岩、剥石の輝石安山岩C・輝石安山岩Dが使用されている。金堂跡2区南側の整地層でみられた石材の石種は自然石のアブライト・片麻状粗粒黒雲母花崗岩・細粒斑鰐岩・中粒斑鰐岩・黒雲母流紋岩・玢岩・流紋岩質溶結凝灰岩A、剥石の輝石安山岩C・輝石安山岩D・橄欖石安山岩である（表9）。

第2項 石材の採石推定地

剥石は同質の石種を示す露岩の分布地で採石されたと推定され、二上山系凝灰岩のような柔らかい加工石は露岩から採取されたと推定される。しかし、石棺のような播磨系石材は、徳川期の大坂城築城時でも山中に転在する花崗岩類の石を割って石垣材として使用されていることからすれば、伊保山や升形山付近等に散在する転石を加工されたと推定される。また、川原石様の形状を示すものは川原石を採取されたと推定される。

鳥坂寺が位置する付近は、金堂の基壇直下の地山に見られるような花崗岩質岩起源の砂礫がほぼ水平に堆積する大阪層群最下部層〔市原1993〕が分布する。南方の高井田横穴公園付近には二上層群の凝灰岩層が分布し、東方の青谷から大県にかけての山地には領家花崗岩類が分布する。大和川の南側には領家花崗岩類の基盤を不整合に二上層群が覆い、多種の火成岩岩体が分布する。付近の

表9 鳥坂寺跡に使用されていた石材の石種と使用場所

石材の石種	使 用 場 所													
	塔 地 区		金 窓 地 区		講堂地区		施設地区		講堂周辺A					
	1区 側石	2区 側石	3区 側石	1区 側石	3区 側石	1区 側石	2区 側石	3区 側石	4区 側石	3区 側石	5区 側石	1区 側石	2区 側石	3区 側石
アブライト														
板岩アブライト														
黒雲母花崗岩A				×										●
黒雲母花崗岩B					×									
片麻状アブライト質黒雲母花崗岩													●	
片麻状斑れい黒雲母花崗岩														
片麻状中粒黒雲母花崗岩														×
片麻状斑れい黒雲母花崗岩A														
片麻状斑れい黒雲母花崗岩B														
片麻状斑れい黒雲母花崗岩														●
閃緑岩														
細粒斑巖岩														
中粒斑巖岩														×
黒雲母流紋岩														
安山岩			●											
温泉母安山岩														
輝石安山岩A														
輝石安山岩B														
輝石安山岩C	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲						
輝石安山岩D	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲						
鷹巣安山岩	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲						
玄武岩	▲													
石英斑岩														
流紋岩質斜長岩灰岩A		●	×	●										
流紋岩質滑長岩灰岩B														
流紋岩質火山巖灰岩質凝灰岩														
流紋岩質火成巖灰岩	●	●		●	●									
砂岩														
礫岩														
捕獲母岩														
石英質片岩														
石英質片岩														

●守院用に採石されたと推定される石 ▲吉原の石材を転用されたと推定される石 ×古墳の蓋石を転用した可能性もある石

河川の巣種をみれば、大和川では花崗岩類、橄欖石安山岩・玄武岩（芝山火山岩）や亀の瀬付近の輝石安山岩（明神山火山岩）等の火山岩、チャート等、原川では石英安山岩（寺山火山岩）、輝石安山岩（春日山火山岩）等、石川では花崗岩類、流紋岩質溶結凝灰岩、砂岩、礫岩、玢岩がみられる。当遺跡の東方山地には石英と長石が粗粒で多く、黒雲母が少ない黒雲母花崗岩A・黒雲母花崗岩Bが分布する。

以上のような石材の条件、石種の分布をもとに観察した石材の採石地について述べる(表10・11)。黒雲母花崗岩Aは大県から安堂にかけての山地に分布する花崗岩と岩相的に似ており、石材の表面が山地に点在するような様相を呈することから当付近の東方の谷で採石されたと推定される。黒雲母花崗岩B・片麻状粗粒黒雲母花崗岩は平尾山付近に分布する花崗岩と岩相的に似ており、石材の表面が山地に転在する石のようであることから平尾山付近の山中で採石されたと推定される。アブライト・片麻状アブライト質黒雲母花崗岩・片麻状細粒黒雲母花崗岩・片麻状中粒黒雲母花崗岩・片麻状粗粒黒雲母花崗岩Aは青谷付近に分布する花崗岩類の岩相の一部にそれぞれ似ている。大和川の川原石にも岩相と粒形が同様のものがみられることから、これらの石種の石材は大和川の川原で採取されたと推定される。閃緑岩・細粒斑巖岩は国分神社付近に分布する閃緑岩の岩相に似ている。石材の表面が山地に分布する様相を呈することから国分神社付近で採石されたと推定される。

表10 石材の石種の特徴とその採石地（1）

石種	石材の形状	石種の特徴	石材の採石地
アブライト 柘榴石アブ ライト	粒形が菱角、表面が川原 石様である。	色は灰白色である。石英・長石が頗るみ合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～1.5mm、量が非常に多い。	青谷付近に分布し、大和川 の川原石にみられる。
柘榴石アブ ライトアブ ライト	粒形が菱角、表面が川原 石様である。	色は灰白色である。石英・長石・柘榴石が頗るみ合っている。石英は灰白色透明、淡茶褐色透明で、粒径が1～4mm、量が多い。柘榴石は赤褐色、粒状で、粒径が1～3mm、量がごく僅かである。	産地不明
墨貴母花崗 岩A	粒形が菱角、表面が山中 に輸在する石のようにザ ラザしている。	色は灰白色である。石英・長石・墨貴母が頗るみ合っている。石英は無色透明、粒径が約2mm、量が僅かである。長石は無色、粒径が約10mm、量が非常多く、墨貴母は墨色、板状で、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。	大槻から安堂付近にみられ る石である。東方の山中で 探石されたのだろう。
黒貴母花崗 岩B	粒形が菱角、表面が山中 に輸在する石のようにザ ラザしている。	色は灰白色である。石英・長石・墨貴母が頗るみ合っている。右石は無色透明、粒径が約4mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が約2～4mm、量が非常多く、墨貴母は墨色、板状で、粒径が1～1.5mm、量が僅かである。	尾山付近に分布する石で ある。東方の山中で探石さ れたのだろう。
片麻状アブ ライトアブ ライト墨貴 母花崗岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石様である。	色は灰白色で、顯著な片麻状を呈する。石英・長石・墨貴母が頗るみ合っている。右石は無色透明で、粒径が約3～4mm、量が中である。左石は灰白色透明、粒径が2～3mm、量が非常に多い。墨貴母は墨色、板状で、粒径が1～1.5mm、量がごく僅かである。	青谷付近に分布する石で、 大和川の川原で探石された のだろう。
片麻状透輝 墨貴母花崗 岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石様である。	色は灰白色で、顯著な片麻状を呈する。石英・長石・墨貴母が頗るみ合っている。右石は無色透明、粒径が約3～4mm、量が中である。左石は灰白色透明、粒径が2～3mm、量が多い。墨貴母は墨色、板状で、粒径が1mm、量が中である。	青谷付近に分布する石で、 大和川の川原で探石された のだろう。
片麻状中粒 墨貴母花崗 岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石様である。	色は灰白色で、顯著な片麻状を呈する。右石・長石・墨貴母が頗るみ合っている。左石は赤褐色透明で、粒径が2～3mm、量が多い。墨貴母は墨色、板状で、粒径が2～3mm、量が僅かである。	青谷付近に分布する石で、 大和川の川原で探石された のだろう。
片麻状透輝 墨貴母花崗 岩A	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石様である。	色は灰白色で、顯著な片麻状を呈する。右石・長石・墨貴母が頗るみ合っている。右石は赤褐色透明で、粒径が2～3mm、量が中である。左石は赤褐色透明で、粒径が2～3mm、量が非常に多い。墨貴母は墨色、板状で、粒径が2～3mm、量が中である。	青谷付近に分布する石で、 大和川の川原で探石された のだろう。
片麻状粗粒 墨貴母花崗 岩B	粒形が菱角、表面がザラ した山中に見られる 石の様である。	色は灰白色で、片麻状を呈する。右石・長石・墨貴母が頗るみ合っている。右石は無色透明、粒径が約2～10mm、量が多い。左石は灰白色、粒径が約5～8mm、量が中である。墨貴母は墨色、板状で、粒径が約2～10mm、量が多めである。	青谷付近に分布する石で、 大和川の川原で探石された のだろう。
片麻状透輝 墨貴母花崗 岩	粒形が菱角、表面がザラ した山中に見られる 石の様である。	色は灰白色で、顯著な片麻状を呈する。右石・長石・墨貴母が頗るみ合っている。右石は無色透明で、粒径が約2～10mm、量が多い。左石は赤褐色透明で、粒径が2～8mm、量が中である。墨貴母は墨色、板状で、粒径が約2～10mm、量が多めである。	青谷付近に分布する石で、 大和川の川原で探石された のだろう。
閃綠岩	粒形が菱角、表面がザラ した山中の石の様で ある。	色は灰白色で、角閃石が頗るみ合っている。右石は灰白色、粒径が約2～4mm、量が中である。角閃石は墨色、板状で、粒径が約2～4mm、量が中である。	国分神社付近の石で分布す る。この付近で探石された のだろう。
緑斑斑岩	粒形が菱角、表面がザラ した山中の石の様で ある。	色は灰绿色である。右石・角閃石が頗るみ合っている。右石は灰白色、粒径が1～2mm、量が多め。角閃石は墨色、粒径が1～2mm、量が中である。	国分神社付近の石で分布す る。この付近で探石された のだろう。
ウロコ斑岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石の様である。	色は灰綠色である。右石・角閃石・輝石が頗るみ合っている。長石は灰白色、粒径が約2～3mm、量が多い。角閃石は墨色、粒径が2～4mm、量が中である。	有川や大和川の川原にみ られる。大和川の川原で探 石されたのだろう。
墨貴母透輝 岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石の様である。	色は赤褐色で、不規則の孔が開在する。孔の径は1～2mm、量が僅かである。底質は右石・墨貴母で構成される。右石は無色透明、粒径が0.5～1mm、量がごくごく僅かである。墨貴母は墨色、板状で、粒径が0.5～1mm、量がごくごく僅かである。右石はガラス質である。	有川や飛鳥川の川原でみら れる石である。右石の川原 で探石されたのだろう。
安山岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石の様である。	色は赤茶色で、多孔質である。岩晶乳質に長石である。長石は白色、粒径が約2mm、量が僅かである。右石はガラス質である。	右石の川原でみられる石である。右石の川原で探石されたのだろう。
墨貴母安山 岩	粒形が菱角、表面が渾ら かな川原石の様である。	色は赤褐色で、多孔質である。岩晶乳質は墨貴母と墨貴母である。右石は灰白色、柱状で、粒径が約1～2mm、量は中である。墨貴母は墨色、板状で、粒径が約2～4mm、量がごく僅かである。右石はガラス質である。	有川や飛鳥川の川原でみら れる石である。右石の川原 で探石されたのだろう。
輝石安山岩 A	粒形が菱角、表面がザラ した山中に見られる石 の様である。	色は淡茶色である。輝石が約2mmの粒度で構成される。右石は灰白色、柱状で、粒径が約1～2mm、量がごく僅かである。墨貴母は墨色、板状で、粒径が約2～4mm、量がごく僅かである。	天勝田川神社の南斜面に露 出する石である。
輝石安山岩 B	粒形が菱角、表面がザラ した山中に見られる石 の様である。	色は淡茶色である。輝石が約2mmの粒度で構成される。右石は灰白色、柱状で、粒径が約1～1.5mm、量が中である。墨貴母は墨色、柱状で、粒径が約0.5～1mm、量がごく僅かである。右石はガラス質である。	天勝田川神社の南斜面に露 出する石である。

表11 石材の石種の特徴とその採石地（2）

石種	石材の形状	石種の特徴	石材の採石地
輝石安山岩C	断石である。板状節理の面を利用して剥がしたと推定される。	色は淡青灰色で、縦状の亀裂孔が散在する。その粒径が1~3mm、量が僅かである。斑晶氷片は長石と輝石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。輝石は暗褐色で、柱状で、粒径が0.5~1mm、量がごく多く散在する。輝褐色の解石は粒状で、粒径が0.5~2mm、量が僅かである。基質はガラス質である。	龜ノ瀬付近に分布する石である。割石であり、現地で採石されたのだろう。
輝石安山岩D	粒形が亜角、円内で、表面が滑らかな川原石様である。	色は灰褐色である。斑晶氷片は長石と輝石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.5mm、量が中である。輝石は暗褐色、柱状で、粒径が0.5mm、量がごく多く散在する。輝褐色の解石は粒状で、粒径が0.5~1mm、量が少く散在する。基質はガラス質である。	川原や飛鳥川の川原でみられる石である。原川の川原で採石されたのだろう。
榍礫石安山岩	剥石である。板状節理の面を利用して剥がしたと推定される。	色は灰色である。斑晶氷片は長石、輝石、榍礫石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。輝石は暗褐色、柱状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。榍礫石は灰褐色、柱状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。基質はガラス質である。	芝山の山頂付近に分布する石である。割石であり、現地で採石されたのだろう。
玄武岩	剥石である。板状節理の面を利用して剥がしたと推定される。	色は淡青灰色である。斑晶氷片は長石、輝石、榍礫石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。輝石は暗褐色、柱状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。榍礫石は灰褐色、柱状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。基質はガラス質である。	芝山の山頂付近に分布する石である。割石であり、現地で採石されたのだろう。
石英斑岩	剥石で、板状節理の面を利用して剥がしたと推定される。	色は灰褐色である。斑晶氷片は長石、輝石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。輝石は暗褐色、柱状で、粒径が1~2mm、量が中である。榍礫石は灰褐色、柱状で、粒径が1~2mm、量が中である。基質はガラス質である。	丹波石に似ている。羅山の柏原付近に広く分布する。
玢岩	粒形が亜角で、表面が滑らかな川原石様である。	色は灰褐色である。斑晶氷片は長石と角閃石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が1~4mm、量が多い。角閃石は黒色、鈍角、柱状で、粒径が1~4mm、量が中である。基質はガラス質である。	石川の川原石にみられる。石川の川原石を採取されたのだろう。
透紋岩質滑石斑岩A	粒形が亜角、円内で、表面が滑らかな川原石様である。	色は茶褐色で、圓錐的な亀裂孔を呈する。表面に爪状の剥れ目がある。斑晶氷片は石英岩で、粒径が8~10mm、量が僅かである。基質はガラス質である。	石川の川原石にみられる。石川の川原石を採取されたのだろう。
透紋岩質滑石斑岩B	粒形が亜角、円内で、表面が滑らかな川原石様である。	色は黄土色で、表面が顕著である。構成岩は透紋岩、石英、長石である。透紋岩は灰白色、粒径が8~8mm、量が中である。石英は無色透明、粒径が5~10mm、量が僅かである。長石は灰白色、柱状で、粒径が1~5mm、量が多い。基質はガラス質である。	石川の川原石にみられる。石川の川原石を採取されたのだろう。
流紋岩質火山岩凝灰岩	剥後式家形石槽の施主である。	色は淡黄色で、溶結を呈する部分がある。表面に解石がぬけた跡の孔が散在する。その孔径は約10mm、量が僅かである。構成岩は透紋岩、石英、長石である。流紋岩は灰白色で、褐色を呈するものがあり、石英はガラス質である。灰白色の透紋岩は、角閃石が亜角、粒径が2~12mm、量が中である。褐色の透紋岩は、殆ど角閃石、粒径が2~6mm、量が僅かである。石英は無色透明、粒径が1~3mm、量が僅かである。基質は灰白色、柱状で、粒径が1~5mm、量が多い。基質はガラス質である。	加古川市池の平賀瀬付近の石に似ている。この石材は見崩丸山古墳の埴輪、広縄町牧野古墳の埴輪にみられる。
流紋岩質火山岩凝灰岩	塊状積層帶にみられる方形に加工された石である。	色は灰白色である。構成岩は透紋岩、石英岩、輝石である。透紋岩は灰色、角閃石が亜角、粒径が2~10mm、量が中である。石英岩は無色透明で、粒径が5~20mm、量が中である。	鹿谷寺跡北方付近の石に似ている。鹿谷寺跡北方付近で採石されたのだろう。
彩岩	粒形が亜円、円で、表面が滑らかな川原石様である。	色は褐色である。ガラス質滑石斑岩の粒が非常に多い。その粒形は亜角で、粒径が1~1.5mmである。	石川の川原石にみられる。石川の川原石を採取されたのだろう。
碧岩	粒形が亜円、円で、表面が滑らかな川原石様である。	色は褐色で、表面が滑らかな川原石様である。粒形が亜角で、粒径が0.5~1.5mmである。	石川の川原石にみられる。石川の川原石を採取されたのだろう。
網雲母片岩	剥石で、片理に沿って割られている。	色は青灰色で、片理が顯著である。片理に沿って白雲母が並ぶ。白雲母は無色透明、板状で、粒径が1~4mm、量が多い。基質はややガラス質である。	房島、和歌山市、諏訪市に分布する。近距離では柘島である。
石英質片岩	剥石で、海岸に見られる様な石である。白石と呼ばれる石である。	色は白色で、片理が顯著である。石英質の石である。	勝浦島の南部や和歌山市、諏訪市にみられる。諏訪市の海岸には近距離では柘島である。

黒雲母流紋岩は二上山の雌岳に分布する離岳火山岩に岩相的に似ており、安山岩は雄岳に分布する烟火山岩の岩相に似ている。これらの石が共に採石できるのは飛鳥川あるいは飛鳥川と合流した石川である。輝石安山岩A・輝石安山岩Bは鳥坂寺の塔跡がある天湯川田神社の南斜面付近に露出する輝石安山岩の岩相に似ている。輝石安山岩Cは亀ノ瀬付近に分布するドロコロ火山岩の岩相に似ている。剥石であることから亀ノ瀬付近で採石されたと推定される。輝石安山岩Dは春日山火山岩の岩相に似ており、川原石様であることから原川が飛鳥川の川原で採石されたと推定される。榍礫石安山岩・玄武岩は芝山に分布する芝山火山岩の岩相に似ている。剥石であることから芝山で採石されたと推定される。石英斑岩は篠山市柏原付近に分布する石英斑岩の岩相に似ている。柏原付近の石は「丹波石」の名称で販売されている。剥石であることから柏原付近で採石されたのだろうか。

玢岩・流紋岩質溶結凝灰岩A・流紋岩質溶結凝灰岩B・砂岩・礫岩は川原石様であり、石川の川原石を採取されたと推定される。絹雲母片岩は比較的に白雲母が粗粒である。沼島・和歌山市・徳島市の結晶片岩分布地で片理面を利用して剥がし、採石されたと推定される。距離的には沼島が近い。また、石英質片岩は白色の楕円窓で、沼島・和歌山市・徳島市の結晶片岩分布地の海岸等でみられる石である。流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩は加古川市池付近に分布する凝灰岩の岩相に似ている。流紋岩質火山礫凝灰岩は鹿谷寺跡北方付近に分布する凝灰岩の岩相に似ている（表10・11）。

第3項 石材の使用傾向

鳥坂寺跡にみられる石材の採石地は、付近、近地、遠地と距離的に区分される。距離と石種の関係をみれば、

付近：黒雲母花崗岩A、黒雲母花崗岩B、片麻状粗粒黒雲母花崗岩B、輝石安山岩A、輝石安山岩B

近地：アブライト、片麻状アブライト質黒雲母花崗岩、片麻状細粒黒雲母花崗岩、片麻状中粒黒雲母花崗岩、

片麻状粗粒黒雲母花崗岩A、片麻状斑状黒雲母花崗岩A、閃綠岩、細粒斑駁岩、中粒斑駁岩、黒雲母

流紋岩、安山岩、輝石安山岩C、輝石安山岩D、橄欖石安山岩、玄武岩、玢岩、流紋岩質溶結凝灰岩

A、流紋岩質溶結凝灰岩B、流紋岩質火山礫凝灰岩、砂岩、礫岩

遠地：石英斑岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、絹雲母片岩、石英質片岩

となる。遠地とした石材の中に、礼拝石の石材のように例抜式家形石棺の棺蓋を転用している例があるが、他の石は篠山市付近や近くても淡路島の南部にある沼島である。東大寺金堂前にある八角燈籠の土壇の粘土中には緑色や白色の結晶片岩の円窓が含まれていた例はあるが、鳥坂寺の金堂造営の為に白石を遠地まで採石に行ったとは考え難い。近くにある玉手山1号墳・3号墳・7号墳・9号墳や松岳山古墳の例からみれば、絹雲母片岩・石英質片岩・輝石安山岩C・輝石安山岩D・橄欖石安山岩・玄武岩は主体部付近に使用されている石である。また、石英斑岩は揖津から山城にかけての前期古墳に使用されている石材である。このような例からみれば、寺院造営の為に各地から石材を運んだとするよりも、前期？古墳の石材を寺院の石材に転用したと考えられる。

確認できた講堂の礎石は片麻状粗粒黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩Aが当寺東方の山中や平尾山、片麻状斑状黒雲母花崗岩が青谷付近と場所がほぼ2ヶ所に絞られる。また、塔跡の溝の敷石の多くは石川で採石されたと推定される。金堂の基壇に使用されている凝灰岩は基壇用に採石されたのだろう。これら礎石や敷石、基壇の石材は寺院を建立する時に山地や川原で採石されたと推定される。

人頭大の川原石様の石材であるアブライト・柘榴石アブライト・黒雲母花崗岩A・黒雲母花崗岩B・片麻状粗粒黒雲母花崗岩・片麻状中粒黒雲母花崗岩・片麻状粗粒黒雲母花崗岩A・閃綠岩・細粒斑駁岩・中粒斑駁岩・黒雲母流紋岩・黒雲母安山岩・玢岩・流紋岩質溶結凝灰岩Bについては寺院建築時に川原で採石されたのか、古墳の葺石に使用されていたのを再利用されたのか判断し難い。

以上のように鳥坂寺建立の為に付近で石材を採取するとともに、少なくとも2基の古墳を破壊し、その石材も使用していることが窺える。

（奥田 尚）

第5章 調査成果の総括

第1節 鳥坂寺の立地と建物配置

鳥坂寺は大和川と石川の合流点に臨む生駒山地最南端の丘陵上に立地している。この地域は古代河内国のほぼ中央部に位置し、平城京から難波宮（京）や西方諸国へ至る古道（童田道・渋川道など）が通じ、古代寺院が密集する地域として知られている（図2）。事実、鳥坂寺跡を含む生駒山地西麓の東高野街道前身道路に沿って並ぶ寺院遺跡は〔足利1978〕、400～600m程度という距を接するような間隔で並べている。これらの寺院は第2章第3節でも検討したように孝謙天皇が巡拝した河内六寺に比定される。

この鳥坂寺の主要伽藍である金堂と講堂が建立された平坦面は、どのようにして造り出されたのであろうか。地形的には、講堂跡の北側は集落（高井田遺跡）が営まれた尾根から降る急斜面になっており、金堂・講堂が地山削り出し基壇であるという状況も加味して判断すると、おそらく大和川に向か南西方向に張り出した尾根の脊梁部を削平して造成されたものと思われる。この平坦面において、金堂・講堂は南北一直線上に配置され、金堂を囲む回廊は講堂に接続して閉じている。建物の主軸は、回廊跡の礎石から判断すると真北から $0^{\circ} 30'$ 程度西に振っている可能性もあるが、部分的な調査のため不明な点もあり、ほぼ真北を指すものと思われる。

この金堂院とでもいべき回廊で囲まれた金堂を中心とした一郭の大きさ、特に南北方向の長さについては、回廊の東・西・南面部が失われているので推定の域を出ない。しかし、昭和23年に米軍によって撮影された空中写真をもとに作成された旧地形図を見ると（図65）、東側の谷の金堂側の肩に見える標高34m・36mの等高線は南北方向に直線的に延びていて、金堂・講堂が建つ平坦面の広がりや東面回廊の位置を反映している可能性が高い。また推定される西面回廊については、その南側は塔跡に上る斜面になっているので、敢えて平坦面に位置する東面回廊とのバランスを崩してまで、例えば長谷寺の登廊のように斜面に沿って長く延びていた可能性は少ないものと思われる。このように地形的な状況も考慮して、回廊は一定の平坦面の中で廻っていたと考えると、その広がりとしては外側の柱筋でおよそ南北58.4m×東西54.1mという範囲を考えておきたい（図64）。もちろん、この数値は造構から導き出したものではなく北面回廊を得た桁行の数値を単純に積算したものであり、例えば門などが存在すれば桁行の数値も変わることは当然である。

この平坦面の南端に位置する金堂跡の南側は、自然地形のままであれば尾根が南北方向に張り出しているために急斜面になっていたはずである。しかし、実際には削出した土砂を盛って整地された狭小な平坦面が広がっている。この空間には、造構として確認されたわけではなく、また金堂との距離がやや近くなりすぎるという問題点もあるが、回廊と連絡した 2×3 間程度の小型の中門が収まるものと想定しておきたい。なお整地土には古墳時代前期の埴輪片・板状石材・白色礫等がかなり含まれており、造成以前の尾根には前期古墳が存在した可能性が高い。この鳥坂寺跡周辺の前

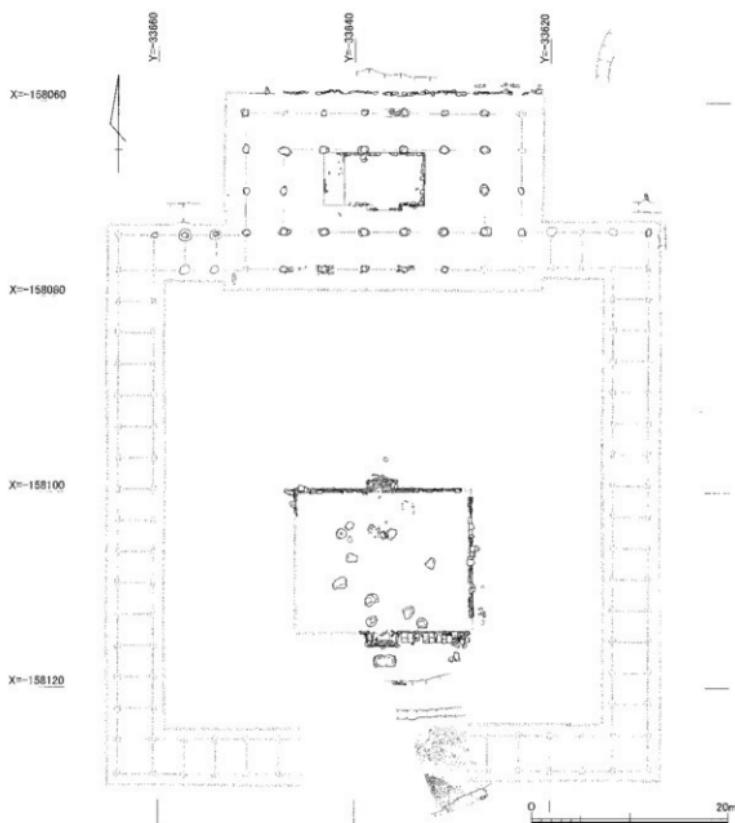


図64 回廊推定図

期古墳は、現在は住宅地になっている主要伽藍北西の尾根にも前方後円墳状の高まり（鳥坂古墳）が見えるように、10数基の古墳からなる安堂山古墳群として既に紹介されている〔山本1973〕。

主要伽藍東側の小さな尾根は伽藍の一部と寺院付属の雑舎が建てられた区域である¹¹。寺院以前には後期古墳や小さな谷も存在したが、斜面を削平し、谷を埋めて雑壇状の平坦面が形成されている。標高はおよそ30～35mであり、ここから北西方向の金堂を見た場合には、深い谷を隔ててやや仰ぎ見るような眺望であったろう。建物跡の方向は真北から約11°西に振っている。

鳥坂寺の塔跡は金堂から南西方向に離れた天湯川田神社の境内に位置している。ここは大和川を眼下に望む西側尾根の突端部であり、金堂・講堂が建つ平坦面からおよそ4～5m高い寺域の最高

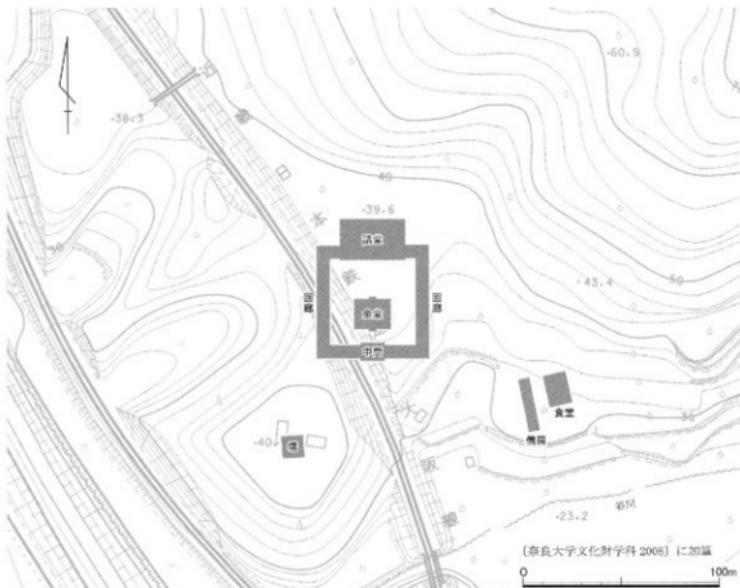


図65 鳥坂寺の立地

所である。塔の主軸は真北から約4.5°西に偏している。ところで、鳥坂寺の南側には大和川を隔てた玉手山丘陵北端部に片山廃寺が存在する(図2)。創建は700年前後とされ、自然石の延石を布いた凝灰岩切石の墻上積基壇をもつ塔跡が有名である(柏原市教育委員会1983)。基壇一辺長は11.87mで、主軸を真北から東に振っている。三重塔か五重塔か判然としないが、標高はおよそ37.5mと鳥坂寺の塔よりは低いものの、両者は大和川を中心にして平面的にも立面的にも対を成しているように見える。

ここで大和川と鳥坂寺周辺の古代寺院の関係を視覚的にとらえてみると、例えば船で下流から上流に遡る人々は、当初は広々とした河内平野の彼方に小さな寺院を望見しているが、石川との合流点が近づくにつれてその姿は次第に大きくなり、川幅の狭まつた高井田周辺では两岸に迫る玉手山丘陵や生駒山地の山腹・山上にその威容を仰ぎ見ることになる。こうした視覚的に最も効果的な場所に建つ寺院こそが鳥坂寺であり片山廃寺ということになろう²⁾。もちろん、大和川が古代の重要な水上交通路であったという記録は、『日本書紀』の斐世清に関する記述から推測する以外にはほとんど残されていない。しかし、柏原市芝山や亀瀬付近の大和川で産出する石材が大和南部の前期古墳に利用されていることは広く知られており、加えて大和川に沿った柏原市の松岳山古墳や玉手山古墳群で瀬戸内海を越えた讃岐の石材が利用されていることなども考え合わせると、大量輸送手段と

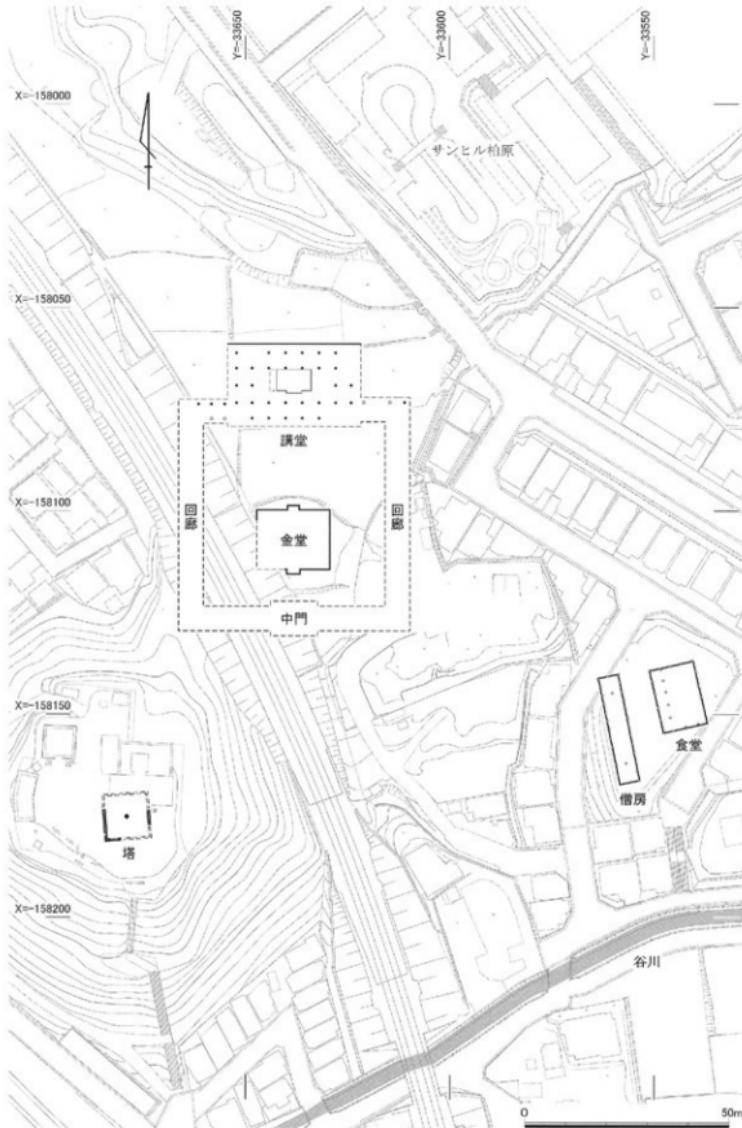


図66 鳥坂寺の建物配置

して船の他に見るべきものがなかった当時、時代は降るが飛鳥・奈良時代においても大和川の河川交通は盛んであったと思われる。こうした意味で、多くの文物や人々が行き交う重要交通路としての大和川から仰ぎ見る寺院建築は、土木・建築技術の水準の高さを示すとともに、国家の精神的支柱となった仏教の宗教的威信を誇示する格好の記念物であったに違いない。従来、鳥坂寺の伽藍配置については、『報告書』でも論じられたように地形の制約を受けて塔の位置が南西にずれた四天王寺式伽藍配置とされてきた。しかし、地理学的な視点で大和川との関係からとらえなおすと、塔の位置は大和川からの景観を意識して主体的に選択されているとする理解が適當かもしれない。

このように鳥坂寺の建物は、大和川や大和川に注ぐ谷川に向けて張り出した2つの尾根上に広がっているが（図65・66）、いざ寺域の範囲や境界を明確に描き出そうとすると、平地寺院に比べ地形的な制約も大きく、寺域を区画する溝・柵・築地等の遺構、あるいは中心伽藍や寺域の南辺を限る中門・南大門等の遺構が見つかっていない現状では、かなり難しいといわざるを得ない。こうした判断の上で、敢えて限られた資料から寺域についての推測を試みるとすれば、南北方向については、古代から中世の集落が展開した講堂北側の丘陵を除外すると、講堂跡周辺の平坦面から南の谷川までがその範囲と考えられ、金堂跡中軸線上でその距離を測るとおよそ210m（約2町）になる。東西方向については2つの尾根を取り込んだ範囲ということになるが、東側の小尾根には僧房・食堂と推定されている建物と同時期の南北方向に延びる集石造構があり（図17）、金堂跡中軸線からおよそ111m（約1町）の距離にあることから、『概報』でも指摘されたように寺域の東限になる可能性がある。一方、西側は金堂跡中軸線からおよそ110mの距離で塔跡の尾根裾まで収まる。このように考えると鳥坂寺跡の寺域としては、およそ2町四方の範囲が意識されていたのではないかと推測される。

第2節 鳥坂寺の創建から廃絶

鳥坂寺跡で出土した7・8世紀代の軒丸瓦については、I・II・III・IV・V・V'・VI・VII・VIII・IXa・IXb・X・XI型式の13種類（今井・林の分類に従えば14種類〔今井・林2010〕）が知られているが、他に船橋庵寺亜式とされる素弁八葉蓮華文軒丸瓦、V型式の文様をやや雑にした重弁八葉蓮華文軒丸瓦、V型式の花弁を扁平にして間弁に珠文を配した重弁八葉蓮華文軒丸瓦、間弁のない複弁八葉蓮華文軒丸などが採集されている。同じく軒平瓦にはI・II・III・IVの4種類（今井・林の分類に従えば6種類〔今井・林2010〕）がある。他に、出土・採集資料には平瓦凸面に朱線の見られるものや広端面に重弧文状の沈線・凹線を加えたものがあり、これらも軒先に利用された可能性が高い。また鶴尾にはA・B・C・C'・D・D'・Eの7種類がある。

鳥坂寺跡から発掘調査で出土した軒丸瓦・軒平瓦と調査区（建物）との関係は表12にまとめた。包含層の削失や破片の大・小など比較条件が均質ではないため建物と所用瓦の関係を正しく反映しているとは限らないが、軒丸瓦についてみると、金堂跡では素弁のI型式と重弁のV型式が主体になり、講堂跡周辺では重弁のV・VII・VIII型式が主体になり、塔では主体になる瓦が不明確というこ

表12 調査区分軒丸瓦・軒平瓦数量

型式	塔	金堂	講堂	講堂東	講堂西	講堂北	僧房/食堂	計
軒丸瓦	I	2	25	3	1		1	32
	II	1						1
	III	1					1	2
	IV	1						1
	V	1	39	6	3	1	1	54
	V'		5					5
	VI	2	2	2			1	7
	VII		1	2		1		6
	VIII	3	6	6	1		2	18
	IX a			1	1			2
	IX b		1					1
	X	3						3
軒平瓦	XI	1	2	1			2	6
	II		12	2			3	27
	III		23	3	1			2
	IV		2					2
計		15	118	28	9	2	1	14

となる。なお、瓦当面を内区・外区に分けた複弁のXI型式は時期が降る8世紀中頃の瓦であり、補修用として使われたものであろう。こうした関係を見る限り、素弁から重弁へという軒丸瓦の素朴な年代観に立てば、鳥坂寺の建物の建築順は金堂→講堂ということになる。塔については、他の建物ではほとんど使用されていないII～IV型式の存在やV型式の使用が不明確なことから、軒丸瓦の年代からみて8世紀以降には降らないものの、講堂以前に建てられた、講堂に連れて建てられた、あるいは金堂→講堂とは別の契機によって建てられたなど幾つかの解釈が可能であり、決め手に欠けるのが現状であろう。なお中門や回廊の時期もはっきりしないが、仮に中門の位置が想定のように金堂に近い位置だとすれば、かなり遅れて建てられた可能性も考えられる。

軒平瓦との対応関係も明確ではないが、従来から知られているように共通の叩き目をもつという点で軒丸瓦V型式と軒平瓦I型式がセットになり、胎土・色調・焼成などの共通点から軒丸瓦V～VIII型式と軒平瓦II型式がセットになり、軒丸瓦IX(a・b)・X型式と軒平瓦III型式がセットになる〔今井・林2010〕。問題は軒丸瓦I型式と軒平瓦IV型式であろう。素弁の軒丸瓦I型式は軒丸瓦全体の中では最も古いものと考えられるが、軒丸瓦V型式と共に通する要素も多く〔大脇2002〕、ほぼ同時期と考えれば軒平瓦I型式とセットになる可能性もある。ただ軒丸瓦I型式は赤褐色で硬質のものが多いという特徴があり、この点では類似した軒平瓦I型式は見当たらない。『報告書』で指摘された朱線付き平瓦とのセットということもあるうし、広端面に細沈線や凹線を加えた平瓦との組み合わせも考えられよう。今後の調査等でこうした平瓦の事例が増えれば、軒平瓦として一型式を付与することになるかもしれない。また、軒平瓦IV型式は7世紀後半に琵琶湖東部地域を中心に分布する朝鮮半島からの影響を受けて成立した軒平瓦である。本例はその型式組列の中では初期にあたるため〔大脇2005〕、いずれかの重弁文軒丸瓦と組み合わせる可能性もあるろう。

ところで軒丸瓦I・V型式を所用瓦とする金堂跡からは鶲尾C・C'・Eが出土している。鶲尾C・C'は唐様式初期の川原寺系列の鶲尾であり、その川原寺例よりは若干新しく670年代と考え

られている〔大脇2002〕。一方、鶴尾Eは唐様式よりも古い百濟様式の胴部有段鶴尾であり〔大脇2002〕、沈線状の低い段という特徴は同系列鶴尾の中では新しくなるものの、7世紀中頃の年代が与えられよう。したがって創建当初の金堂には鶴尾Eと軒丸瓦I・V型式が用いられ、その年代は7世紀第Ⅲ四半期の前半ということになる³⁾。この年代は、例えば軒丸瓦I型式についての森郁夫の年代観とも矛盾しない〔森1980〕。また、講堂跡出土の鶴尾Dは百濟様式の胴部無文鶴尾であり7世紀後半の年代が与えられているが〔大脇2002〕、この年代は軒丸瓦とも矛盾せず、講堂の年代を示していると考える。

鳥坂寺では、7世紀中葉の金堂造営に始まった主要伽藍の造営が、7世紀後半には一応の完成をみたと思われる。この間、東側の小屋根では造寺に伴う工房が営まれるとともに、斜面の削平や窪地の埋め立てによって平坦面が造成され、8世紀代には寺院付属の雜舎群などが建てられることになった〔網2001〕。また、発掘調査で検出した金堂基壇は延石に自然石を使用した凝灰岩壇上積基壇であるが、南面階段付近では延石下の整地層から瓦や8世紀代の土師器が出土することを確認しており、8世紀になって当時の外装を改修した可能性を否定できない⁴⁾。塔基壇についても、雨落溝周辺の整地土から凝灰岩粉・片が検出されていて、ある時期には凝灰岩切石の基壇であったとも考えられ、講堂基壇についても、発掘調査で検出した外装は自然石を並べただけの簡素なものであるが、西辺における凝灰岩据付痕から同様に考えられる。

このように鳥坂寺の堂・塔は、軒丸瓦・軒平瓦からみれば建物そのものは創建当初の姿を留めながら、基壇は何回か改修されていることがわかる。しかし、あくまで想定の域を出ないが、『続日本紀』に記されたように天平勝宝8年(756)に孝謙天皇が訪れた際の当寺の寺容は、主要伽藍や雜舎が整い、堂・塔の基壇も切石積の格式の高い最盛期の姿であったと考えておきたい。

こうした鳥坂寺の廃絶時期は判然としない。寺域東側の雜舎域で検出された戸井戸からは「鳥坂寺」墨書土器を含む10世紀初頭の土器が出土しており、この時期まで寺院として存続していたことは疑いない。ただ平安時代の瓦がほとんど出土していないので、寺域西側の主要伽藍が7・8世紀と同じ姿で建っていたとも思えない。講堂須弥壇の拡張部に穿たれた土坑から出土した延喜通宝や、北面回廊で比較的まとまって出土した10世紀以降の土器などからみて、おそらく10世紀の間に廃絶したものと思われる。その要因も定かではないが、発掘調査で火災の痕跡等は見出されていないので、寺院経営を支えた経済基盤の喪失と建物の自然腐朽によって次第に廃絶に至ったのではないだろうか。

第3節 鳥坂寺建立の歴史的背景

鳥坂寺については藤沢一夫・山本博・山本昭・上田睦などの諸氏によって鳥取氏(『新撰姓氏録』河内国神別)の氏寺と理解されてきた。寺院周辺地域が『和名類聚抄』の河内国大県郡鳥取郷に比定される可能性が高く、塔跡には鳥取氏の氏祖である天湯河桁命を祀る神社が鎮座していることなどが主な根拠である(藤沢1968、山本博1971、山本昭1987、上田1994)。ただし鳥坂寺の位置その

ものは、自然地形から鳥坂郷にあたるとも考えられている〔山本昭1973〕。

ところが最近になって、鳥坂寺創建の背景について、こうした氏寺としての理解とは異なる見解も提起されるようになってきた。それは、鳥坂寺を含む河内六寺が近隣の河内大橋架橋に伴う橋寺として知識によって創建されたという理解である〔竹内2009〕。その構想の端緒は、本書でも報告した鳥坂寺跡出土の籠書文字瓦について、河内国飛鳥評（アスカベノコホリ）の志母（シモ）の五十戸（サト）『和名類聚抄』の河内国安宿郡資母郷）の一般民衆階層に属する玉造部某が高井田廃寺造営に伴う知識行為として瓦を寄進したという理解から始まる。そして大和川・石川合流域では、大和川で分断されている重要交通路を結ぶための知識事業として「河内大橋」が架橋され（和歌山県花園町=かつらぎ町医王寺旧蔵『大般若經』願文から）、その東詰に密接して並ぶ7世紀後半という同時期に創建された寺院群=河内六寺は、行基を導師として起工された山背國の山崎橋と山崎院（山崎庵寺）の関係のように、橋の維持管理とともに知識活動を主導する僧侶の活動拠点として造営されたのではないかと考えた。そして、名称が行政区画としてのサトに一致することから、サトを単位として組織された知識が7世紀後半に造営した「五十戸知識寺院」ではないかとした。その上で、サト単位の知識活動は閉鎖的なものではなく、鳥坂寺跡出土の籠書文字瓦が示すように、他地域にも門戸を開いた柔軟なものであったと論じている。

7世紀後半、大和川・石川合流域を中心とした河内国大県郡・志紀郡・安宿郡地域では、齊明天皇5年（659）の阿弥陀三尊像造立や河内国志紀評（郡）の知識による朱鳥元年（686）の『金剛場陀羅尼經』（日本最古の写経）写経などのように、民間知識による仏教活動が盛んであり〔竹内2009〕、交通の要衝という地理的条件を考えれば、7世紀後半における道昭の山崎橋や道登の宇治橋架橋という事例もあり、知識活動の一環として主要交通路を分断している大和川に架橋事業が行われたとしても不思議ではない。竹内も引用した『大般若經』（通称家原邑知識經）識語にみる家原邑は河内国大県郡の一郷であり、その知識による天平11年（739）以来の架橋は修復工事とも読まれているので〔遠藤2010〕、さらに以前から大和川に架かる橋の存在を窺うことができる。こうした前提に立てば、従来から指摘されていた河内国大県郡域に所在する寺院群（河内六寺）の立地の特異性についても、知識を中心とした仏教信仰に基づく社会的実践事業の象徴として位置づけられる交通路の整備や大和川架橋と、そうしたインフラを維持・管理しながら宗教活動の拠点となるべく集中配置された寺院群として理解することが適當かもしれない。鳥坂寺創建の契機もそうした寺院群の一つとして位置づけられるが、鳥取氏の始祖である天湯河歎命を奉祀する式内社の存在を無視することは難しく、竹内も述べるように知識の有力者として鳥取氏が関与している可能性は高い^⑨。

ただし、竹内が論じるようなサト（五十戸、里、郷）という行政単位によって集結された知識であったとすれば、純粹に民間団体・民間事業と位置づけることは難しいかもしれない。実際に民衆を勧化し、民衆を結縁し、民衆を主導する導師は有徳・高徳な僧侶であり、導師が組織した様々な職能集團・技術者集團によって活動が支えられていたとしても、行政機構の支配・管理組織を単位とする以上、律令制を敷衍し、国家仏教を指向する官の意思が反映していたとも考えられる。そうした点で、大和川・石川合流域における7世紀後半の知識は、当初は国家から否定された行基の活

動と一線を画するものであったかもしれない。

鳥坂寺跡の軒丸瓦の主体は藤沢一夫によって原山廃寺式と呼ばれた重弁型式であり、この意匠は河内国大郡・安宿郡を中心に分布する地域性の強い文様であるが、河内国志紀郡・渋川郡・若江郡・高安郡にもあり、一部は山背国まで達しているという〔上田2010〕。また軒丸瓦Ⅱ型式・Ⅲ型式はそれぞれ山背国乙訓郡の乙訓寺や山崎廃寺に同范例があり、技術的な検討から瓦范の移動、製品の搬入、瓦工人の移動などが論じられている〔藤田1991〕。加えて鳥坂寺跡採集の素弁八葉蓮華文軒丸瓦（船橋廃寺式）は山崎廃寺でも知られている〔林1987〕。一方軒平瓦をみれば、琵琶湖東部に分布の中心がある波状重弧文軒平瓦が鳥坂寺跡で出土している。この他、講堂須弥壇北側で出土した椅像独尊佛は山城国府（山崎廃寺）出土例と同形・同大である〔大山崎町教育委員会2003〕。このように鳥坂寺跡と山背国乙訓郡の寺院遺跡とは、一部の遺物で共通した意匠が見られ、密接な関係が窺われる。先述したように、鳥坂寺もまた仏教に結縁した同信同行的集団である知識の利他行実践活動の一環として創建されたのであるとすれば、こうした事象の背後にも、知識導師である菩薩僧の遊行活動が反映しているのかもしれない。

第4節 まとめ

柏原市高井田に所在する古代寺院遺跡（高井田廃寺）は、第2章第3節でも詳述したように、長い地名考証の歴史に加え、発掘調査で寺名を墨書した土器が出土したことにより、天平勝宝8年（756）、東大寺大仏完成祈願や聖武太政天皇病気平復祈願などを目的に挙行されたと思われる孝謙天皇の河内六寺巡幸において、最後に行幸の誉れに預かった鳥坂寺であることが確かになった。

こうした鳥坂寺跡は、奈良時代の正史である『続日本紀』のような古代の文献資料に記録された寺院と、発掘調査が行われて遺物・遺構の内容が明らかになった遺跡が一致する稀有な例として、仏教文化に彩られた飛鳥・奈良時代の国や地域の歴史を究明する上で極めて重要な遺跡である。加えて、金堂跡の壇上積基壇・階段は他に例を見ないほど遺存状況が良好であり、建築史の分野でも、目視可能な立体的構造を留める建築関連遺構として、研究上不可欠な資料になっている。例えば、近年多くの遺跡・史跡で採り入れられるようになった復元的手法の到達点ともいいくべき平城宮大極殿復元事業において、これらの遺構がもたらした法量・構造・意匠などの建築関連情報が大いに参考にされているという〔島田2009・深澤2009〕。

この鳥坂寺跡について、あらためて発掘調査成果の概要をまとめると、寺院は大和川に向けて張り出した尾根上に立地し、寺域はおよそ2町四方と推定され、この範囲の中で、西側の主尾根には金堂・講堂・塔などの主要伽藍が配置され、谷を隔てた東側の小尾根には、僧房や食堂あるいは寺院経営を支える付属雑舎が營まれた。造営工事は7世紀第3四半期の前半に始まり、主要伽藍は7世紀の間に整えられたが、その他の建物は8世紀になって整備されたと考えられる。その後、天平勝宝8年（756）には孝謙天皇の行幸を迎えたが、次第に寺勢は衰微し、10世紀の間には建物の自然腐朽を主な要因として廃絶した。主要伽藍は、金堂と講堂を南北一直線上に配置し、回廊は金堂

を開んで講堂に取り付き、三重と推定される塔はこの回廊の内側ではなく、金堂から南西方向に離れた寺院最高所の尾根先端部に位置している。こうした伽藍配置、特に塔の位置については、大和川からの眺望を意識して選定されたのではないだろうか。大和川の対岸には8世紀初頭に創建された片山庵寺の塔があり、両者が対をなして、水面から高層の塔婆を仰ぎ見る独特的の景観を生み出している。

鳥坂寺では、250年前後の存続期間の間に、寺院を構成する建物にも幾多の変遷が認められる。例えば回廊は、想定した中門の位置が金堂に接近しており、これを尾根上の狭小な平坦地に存在した金堂・講堂の位置に制約された結果とみれば、創建当初の中門は別の場所にあり、回廊も当初の計画には存在しなかった可能性がある。ただし、いずれにしても中門の位置は近鉄線の開削によって失われており、確かな位置を導き出すことは難しい。また鳥坂寺を代表する遺物として、昭和4年に発見され東京国立博物館に展示されている鷲尾が名高いが、発掘調査では複数型式の鷲尾が出土しており、意匠の違いが建物の格を反映するとともに、金堂では7世紀後半に時期を追えて異なる鷲尾が大棟を飾っていた可能性が高い。同様の状況は建物の土台である基壇外装にもみられ、河内国分寺の塔基壇とともに遺存状態が極めて良好な凝灰岩壇上積基壇として知られる金堂基壇にしても、おそらく8世紀代に修復あるいは改装されたものと思われ、自然石を並べた講堂基壇の外装も当時のものとは異なっているようである。ただ、ある時期には金堂・講堂・塔それぞれの基壇が格式の高い凝灰岩切石積基壇であったことは間違いない。

こうした鳥坂寺跡の発掘調査成果は、飛鳥－奈良－平安と続く古代国家形成と変貌の時代において、大和と河内・西方諸国を結ぶ交通の要衝として位置づけられる当地域の歴史像を再構成する上で極めて有意な内容を含んでおり、特に鳥坂寺などの河内六寺や諸寺院が集中して造営された景観は、仏教や仏教に結縁した知識の信仰に基づく実践的活動が地域の社会や歴史を理解する上で重要な役割を担っていることを示している。本書では鳥坂寺創建の背景に、古代国家の確立に向けて中央集権的支配体制や仏教統制政策の強化が図られた過渡的時代における、伝統的内地支配構造とバランスを保ちながら活発化した知識の活動を推定した。河内六寺の他の寺院遺跡における遺物・遺構の遺存状況がそれ程良好とは言えないだけに、鳥坂寺跡で検出された基壇遺構や軒瓦等の意匠や製作技術に見られる地域を超えた諸関係は、朝鮮半島をも含めた工人群やその組織者・主導者の活動を反映しているという点で、当該期における知識の実態を示す貴重な資料と評価することができよう。

鳥坂寺跡を将来に亘って保存するには、まず鳥坂寺跡が古代史研究や地域の歴史を究明する上で極めて重要な遺跡であるという認識を多くの市民が共有する必要がある。そのため、発掘調査中には現地説明会、市立歴史資料館でのスポット展示、市主催イベントでの鳥坂寺紹介コーナー出展、広報誌での鳥坂寺紹介記事の連載、シンポジウムなどを実施したが、これからも鳥坂寺跡に関する情報を継続的に、あらゆる機会を通じて、市民に向けて発信し続けていくことが重要な課題となるだろう。あわせて、こうした意識面での啓発とともに遺跡の史跡指定や公有化を図り、市民協

備で保存・活用についての環境整備を進めていきたいと考えている。

註

- 1) 尾根上に位置する鳥坂寺では、正しく仏地と僧地が区分されているとはいえないが〔上原1986〕、少なくとも仏に係る空間（信仰に係る空間）と僧に係る空間（生活や寺院経営に係る空間）は、立地を異にすることで明確に区分されている。
- 2) こうした景観は、もちろん藤原宮と同範の軒丸瓦が出土する片山庵寺創建以後に現出したものであり、8世紀代ということになる。
- 3) この年代は、I・V型式軒丸瓦の丸瓦部に繩目叩きが使用されていることから、日本における繩目叩き使用が川原寺以降という一般論からすれば古すぎるかもしれない。ただ鳥坂寺跡の丸瓦は全て行基式であり、創建時の瓦は鷲尾も含めて川原寺系ではないので、大和の大寺とは異なる出自や年代が検討されるべきであろう。例えば亀田修一は數系統の渡来系工人の関与・動員を指摘している〔亀田1994〕。
- 4) ただし、当初の基壇が切石積基壇であった可能性を否定するものではない。
- 5) こうした点では、7世紀後半段階の知識あるいは知識結は、例えば鳥取氏のような在地豪族の伝統的権威に依存した地縁的・族縁的集団としての性格が強いといえるかもしれない〔連水1986〕。
- 6) これと同範または踏み返しの関係にある火頭形三尊佛は奈良県飛鳥村の橘寺、奈良市の阿弥陀寺、大阪府交野市旣子窟寺、京都府八幡市旣西山庵寺、京都市の法觀寺（網氏のご教示による）、滋賀県大津市の穴太庵寺、和歌山县橋本市の神野々庵寺、岡山县津山市の久米庵寺などで出土している（倉吉博物館1992）。なお、やや異なる火頭形三尊佛は柏原市太平寺庵寺（智藏寺）でも出土しているという〔大阪市立博物館 1991〕。

参考文献

- 足利健亮 1978 「河内国」『古代日本の交通路』I 大明堂
- 網 伸也 2001 「畿内における在地寺院の様相」『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 池田谷久吉 1930 「第九 烏坂寺址発掘鶴尾」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第1輯 大阪府
- 今井晃樹・林 正應 2010 「高井田廃寺の出土瓦」『古代瓦研究—重弁蓮華文軒丸瓦の展開—・藤原宮式軒瓦の展開—』V (古代瓦研究会シンポジウム記録) 奈良文化財研究所
- 今井啓一 1963 「所謂『烏坂寺』について」『古代文化』第10巻 聰古代学協会
- 上田 隆 1994 「渡来系氏族の造った河内の古代寺院」『渡来系氏族と古代寺院』 帝塚山考古学研究所
- 上田 隆 2010 「河内の重弁蓮華紋軒丸瓦—原山廃寺式を中心に—」『古代瓦研究—重弁蓮華文軒丸瓦の展開—・藤原宮式軒瓦の展開—』V (古代瓦研究会シンポジウム記録) 奈良文化財研究所
- 上原真人 1986 「仏教」『岩波講座 日本考古学』4 岩波書店
- 遠藤慶太 2010 「天平勝宝六年家原色知識経の識語について」『史料』第228号 皇學館大學史料編纂所
- 大阪朝日 1929 「新聞所見 奈良朝盛期の瓦鶴尾発掘」『考古学雑誌』第19巻第6号 考古学会
- 大阪市立博物館 1991 「大阪の名宝—信仰と美術の精華—」
- 大阪府教育委員会 1968 「河内高井田・烏坂寺跡」(大阪府文化財調査報告書 第19輯)
- 大山崎町教育委員会 1981 「大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第1集」
- 大脇 潔 1991 「いろいろな基壇化性」『古代の寺を考える年代・氏族・交流—』帝塚山考古学研究所
- 大脇 潔 1999 「鶴尾」(日本の美術No.392) 至文堂
- 大脇 潔 2002 「大阪府柏原市烏坂寺跡(高井田廃寺)出土鶴尾の考古学的調査」『瓦塔・鶴尾』(東京国立博物館所蔵重要考古資料術調査報告書) 東京国立博物館
- 大脇 潔 2005 「老北京胡同幾紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代攝河泉寺院論叢集』第2集 摂河泉文庫
- 柏原市教育委員会 1983 「片山廃寺塔跡発掘調査概報」
- 柏原市教育委員会 1985 「大県・大県南遺跡－下水道管渠埋設工事に伴う－」(柏原市文化財概報1984-VI)
- 柏原市教育委員会 1986 a 「烏坂寺－寺域の調査－1983年度・1984年度」(柏原市文化財概報1985-V)
- 柏原市教育委員会 1986 b 「高井田遺跡 I」(柏原市文化財概報1985-VII)
- 柏原市教育委員会 1987 a 「高井田遺跡 II」(柏原市文化財概報1986-VI)
- 柏原市教育委員会 1987 b 「高井田横穴群 II」(柏原市文化財概報1986-VII)
- 柏原市教育委員会 1989 「高井田遺跡III」(柏原市文化財概報1988-IV)
- 柏原市教育委員会 1990 a 「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1989年度」(柏原市文化財概報1989-I)
- 柏原市教育委員会 1990 b 「高井田遺跡・本郷遺跡」(柏原市文化財概報1989-IV)
- 柏原市教育委員会 1995 「柏原市遺跡群発掘調査概報1994年度」(柏原市文化財概報1994-IV)
- 柏原市史編纂委員会 1973 「柏原市史」第2巻・本編 (1) 柏原市役所
- 柏原市立歴史資料館 2007 「河内六寺のかがやき」(2007年度夏季企画展展示図録) 柏原市立歴史資料館
- 柏原町史刊行会 1955 『柏原町史』

- 亀田修一 1994 「瓦から見た畿内と朝鮮半島」『古代王権と交流5 ヤマト王権と交流の諸相』名著出版
- 北野耕平 1975 「日本における埴正積基壇の成立と新羅系要素」『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』吉川弘文館
- 倉吉博物館 1992 「埴仮ー土と火から生まれた仏たちー」
- 佐藤 隆 2000 「後期難波宮の遺物2例」『難波宮址の研究』第11 嘉大阪市文化財協会
- 沢田むつ代 2002 「鶴尾に付着する織物について」『瓦塔・鶴尾』(東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書) 東京国立博物館
- 島田敏男 2009 「基壇高と基壇形式」『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究1 基壇・礎石』(奈良文化財研究所学報第79冊) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 竹内 亮 2009 「五十戸と知識寺院ー鳥坂寺跡出土瓦書瓦の釈読からー」『古代文化』第60巻第4号 嘉古代学協会
- 田辺征夫 1978 「古代寺院の基壇—切石積気基壇と瓦積基壇—」『原始古代社会研究』第4巻 校倉書房
- 東京国立博物館 2002 「瓦塔・鶴尾」(東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書)
- 長田富作 1955 「第四章 奈良朝時代」『柏原町史』 柏原町史刊行会
- 奈良国立文化財研究所 1997 『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
- 奈良大学文化財学科 2008 『古市古墳群旧地形図』
- 花谷 浩 1995 「丸瓦作りの一工夫ー畿内における竹状模骨丸瓦の様相」『文化財論叢』II 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
- 林 亨 1987 「大山崎町出土瓦」『長岡京古瓦聚成』 向日市教育委員会
- 速水 侑 1986 『日本仏教史 古代』 吉川弘文館
- 深澤芳樹 2009 「鶴尾の復原」『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究4 瓦・屋根』(奈良文化財研究所学報第80冊) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 藤田さかえ 1991 「乙訓都寺院の7世紀の軒瓦」『京都考古』第58号 京都考古刊行会
- 藤田さかえ 1992 「軒瓦にみる7世紀の乙訓の一側面」『長岡京古文化論叢』II 中山修一先生喜寿記念事業会
- 藤沢一夫 1968 「高井田魔寺という寺院」『河内高井田・鳥坂寺跡』(大阪府文化財調査報告書 第19輯) 大阪府教育委員会
- 藤沢一夫 1975 「総説」『柏原市史』第四巻 史料編(1) 柏原市役所
- 森 郁夫 1980 『かわらのロマンー古代からのメッセージー』 毎日新聞社
- 森下悦治 1928 「河内高井田出土「足駄」に就て」『考古学雑誌』第18巻第6号 考古学会
- 安村俊史 2000 「鳥坂寺僧房周辺出土平瓦の再整理」『平尾山古墳群ー1999年度ー』(柏原市文化財概報1999-II) 柏原市教育委員会
- 安村俊史 2007 「山下寺」『河内六寺のかがやき』(2007年度夏季企画展展示図録) 柏原市立歴史資料館
- 山路直充 2009 「「大伴五十戸」と記銘された軒丸瓦」『駿台史学』第137号 駿台史学会
- 山本 昭 1973 「古代の柏原」『柏原市史』第2巻・本編(1) 柏原市役所
- 山本 昭 1975 「考古資料」『柏原市史』第4巻・史料編(1) 柏原市役所
- 山本 昭 1987 「謎の古代氏族・鳥取氏ー鳥取氏は捕鳥の氏族かー」 大和書房
- 山本 博 1971 『竜田越』 学生社

写 真 図 版

図版1 烏坂寺跡遠景



塔跡(▼)と大和川 (南西から)



烏坂寺跡遠望 (南から)

図版2 平成21・22年度 塔跡



2区 雨落溝（南から）



1区 雨落溝（南から）



3区 雨落溝（南から）



1区 雨落溝断面（北から）



塔跡 全景（南西から）

図版3 平成21・22年度 金堂跡



1区 階段全景（北西から）



1区 階段全景（東から）



1区 階段西側辺の登り葛石・羽目石・段石（南から）



1区 階段東側辺の段石・登り葛石（北東から）

図版4 平成21・22年度 金堂跡



2区 基壇南辺と礼拝石（南から）



2区 基壇南辺と礼拝石（北から）

図版5 平成21・22年度 金堂跡



2区 基壇南辺と礼拝石（東から）



2区 階段（南から）



2区 羽目石と束石（南西から）



2区 調査区南半部の整地層（北から）



2区 階段東辺下の土層断面（南東から）



2区 基壇裏の土層断面（北東から）

図版6 平成21・22年度 講堂跡



1区 磯石 4B（北から）



2区 磯石 5B（南から）

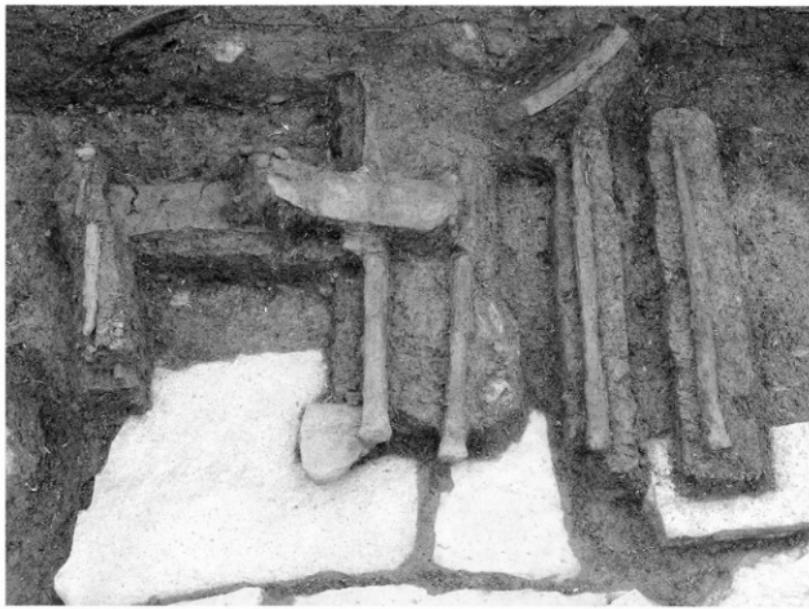


3区 磯石 4F（南から）

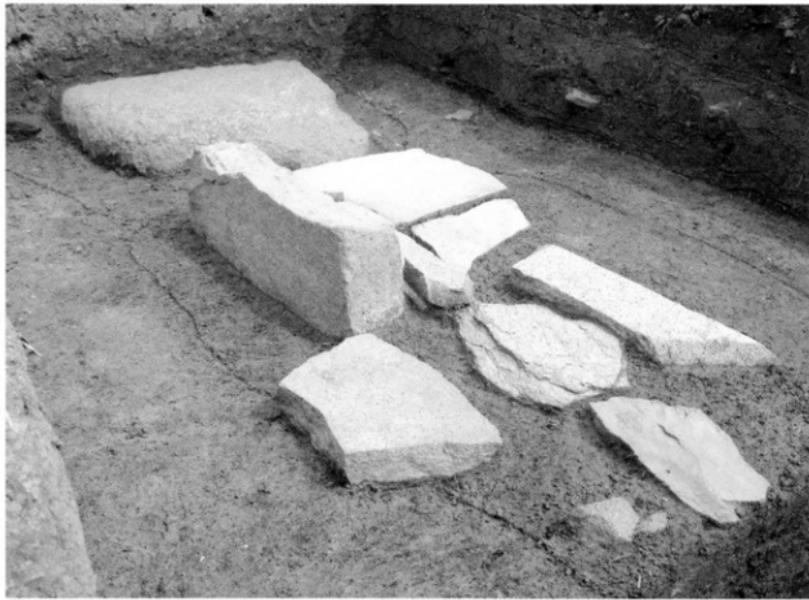


4区 全景（北から 手前の遺物は鰐尾）

図版7 平成21・22年度 講堂跡



4区 講堂背面扉の八双金具・鉄釘（北から）



4区 石組1と礎石1E（北西から）

図版8 平成21・22年度 講堂跡東（回廊跡）



5区 全景（北から）



2区 土坑2（礎石抜き取り土坑 南から）



3区 瓦の出土状況（南から）



3区 磚石（南から）



3区 溝1・磚石（東から）

図版9 平成21・22年度 講堂跡西（回廊跡）



1区 磨石（南西から）



2区 磨石（南東から）



3区 磨石（南から）



4区 土坑2（磨石抜き取り土坑 東から）



2区 遺物出土状況（南から）



2区 磨石・溝1（南から）

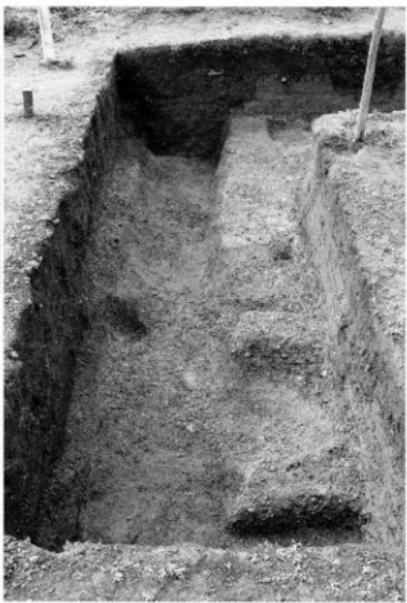
図版 10 平成 21・22 年度 講堂跡北東・北・北西



講堂跡北東 1 区 潟 1 (南から)



講堂跡北 1 区 全景 (北西から)



講堂跡北西 3 区 全景 (東から)



講堂跡北西 2 区 全景 (北から)



講堂跡北西 2 区 落ち込み 2 (東から)



講堂跡北西 2 区 柱穴 1・2 (東から)

図版 11 平成 21・22 年度 瓦



軒丸瓦Ⅰ型式 110



軒丸瓦V型式 119



軒丸瓦VII型式 153



軒丸瓦VI型式 154



軒丸瓦IXa 型式 156



軒丸瓦IXb 型式 158

図版 12 平成 21・22 年度 瓦



軒丸瓦 V型式 120



軒丸瓦VI型式 146



軒丸瓦VII型式 147



平瓦 177



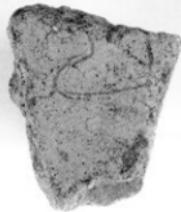
軒平瓦 I型式 162



軒平瓦 II型式 172



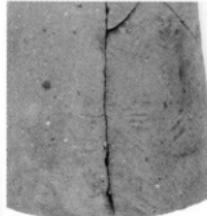
軒平瓦IV型式 175



線画のある平瓦 266



丸瓦 178 凹面



丸瓦 178 凸面



丸瓦 182 凹面



丸瓦 195 凹面

图版 13 平成 21・22 年度 瓦・鷲尾



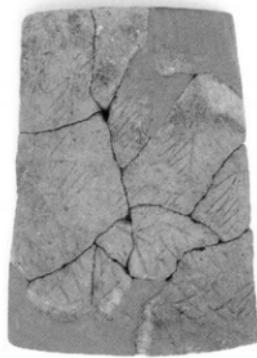
平瓦 217 凸面



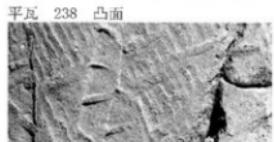
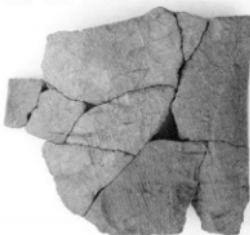
平瓦 236 凸面



平瓦 235 凸面



平瓦 249 凸面



平瓦 238 凸面部分



平瓦 237 凸面



鷲尾 251



鷲尾 260

図版 14 平成 21・22 年度 土器・施釉陶器・埴輪



貝形器・無頸壺 268



土師器・壺 291



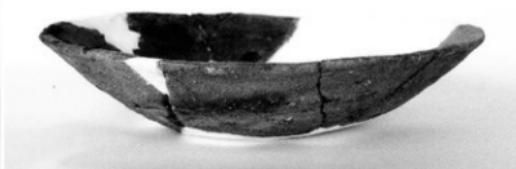
黒色土器・碗 300



土師器・壺 296



土師器・小皿 282



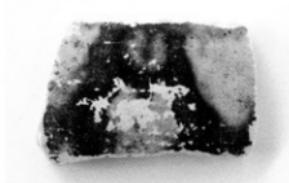
土師器・鉢 290



土師器・小皿 280



円筒埴輪 344 ~ 355



施釉陶器・三彩 310

図版 15 平成 21・22 年度 金属製品・他



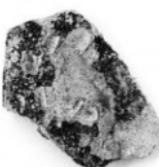
青銅製金具 340



青銅製台座？ 341



青銅製金具 342



青銅製品 339



青銅製金具 338



鉄製品 334



錢貨



鉄製品 333



管玉 359



鉄製品（軸擦金具？） 337



鉄釘 336



鉄釘 335

報告書抄録

ふりがな	とさかでらあとはつくつちょうさほうこくしょ
書名	鳥坂寺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	桑野一幸・山根航・奥田尚
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582-8555 大阪府柏原市安堂町1-43 電話072-972-1501
発行年月日	平成23(2011)年7月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	緯度(北緯) 経度(東経)	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
とさかでらあと 鳥坂寺跡	たかいだ 高井田	27221	TDT	34° 34' 28" 135° 38' 00"	昭和36年 平成22年	6,067.0	保存目的 開発工事

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥坂寺跡	社寺	飛鳥～平安時代	金堂・塔・講堂・回廊・僧房・食堂	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鶴尾・戲画瓦・文字瓦・唐仏・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・施釉陶器・墨書き器・鉄釘・鉄製金具・金銅製金具・金銅仏断片・埴輪	昭和36/37年度、昭和58/59年度、平成元年度、平成21/22年度調査の集成

鳥坂寺跡発掘調査報告書

発 行：柏原市教育委員会

大阪府柏原市安堂町 1-43

発行日：平成23年（2011）7月29日

印 刷：齊 博 社

